

2017年4月21日

## 授業に対する学生のコメントと教員 Y による応答

★以下のコメントは、提出した順になっています（一番下がいちばん先に提出されたもの）。

まず、今回の講義の要約は、レポートを書く際には、書いてはならない言葉がある。「思う」と書くと、理由や根拠を書かなくても気にならなくなる。「思う」と書いてしまったら、それを消して、その代わりに理由や根拠を書く。また、「いろいろ」「さまざま」などと書いてはならず、具体的に書かなければならない。その他にも、「聞いたことがある」などと書かず、出典を調べることや、「楽しかった」「~と知って驚いた」などと単なる感想を書かないことも重要である。

レポートでは、文章は短く切って接続詞でつなぐ。書かなければならない接続詞「たとえば・しかし・それゆえ・つまり」の4つで文章を構成する。テーマを書き、テーマに関連する具体例を挙げ、反対の事例を取り上げて検討し、結論を導き、最後のまとめをするという起承転結を意識して文章を書く。

信用できる情報の見分け方は、まず、制作者を確認することだ。次に、制作者の名前をウェブで検索してみる。誰が書いたか分からない情報は信用できないので、ウィキペディアや匿名のウェブページは使ってはならない。最後に、内容が信用できるかどうか判定するために出典を調べる。出典の書かれていない情報は信用せず、書かれていたら、その出典の方を参照する。

ウェブ情報の使い方には、データを調べる使い方と、論文を検索する使い方がある。データを調べる使い方としては、政府や調査機関が行っている統計データ、新聞記事のデータベースなどがある。論文の使い方としては、「学術雑誌」に掲載された「学術論文」があり、ウェブページから検索することができる。また、ウェブ情報は、きっかけとして利用するのがよい。

そして、今回の講義を終えての意見は、信用できる情報を見分けるのに重要なことは**反復練習**である。その理由は、レポート作成と同様に、一朝一夕で技術を身につけるということは容易ではなく、日々地道に繰り返すことが必要だからだ。昨今、情報リテラシーを身につけることが求められるなか、情報を見極める能力を高めていかなければならない。

コメント [y1]: しっかり実践してください。

レポートを書く際に気をつけなくてはならないことはまず、具体的に書くということである。「さまざま」や「いろいろ」という言葉は抽象的な意味を含んでいるためそのような言葉は使ってはいけない。そして、文章は短くし、接続詞を用いる。長々と文章を書くと、主語や主張が曖昧になってしまう。最後に一番重要なのが引用をするということである。引用元を示さなければコピーになってしまう。場合によって書くべき情報が異なってくる。ウェブページの場合は製作者、タイトル、URL、閲覧日時であり、**ほん本**の場合は著者、タイトル、出版社、出版年、ページであり、論文の場合は著者、タイトル、掲載誌名、出

版年、ページである。ウェブページを引用する場合には注意が必要である。ウェブページの場合、製作者を載せていないページもあり、製作者が載っている場合でも、内容が信用できるかわからない。そういう時は、製作者の名前をウェブにかけてみる。その人の情報を見て、信用できる内容であるのか判断すればよい。しかし、ウェブの使い方には注意が必要だ。データや論文を調べるときにウェブを使うのが、ウェブを引用するよりもよい。ウェブを引用することもできるが、ウェブの「また引用」の文献を用いるという、きっかけとしてのウェブの使い方の方がよい。

コメント [y2]: 引用元

今回の授業では、レポートを書く上で重要なことを学び、まず初めに、レポートを書くときに書いてはいけない語を学んだ。その代表として「思う」が挙げられる。「思う」を書いていけないのは、「思う」を書く理由や根拠を書かなくても気にならなくなるからだ。レポートは、自分の意見を根拠付けて述べるものであり、「思う」の一言で済ませては評価の対象にならない。「思う」を書くのではなく理由や根拠を考えることが重要だ。次に、レポートを書く上で書かなければならない接続詞を学んだ。これは「例えば」「しかし」「それゆえ」「つまり」の4単語である。これらの語を書くことで、起承転結のあるレポートに仕上げることができる。レポートを書くときは、このことを意識しながら書くことが重要だ。次にネットの情報を使用する際に重要なことを学んだ。ネットの情報を使用するときは、情報の出典を書かなければならない。どこの誰の情報なのかはっきりと明示させてなければコピーとして扱われてしまうからだ。また Wikipedia や知恵袋の情報は使用してはいけない。これは誰が書いたかわからないからだ。ネットの情報を使用するときは「信頼できる情報」を使用することが重要だ。

コメント [y3]: 具体的にどのようにして判定するのか書いてください。

今回の講義では、レポートは相手に自分の主張を明確に伝えるという目的で具体的に書かねばならず、書くにあたっての注意や必要事項が内容だった。

主張を明確に伝えるための具体的な例示や、接続詞を適切に使うことによってわかりやすい文章を書くことの必要性を教わった。

レポートが具体性を求める理由は、レポートが他者と考えを共有することを目的としているからである。考えを共有できず、一方的に主張を述べるだけならば、それは「感想」に近いものだ。

やはりレポートは自分の主張を読んでいる側に伝えることに重きを置き、考えを共有した人と議論をし、より良い考えを導き出すことを目指していると思う。より良い考えにより、「社会に貢献する」ことを目的としているからだ。

コメント [y4]: 具体的にどのような貢献をするのですか？

また、社会への貢献でなくとも、レポートの書き方を学ぶことは意義があると思う。議論の発展を目指し、レポートという形での主張でレポートを読む側に理解を促し、内容についての提言といった「工程」を繰り返すことで論理的思考力が身につく。社会生活で必須のものである意思疎通の技術を身に付けるという理由でも、レポートの書き方を学ぶことを通じて、レポートに限らず、意思疎通の素養としての論理的思考力と自分の主張を表現する能力を身に付けることが大事だと「感じた」。

コメント [y5]: 過程

コメント [y6]: 「思う」「感じる」はやめましょう。

今回授業では、最初に前回の小テストの答え合わせをし、そのあと前回の授業のコメント・質問に対する返答を説明してもらい、書いてはいけない言葉と書くべき言葉、引用や根拠になる信用できる情報の調べ方「についての授業だった」。授業コメントに対する説明と

コメント [y7]: 「今回の授業では～」という最初の部分と一致していない。

は、興味・関心は自分の意見の「根拠」にはならず、「動機」であるため、論文中に書いてはならないこと、人間の記憶というものは正確ではないため、必ず出典を調べなければならないこと、反対の立場の意見を検討することで、より自分の意見に説得力が得られるということであった。また、暴力・権力によって正解を出さないために、正解のないことであっても議論すべきであるということ、この授業で養い、実践する能力は民主主義の基盤になるため、この授業で扱っていくこと、である。そして、書いてはいけない言葉では、「思う」「考える」「感じた」など主観的なものであり、そのような言葉を消して、根拠を書かなければいけない。逆に書くべき言葉は、起承転結になるような接続詞であるが、主張は一貫性がなければいけないため、「ところで」は書いてはならない。また、「さまざま」「いろいろ」という言葉は主張を曖昧にするため、それらの言葉の代わりに具体例を書くべきである。さらに、使用する情報は正確なものでなければならない。しかしネットには偽の情報が多くあるため、探した情報の出典を調べ、さらにその情報の出典を調べていく、芋づる方式で正確な情報を調べなければいけない。出典の書いてない情報は基本的に信用してはいけない。

このような今回の授業を通しての私の意見は、ウェブやテレビなどで広く広まっている情報が、必ずしも正しいとは限らないため、ただ見たり聞いたり、読んだりした情報を単純に鵜呑みにするべきではないということである。多くのウェブページの内容には、どんな人でも気軽に書くことができるということで、個人的な主観的内容となることが多いはずだ。だが、本当にその書かれていることがいつも事実であるわけではない。だから、私たちは自分の手で、その得た情報を調べなければならないのである。例えば、「韓国という国は反日である。」という主張をよく目にする。しかし、2015年のデータでは、日本語教育機関が最も多く全体の17.7%である。このデータからすると、一概に反日とは言えない気がしてくる。しかし、その背後には、強制的に日本語教育が植え付けられたという過去もあり、そのような日本教育が今でも盛んな状況を脱するために、現在韓国では日本語ではなく中国語学習者が増えてきている。これは先日受けた日本語教育の現状の授業の内容である。このように、一つの情報だけでなく、その情報の元の情報を調べていくことで、より正確な情報になるだけでなく、新しい情報や意見、またその議論に関する理解も深め、さらに多方面からその議論を見ることができるのである。私はこの方法を用いて、これからの自分の意見に説得力を持たせていけるよう努める。

第二回の総合科学入門講座では、レポートを書くうえで気をつけるべき言葉、ウェブ情報の使い方を学んだ。書いてはならない魔法の言葉1は「思う」であり、今まで書いてきた文章に必ず使用していたものである。この言葉を書いてしまうと理由や根拠を調べて書く必要がなくなり、自らの感想を述べて終わってしまう。魔法の言葉2の「いろいろ」、「さまざま」などの言葉は内容を具体的に書かず抽象的にしてしまうものであり、読み手にも具体的に内容が伝わらない。また、「聞いたことがある」は1と同じく理由や根拠を調べずに自分の記憶に頼っており、「驚いた」は単なる感想である。それゆえ、これらの言葉はレポートを書く時には使用せず、代わりに理由や出典、具体的に内容を書く必要がある。ウェブ情報の使い方については、ウェブページの情報を何でも信用しないことが重要である。ポイントは出所表示や制作者の名前の有無、ウェブ情報はきっかけとして利用することである。現代の社会では誰もが簡単に情報を発信することができる。情報の取捨選択の能力を身につけ、根拠に基づき説得力のある文章を書けるようにこの総合科学入門講座を通して学んでいきたい。

コメント [y8]: 結論

コメント [y9]: なにを? (目的語が欠如)

コメント [y10]: 最終的には、どのような情報が「正確な情報」ですか?

コメント [y11]: 出典は?

コメント [y12]: 何の全体?

コメント [y13]: 根拠は?

コメント [y14]: 根拠は?

コメント [y15]: その授業での情報の出典を調べましょう。

コメント [y16]: ↑実践してくださいね。

コメント [y17]: 出典

今回の授業では、書いてはならない言葉、書かなければならない接続詞、ウェブ情報の使い方について学んだ。書いてはならない言葉には「思う」と言う言葉があった。なぜなら、理由や根拠を書かなくて済んでしまうからである。これを書いてしまった時は、消して、理由や根拠を書く癖をつけることを学んだ。また、「色々、様々、ある程度、何となく、考えさせられた」は具体的に書くことを避けているので、書いてはいけないことも学んだ。一方で、書かなければいけない接続詞は「例えば、しかし、それゆえ、つまり」の4つで、文章は短く切って接続詞でつなぐと良いことも知った。ウェブ情報の使い方については、制作者を調べて信頼の置ける人であるかを確認すること。作者不明の場合は、そのサイトは使わずに、制作者のわかるサイトまで遡ること。出典の書かれていない情報は信用しないこと。政府や調査機関が行なっている統計データや新聞記事のデータを利用すると良いということ。現代社会において信頼できる最終のものは学術論文であることを学んだ。質問したいことは、少しずれているかもしれないが、参照と引用の違いである。参照の場合でも明瞭区分性などは必要なのか、引用は元の文章と同じである必要があるのか。

コメント [y18]: 「参照」は単に読むこと。「引用」はカギカッコで括ってそこに書いてあった文章をそのまま書くこと。

今回の授業では前回に引き続き、主に論文・レポートの書き方、ウェブの利用方法の二つについて学んだ。

一つ目の論文・レポートの書き方について学んだことは、書いてはならない言葉についてだ。たとえば、「~だと思う」「~だと感じる」「~である気がする」「~という印象をもった」などの曖昧な言葉がそうだ。しかし、もしもそのような言葉を書いたらその言葉を消して、代わりに理由や根拠を考えるとよい。それゆえ、客観的な根拠のある論理的な主張をすべきである。

さらに、書いてはならない言葉はほかにもある。たとえば、「いろいろ」「さまざま」「ある程度」「何となく」「考えさせられた」という言葉だ。何を考えたのかなどを具体的に書かなければならない。また、「聞いたことがある」「言われている」などの言葉も使わず、出典を調べたうえで述べるべきだ。さらに、「楽しかった」「~と知って驚いた」というような言葉については、単なる感想であるため評価できない。

次に、書かなければならない接続詞についてだ。文章は短く切って接続詞でつなぎ、主語+述語+接続詞の繰り返しを使う。この際には、起承転結を意識しながら書くべきである。「起」でテーマを述べ、「承」「転」「結」では「たとえば」「しかし」「それゆえ、つまり」のそれぞれの接続詞を使って文章を書く。

コメント [y19]: 何を足すの？

二つ目のウェブの利用方法について学んだことは、前回の復習も兼ねて出所表記に示すべき情報についてだ。ウェブページの場合、「制作者・ページのタイトル・URL・閲覧日時」を明記。本の場合、「著者・タイトル・出版社・出版年・ページ」を、論文の場合、「著者・タイトル・掲載誌名・出版年・ページ」を明記する。

また、その情報が信頼できるものであるかを確認するために重要なことは、制作者を確認することだ。たとえば、実名を出している目立ちたがりの人もいる。しかし、その人の名前をウェブで検索してみるとその人がどのような人であるかがうかがえる。それゆえ、制作者をよく調べたうえでその情報が信頼できるものであるかを判断すべきである。

さらに、出典が書かれていない情報は信用してはいけない。現代社会において、「信用できる記述」は最終的には「学術論文」に至る。ウェブ情報はきっかけとして利用するのがよい。

最後に、今回の授業を通して疑問に思ったことは、ウェブページ・本・論文の中で信用できる情報の割合が最も多いものはどれであるかだ。論文・レポートを書く際には、利用

コメント [y20]: 論文。

したい情報がいかに信頼できるものであるかが非常に大切であるからだ。

## 学術的発想と書き方 2

今回の講義では、前回の内容を踏まえたものと新たな知識の二つを学んだ。

前回の内容を踏まえたものとしては、出所表記についてだ。前回はウェブページ、本、論文の三つの出所表記として必要な情報をまとめたが、その時に注意すべきこととして制作者を確認し、その名前をウェブで検索してみることにし、出典の書かれてない情報を信用せず、**極力**出典の方を参照することの二つである。あくまでもウェブはきっかけとして利用することに留めることが大切だ。では、どのように情報を収集すればいいのか。その回答として、政府や調査機関が行っている統計データや学術雑誌に掲載されている論文を参照することが挙げられる。このデータや得られた情報を正確に示すことは「思う」などの理由や根拠の欠如した文章になることを避けることに繋がる。

新しい知識としては、まず書いていいことと書くべきではないことの代表例についてだ。書くことよみのもの「たとえ・しかし・それゆえ・つまり」の四つを駆使することで起承転結の構成をもった文章を作成することができる。書くべきでないものに挙げられたワードを使用すると、感想のような具体的さを欠いた文章になってしまう。

「信用できる情報」は最終的に学術論文だとおっしゃっていたが、論文の誤りも少なからずあり、その信用度は 100 パーセントとは言い切れない。しかしながら、他の媒体に比べ信用できるとして、広く利用される。**なぜ、論文の信用度が高いのだろうか。**

今回の授業では、安易にウェブページを信用しないということ学びました。たとえば、匿名のものや出典が書かれていないものは、個人の意見であったり、間違っていたりする**可能性があります**。しかし、膨大な量の情報があるネットから正しいものを見つけるにはどうすればいいのか。それには、まずウェブ情報についての**基本的な知識**を持つことです。それゆえ、多くのウェブページを見て反対意見も知った上で自分の意見を持つことができます。つまり、**自分自身で正しい情報、間違っている情報を取捨選択**しなければならないということ。

ネットの情報は**莫大**である。興味深いものもあるが頼れるものはやはり**学術雑誌や統計データ**だけなのだろうか。

今回の授業では、レポートでこの言葉を使ってしまうと理由や根拠を書かなくても気にならなくなってしまう魔法の言葉のことや、正しい情報を引用する方法について学んだ。その中で、僕が特に気になったことが**「出典が書かれていたら、その出典の方を参照する」**という部分だ。情報が載っているウェブの制作者が**著名な人**ではなかった場合は、出典の方を参考にするべきだ。しかし、ウェブの制作者が著名な人だった場合、出典ではなくそのウェブの情報全体を参考にしてもよいのではないか。なぜなら、**ウェブで検索してヒットするほど著名な人物が誤った情報をインターネットに流す可能性は限りなく低い**だろうし、ウェブ情報全体を参考にすることで、出典で述べられている事柄だけでなくそれ以上の知識を得られる可能性があるからだ。出典の記述では理解しづらい部分も、制作者がわかりやすく記述しなおしているかもしれない。このような理由から、**著名な人物が制作したウェブ情報ならば、必ずしも出典のみを参考にする必要はない**。

コメント [y21]: 必ず

コメント [y22]: 論文は、訓練された学者が書き、学術雑誌に掲載されるにあたっては同じ専門の学者が審査します。

コメント [y23]: 「間違っている可能性がある」というより、「基本的に間違いだと思った方がよい」でしょう。

コメント [y24]: 具体的にどんな知識ですか？

コメント [y25]: どのようにして正しいか間違っているかを見分けるのですか？

コメント [y26]: 膨大

コメント [y27]: 統計データ<学術雑誌

コメント [y28]: 「著名なお笑い芸人」が物理学について述べていることは、信頼できますか？

コメント [y29]: 意図的に間違った情報を流さなくても、無知や誤解から間違った情報を流す可能性は十分にあります。

コメント [y30]: どのような人物が書いたものであろうと、必ず出典を参照してください。

今回の授業で以下のことがわかった。一つ目は「思う」という言葉は理由や根拠を書かなくても気にしなくなる、という理由で使ってはいけないということ。二つ目は「いろいろ」や「ある程度」などの言葉は使わずに、具体的に書かなければならないということ。三つ目は文章を短く切って「たとえば・しかし・それゆえ・つまり」という接続詞でつなげる必要があるということ。四つ目はウェブページの記述を引用する場合には製作者の確認をしなくてはいけないということ。五つ目はウェブの情報の使い方としてデータを調べるといった使い方があるということ。六つ目は現代社会における「信用できる記述」は「学術論文」であるということ。最後はウェブを利用する際には、あくまでもきっかけとして使用するのがよいということ。

ウェブページの製作者を確認することや出典の有無、出典がある場合にはその出典を確認することが必要な作業であり、あくまでもウェブ情報はきっかけに過ぎないということを知れて良かった。なぜならウェブページを閲覧するとき、もしくはウェブページに書かれていることを利用するとき、製作者や出典がわかると、そのページに書かれている情報が信用するに値するものかどうかの大まかな判断がつくからだ。しかし、製作者や出典が書かれていたところで信用できる情報であるかどうかは判断できなではないか、という意見も出てくる。しかし、最初に提示してある通り、あくまでもウェブ情報はきっかけに過ぎないのである。出典が示されていたらその出典を参照にすれば良いし、そこからまた学術論文を探していけば良いのだ。それゆえ、ウェブページの製作者と出典の確認は必要である。

第一回の授業コメントと先生のコメントを一通り読んだ。その中で「具体的には?」という具体的な根拠や解決策を示すように促している先生の言葉が 195 個中 32 個あった。また、「ほかの人のコメントを読みましよう」や「読書を読ましよう」といった自分以外の意見の書かれたものを読むように促された言葉が 195 個中 15 個あった。このことから、少なくとも 30 人が具体例を書けておらず、10 人が他の人の意見を読んで勉強すべき人がいるということがわかる。しかし、この二つに当てはまるのはこの 30 人や 10 人だけではない。なぜならこの授業を受けているほとんどが新一年生であり、論文やレポートの正しい書き方について学んだばかりだからだ。なので、この授業を受けている全員が具体例を書くことを常に意識して、ほかの人が書いた意見や本を読む必要がある。

コメント [y31]: まったくそのとおりですね。

今回の講義は書いてはいけない言葉、ウェブ情報の使い方についてであった。

書いてはいけない言葉は、推薦 1 の小論文対策で小論文指導の先生に教えられてきた「~と考える」や、「~とされている」だ。小論文の練習をしていた頃は、魔法の言葉だと思い、勘違いしていた。「~と思う」を変えて、理由を書くことで具体的に述べられることに早く気付くべきであった。

コメント [y32]: どういう意味ですか?

ウェブ情報の使い方、国立情報学研究所の CiNii のことを教えてくださった。高校生の頃、私が大学で研究したいことを明確にさせてもらったサイトで、講義で話して下さって、やはり出典や論文について検索する際には活用できることを確信した。

この講義を受けて 2 回目だが、論文・レポートを書く際に特に気をつけなければならないことは、根拠を持って書くこと。そして、引用する際には出典を明記し、誰が書いたのか分からない情報は利用しないことである。

コメント [y33]: 「政府が信用できる」というわけではなく、「統計学者がとった統計データは信用できる」ということです。

また、信用できそうな政府がとった統計データだけで考えるのではなく、その統計データに関連しそうな内容のデータも探して、様々なデータから比較して考えることも必要であるだろう。

コメント [y34]: 具体的にどんなデータですか?

今回の講義では「レポートの書き方」「ウェブの利用」の2点について話した。

まず、レポートで書いてはいけない言葉は主に4つのグループに分けることができる。

1つ目は「～と思う」だ。この言葉は根拠や理由を必要としなくなり、抽象的な文章になってしまう。この言葉を書きってしまった場合は、消去し代わりに理由や根拠を考える。

2つ目は「いろいろ」「何となく」「考えさせられた」などの言葉だ。これらは具体的に文章が書けない原因となっている。

3つ目は「聞いたことがある」などの言葉だ。これはレポートに必要な出所表示ができていない。内容の信用性を高めるためにしなければならない。

4つ目は「楽しかった」「～と知り驚いた」だ。この言葉を用いると単なる感想になってしまい、レポートとして評価されない。

次に、書くべき接続詞についてだ。「たとえば、それゆえ、しかし、つまり」を使い、短い文をつなぐ。

そして、ウェブを使う際には注意するべき点がある。この際のポイントは、出典が明記されていないのはレポートの資料として用いてはならない。また、出典が明記されていたら出典の方を調べる事が必要だ。また、学术论文、政府、調査機関や新聞のデータベースは信用できるため、これらの情報を利用するべきだ。ウェブ情報は、きっかけとして用いるように上手に利用するべきだ。

今回の授業コメントは、「書いてはいけない言葉」に気をつけて書いてみた。

よく使っていた「～と思う」などの曖昧な表現がないだけで、意見が明確になった。しかし、**本当にレポートでこの言葉を使うことがないのか**。将来的な事やまだ説明されてない事を述べたりする時にはどうするのだろうか。それとも、このような事についてレポートに書かないのだろうか。実際自分が書く時のために知りたい。

今回の授業も、前回に引き続き、論理的な根拠のある文章の書き方、及び、コピペと引用の違いはなにかということ、主な内容でした。それに加えて、引用をする際の、正しいウェブ情報の使い方についてもお話いただきました。政府や調査機関が行っている統計データや新聞記事のデータベース、学术论文の情報がウェブページから得られるというのは、現代の技術が進歩した証です。ネット環境などのなかった時代の人たちは、どれだけの苦勞をして情報を手に入れたのでしょうか。また、「思う」と使ってはいけない、という件から気がついたことですが、清少納言の「枕草子」でも、言い切りの形を使っています。だからかどうかは分かりませんが、彼女の文章には説得力があります。**自分の意見をはっきり伝えることが大切**なんですね。

今日の授業では「確かに」と思える点が多かった。まずレポートで書いてはいけないワードについてだ。「思う」や「いろいろ」や「様々」と言った言葉であるのだが、私もよくあまりよく知らない、覚えていない話の時には「思う」と言った言葉を使って曖昧に返してしまうことがよくある。レポートはそれではよくなく、きちんと自分の意見を起承転結を意識して**断定して**言わなければならない。

二つ目は、ウェブの使い方についてでネットの情報やマスメディアの情報を盲信するのではなく、政府や調査機関が行なっている正確な統計データなどを調べることが大事だ。またウェブ情報では出典が書かれていたらその**出展**を参考にしなければいけないことも

**コメント [y35]:** 学生が書いたレポートには「思う」と書いているものがたくさんありますが、私は減点します。授業でも言いましたが、学术论文で「思う」と書いてあるものは見たことがありません。「将来的なことやまだ説明されていないこと」をデータから推定する場合には、きちんと根拠を示して、推定が合理的である場合にのみ、「～というデータから、～だと推定される」などのように書きます。

**コメント [y36]:** 大切なのは根拠を示すことです。

**コメント [y37]:** 根拠を示して

**コメント [y38]:** 出典

わかった。今回の授業では、書き方だけでなく、**社会に対する鋭い目**を持つことも学べたと思う。

**コメント [y39]:** 具体的にどうい話から、  
どうい目をもったのですか？

いつも、具体的に文章を書きたいと思っても、データの集め方がウィキペディアやヤフー知恵袋からであった。

また、「思う」から「考える」と文末を変えてみたり、自分の考えや感情ばかりを述べていた。

今回の授業を受けて、正式で正確なデータの探し方や信用できる引用の仕方を学んだ。世の中の風潮で、ある問題が一般に知られているとしても、そう言える根拠となるものを探そうに心がけることから始めようとおもった。当たり前を疑うことで良い文章が書けると**感じた**。

今回の授業で疑問に思うことはなかった。"

**コメント [y40]:** 「思う」「感じる」はやめよう。感想になってしまっています。

今回の講義では前回のフィードバックと前回に引き続いてのレポートの書き方を学んだ。今回のレポートの書き方は非常にためになった。特に【書いてはならない魔法の言葉】から【書かなければならない接続詞】のところだ。今まで小論文を書く上では文章としておかしくないか、構成はどうかを重視して「思う」「考える」などの言葉も普通に使っていた。しかし今回の先生の講義で【書いてはならない魔法の言葉】【書いてはならない魔法の言葉 2】の**使ってはいけない理由、評価できない理由**もよく理解できた。【書かなければならない接続詞】では 4 つの接続詞を使用することで起承転結の運びが行いやすくなることがわかった。今後論文を書くときには意識して使うようにしたい。

**コメント [y41]:** 具体的にどうい理由ですか？

今回の授業では前回に引き続きレポートの取り組み方について学んだ。大切なのは楽をしないことである。まず理由や根拠を書かなくて済む「思う」などのマジックワードを使わないこと、そして「いろいろ」や「何となく」などの抽象的な表現をしないことが自分の意見を根拠づけて述べるうえで必要になる。また文章は短く切って接続詞でつなげなければならない。その際「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」の4つが基本となる。「引用」するときは出典をしっかりと記載する。ウェブサイトの場合は制作者、サイト名、URL、閲覧日の 4 つの情報が必要となる。**統計データや論文などのウェブ情報はきっかけとして利用するのが良い。**

**コメント [y42]:** ウェブ情報は、きっちりした根拠となる統計データや論文を探すきっかけとして利用するのが良い。

今回の講義では、前回の講義に加えてより深くレポートの書き方について学んだ。主な内容は、①書いてはいけない魔法の言葉②書くべき接続詞③ウェブの使い方、などだ。

まず、①については、実際に使いがちな言葉だった。レポートは「感想」ではないので、今までやってきた読書感想文のような感覚で書いてはいけないことを学んだ。次に、②では、このようなレポートを書くときに使うべき接続詞を学んだ。書きやすくてつつい箇条書きにになってしまうが、それをやめて、「たとえば」「しかし」「それゆえ」「つまり」に変えなければならないということを知った。③では、Wikipedia や Yahoo!知恵袋などの匿名で投稿できるサイトを使ってはいけないことや、正しいウェブの利用法を学んだ。Wikipedia や Yahoo!知恵袋は、身近に簡単に使うことができるので、レポートのときに誤って使わないようにしなければならない。いかにも正しい情報かのように書かれてあるこ



ともあるが、それが本当かどうかわからないので、しっかり論文や政府のサイトなどの情報源を探してから、それを引用することが大切だと学んだ。

今回学んだことを踏まえて、良い論文やレポートが書けるように、何度も練習していきたい。そして、前回のコメントに対する応答も出ていたので、それらも参考にしていきたい。

今回の講義では、「書いてはならない魔法の言葉」、「書いてはならない魔法の言葉 2」、「書かなければならない接続詞」、「コピペではなく引用をする」、「ウェブには嘘がいっぱい」、「ウェブ情報の使い方 1」、「ウェブ情報の使い方 2」ということについて学んだ。

書いてはならない魔法の言葉では、大学入試の論文などで勉強してきたつもりだが、知らないことがたくさんあった。これらとは逆に書かなければならない言葉には「起承転結」が大切だということが分かった。接続詞を適切に使う必要があると学んだ。また、何か引用をする際には「制作者、サイト名、URL、閲覧日」が必要だということを改めて学んだ。ウェブにはうそがたくさんあるので自分で何が正しく、誤った情報なのか判断する必要がある。そして、自分に必要な情報を適切に使用することが大切だ。データを調べる際には、政府や新聞記事のデータを参考にすることを学んだ。

前回と今回の講義で、レポート・論文を書くときのポイントを知ることができた。出典のことなど何も知らなかったので貴重な講義となった。

今回の講義も前回と同様にレポート・論文の書き方についてだった。単なる感想ではだめ、根拠があり説得力が求められる、など二度同じ内容を聞いても新鮮さを感じるほどいまいち習ったことが身につけていない。しかし先生もおっしゃるように説得力があるレポートが書けるようになるには繰り返して練習をすることが大切である。また「コピペ」と「引用」の違いについて知った。これまではこの二つの違いは何であろうかと気にかけてこともなかった。知った以上気にかける必要がある。

このようにレポートを書く上で注意すべき点は何点かある。しかし一つ一つをとあげてみるとあまり困難には感じない。ただこれまでやってこなかっただけのはずだ。これまでの感想重視のレポートから客観的で論理的な文章を書き、書き直し、調べていく必要がある。

今回の授業では、実際に、書いてはならない言葉や、書かなければならない接続詞の例を挙げて、理由や根拠がはっきりした文章の書き方について学びました。

また、匿名や出典の書かれていない情報は信用してはいけないということも学びました。これは、人の言った発言や SNS での書き込みにも通じる話です。あの子は賢いから正しいことを言っているだろうと思って、鵜呑みにすると、後に毒なことになるかわかりません。噂話は典型的です。間違った情報が飛び回った例を何度も見ました。

現代は、インターネットの普及により、ますます情報の取捨選択が求められます。政府や調査機関が行った統計、新聞記事のデータベース、論文などを信用し、それ以外の情報は、本当かなと疑問を持ちながら生活していきたいです。

今回の授業は書いてはならない魔法の言葉とウェブサイトの利用方法について学んだ。

コメント [y43]: 具体的にどんなことを知りましたか？

コメント [y44]: この文の意味が不明です。

コメント [y45]: 具体的にどのようにして判断するのですか？

コメント [y46]: 冒頭、復習はしましたが、本編では新しい話をしました。

コメント [y47]: これは前回の話。

コメント [y48]: こなかった

コメント [y49]: 「困ったこと」という意味ですか？

コメント [y50]: 授業では、生活でなく、論文・レポートの書き方を扱っています。

思うを書くときは理由や根拠を書こうとしないから、色々・さまざまを書くのは具体的に書こうとしないからである。聞いたことがあると書くのではなく出典を調べることが必要である。たとえ、制作者の名前が書かれていてもウェブサイトで検索する必要がある。私はよく「思う」を使っていたので、山口先生の「思うを書くときは理由や根拠を書かなくても気にならなくなる」という言葉にドキッとした。私がどれだけ普段から理由や根拠を考えていないかが明らかになった授業であった。

「思う」と書いてその後になぜなら～だからであると書けば、理由も書いているので「思う」は消さなくてもいいのではないかと私は考えるのですが間違っていますか？

今回は前回に引き続き、学術的発想と書き方ということで講義を受けた。書いてはならない魔法の言葉として「思う」、が相当する。「思う」の代わりに理由や根拠を考えると良い。「いろいろ」「さまざま」「ある程度」「何となく」「考えさせられた」など、抽象的であることも良くない。文章を書くのが苦手なのは、具体的に書かないからである。「聞いたことがある」「言われている」は使用せず、出典を調べる。「楽しかった」「～と知って驚いた」など、単なる感想は評価できないため使用しない。また、書かなければならない接続詞として、基本の「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」を起承転結に取り入れて文章を構成する。

前回の復習として、出所表示に示すべき情報を整理した。ウェブサイトから引用する場合、制作者を確認する。出典の書かれていない情報は安易に信用せず、書かれている際には、出典の方を参照する。ウェブ情報はきっかけとして利用する。政府や調査機関が行っている統計データや新聞記事のデータベース、学術雑誌に掲載された論文を使用すると良い。

学術論文が他の媒体に比べ、信用度が高いことは確かだが、間違った論文を発表したことでニュースになる例もある。そう考えると、**絶対に信用できる記述は無い**のではないか。

今回の授業では、レポートで用いてはならない魔法の言葉や書かなければならない接続詞を学んだ。「それは良くないと思う」は理由や根拠を書かなくても気にならなくなるため書いてはいけないうこと。また、「いろいろ」や「さまざま」という言葉も抽象的で具体的ではないため書いてはいけないうことを学んだ。書かなければならない接続詞は起承転結を意識して、例えば、しかし、それゆえ、つまりでまとめていかなければならないことを学んだ。最後に、Web ページでは制作者をウェブできちんと検索し、確認をしなければいけないことと内容が信用できるかどうかは、出典を確かめることが大事であることを学んだ。

今回の授業では、「例えば、しかし、それゆえ、つまり」の接続語を用いるということを学んだが、接続詞だけで見ると小論文と似ている。例えば、小論文も「例えば」で問題**定義**を行い話の幅を広げる。そして、「しかし」で反論を加えて肯定または否定の意見を入れるが、「それゆえ」で自分の意見を再び主張し、「つまり」で自分の意見をまとめる。しかし、小論文と論文との違いは根拠を調べた上で書くことだとこの前の授業で学んだ。それゆえ、小論文とレポートは似ているようで何も調べないで書く小論文とは違う。つまり、根拠がある内容かどうかで小論文かレポートに分かれるのだ。

**コメント [y51]:** 授業で、「このように言っ  
て「思う」を書きたがる学生さんがたくさ  
んいるのですが、「思う」を使わないで書  
くように練習しましょう」と言いました。  
「思う」と書いておくと、理由が根拠薄弱  
でも気にならなくなりますから、まずは「思  
う」と書かずに文章を書く練習をしまし  
ょう。

**コメント [y52]:** だからこそ、たくさんの論  
文を読んで、正しい情報かどうかを判断で  
きる力を身につけることが必要です。

**コメント [y53]:** 提起

今回の総合科学入門講座は、レポートを書くときに使ってはいけない言葉、使わなければいけない言葉、さらにレポートを書くときの正しいwebの使い方を講義していただいた。レポートを書くときに使ってはいけない言葉は、「思う」や「考える」と言った理由や根拠を書かなくてもその文章を終わらせることのできる言葉だ。レポートを書くときには「だ」や「である」のように言い切る言葉を使うのが正しいのだ。なぜなら、言い切る言葉はその後に理由や根拠を書かないと収まりが悪いからである。また、使わなければいけない言葉は、「例えば」「しかし」「それゆえ」「つまり」である。「例えば」で具体例を出し、「しかし」で反対意見を述べて、「それゆえ」で結論を導き、「つまり」でまとめを書く。この4つ言葉があればレポートの説得力が出てくるのだ。webの使い方大事なことは、web上に出ているデータや情報が正しいかどうか確かめることである。例えば、webページの製作者を調べ、しっかりとした学歴や地位があるのか確かめたり、政府の出している統計データと見比べて、正しさを判断したりすることで、web上のデータや情報を確かめるのである。今回の講義でも、ウィキペディア ~~ウィキペディア~~ を使ってはいけない、という話だったが、情報を調べる上では問題ないのだ。なぜなら、その情報をきっかけにし、そこから他のサイトとかと見比べれば良いので、**ウィキペディアを使うな、というのは間違い**である。

コメント [y54]: 私が言ったことは、「ウェブ情報はきっかけとして使うべし」ということです。

## 1. 授業内容

レポートや論文には使ってはいけない言葉がある。それが、「思う」「感じる」「気がする」といった単なる感想で、理由や根拠を書くことを妨げてしまうような言葉である。レポートを書く際には、「~だ。」と断定し、その意見の理由や根拠を考えるようにする。

また、「いろいろ」や「ある程度」など、具体的でない言葉も使ってはならない。レポートは常に具体的に書き、確証がないものは出典も調べて正確に書く。

しかし、レポートには書かなければならない接続詞がある。それが、「たとえば、しかし、それ故、つまり」といった、起承転結を表すものである。レポートは箇条書きをするのではなく、文章を短くきって接続詞でつなぐ。

また、調べたときに出典を明記することで、「コピペ」でなく「引用」を活用する。ウェブサイトの場合は、「制作者、サイト名、URL、観覧日」を明記する。

加えて、ウィキペディアやYahoo!の情報も匿名であるものは簡単に信用してはならない。制作者不明のサイトは引用せず、制作者が記載されていて、かつ、信頼できる情報源を探す。

信頼できるサイトとは、出典が書かれているもののことをいうが、ウェブ情報はきっかけとして利用するのが好ましい。

ウェブ情報に出典が書かれていれば、その出典のほうを参照する。現代社会において、最も信憑性があるのは「学术论文」である。

## 2. 質問

レポートを書く際の話題の決め方として、「学問的、社会的に重要なこと」をかくといわれていましたが、**それは具体的にどういったものなのでしょうか?**

コメント [y55]: 教科書 54 ページを参照。

## 3. 質問をした理由

自分が根拠をのべて意見を導きだすことで、学問や社会において重要になることの例がはっきりと思い浮かばなかったので質問させていただきました。

今回は前回に引き続きレポートや論文の書き方についての授業だった。

前半は、「思う」という言葉の代わりに理由や根拠を書くこと、曖昧な言葉ではなく具体的な内容を書くこと、単なる感想を書かないこと、箇条書きではなく「たとえば・しかし・それゆえ・つまり」という接続詞を使って文章を書いていくことを学んだ。私は高校の時、突然文章を書くことに苦手意識を感じるようになったのだが、なぜそう感じるようになったのかもどうすれば苦手意識がなくなるかもわからず、大学で多くのレポートや授業に対するコメントを書くことに大きな不安を抱いていた。そのような日々の中で何かこの状況から脱出できるヒントが見つからないかとの前半の内容を聞いていて、思わず笑いがこぼれそうになった。なぜならこれまで文章を書くことに苦手意識を感じないほうがおかしいというほどの駄目さ具合で悩んでいたのだということに気が付いたからだ。今までの自分の文章は「思う」「いろいろ・さまざま」「ある程度・なんとなく」「考えさせられた」「ではないだろうか」という多くの「書いてはならない魔法の言葉」を使っており、具体的な内容を書けていなかった。また、前回の授業にあった「人それぞれで決めればよい」「結局〇〇思考」などの結論を出してしまっていることも多かった。前回の授業コメントで「非常に身に<sup>①</sup>なった」と書いたが、今回の授業こそ自分の今までの誤りに気が付くことのできる非常に有意義な授業になった。

後半は、ウェブページの情報の引用の仕方について、ウェブページの情報で出典がないものは信用しないこと、統計データや新聞記事や論文を調べるときにはウェブ情報を活用することを学んだ。授業では最終的に「信用できる記述」とされているのは学术论文であると言われたが、その内容に100%間違いがないとは言い切れないだろう。そのあたりを疑い始めるとどこからも引用することができなくなるので割り切って引用するしかないのだろうが、<sup>②</sup>学术论文の内容の中でもより信用度の高いもの、これは定説となっているという<sup>③</sup>ようなものを見つけるためにはどうすればよいのか疑問に思った。

今回の授業で、書いてはいけない魔法の言葉、書かなければならない接続詞、ウェブの使い方について学んだ。まず、書いてはいけない言葉とは、「～と思う」、「～と考える」などである。それらを書く代わりに理由や根拠を書くのがベストである。しかしながら、私自身、中学、高校と「～と考える」、「～と思う」を多用していたので、それらの選択肢がないと<sup>④</sup>どう書いていいのかわからなくなる。

次に、接続詞の使用は、文章を構成する上で1番大切である。なぜなら、文章の起承転結は接続詞によって、成り立っているからである。

<sup>⑤</sup>ウェブではウィキペディアを極力避けたほうがよい。ウィキペディアは、誰でもいつでも情報を書き換えられるので、真実と虚偽の判断がつきにくいからである。

今回の授業では、普段文章を書く上で<sup>⑥</sup>ありがちなミス<sup>⑦</sup>を指摘された。意識的に文章を書かなければ、身についた癖は治らないので、そのことを念頭に置き、日々反復練習することがたいせつである。

今回の講義は、前回の続きで、レポートの書き方について学んだ。内容としては、<sup>⑧</sup>使<sup>⑨</sup>てはいけない言葉や使わなくてはいけない接続詞、ウェブの使い方についてであった。今回も反対意見は無く、学んだことを使っていこうと思えるような講義であったが、一つ引<sup>⑩</sup>かかったのはまるでウェブサイトだけが情報に信頼性の無いものが多いかのような資料<sup>⑪</sup>の書き方だ。TVや新聞の情報も<sup>⑫</sup>性格<sup>⑬</sup>に全てを伝えているとは限らない。例えば、先日の復

コメント [y56]: ため

コメント [y57]: 「正解を探す」という発想になっています。たくさんの論文を読み比べれば、おかしなことを書いているものはどれか、分かるようになります。

コメント [y58]: 理由や根拠を書くようにしてください。

コメント [y59]: そんなことは言っていない。「ウェブ情報はきっかけとして使うべし」と言いました。

コメント [y60]: 具体的にどんなミスですか？

コメント [y61]: 具体的にどんなことですか？

コメント [y62]: 具体的にどの部分ですか？

コメント [y63]: 正確

興庁の大臣が記者会見中に激怒したという話題も激怒する前後の少ししか映されていなかったため、まるで大臣が全て悪いかのように報道されていたが、復興庁のサイトで見ることができる会見録を読めば、記者側にも問題があることは読み取れるだろう。確かにネットには不確かな情報も多いかもしれないが、1つの情報源だけを頼るのではなく、いくつかの情報源から情報を集め、**精査して正しいもの**を使っていく事が大事なのではないだろうか。

**コメント [y64]:** どのように精査して、どのようにして正しいかどうかを判断するのですか？（授業で説明しましたよ。）

今回の講義では、まず前回の講義内容を小テストで復習し、新たにレポートを書く際の注意点を学んだ。

最初に、「~だと思ふ/考える/感じる/印象をもった」という言葉を使って自身の意見を主張してはいけないということを学んだ。それらの言葉を使うと、理由や根拠を書く必要がなくなり、論理的な主張ができなくなってしまうので使ってはいけないということである。他にレポートで使ってはいけない言葉として、「いろいろ/さまざま/ある程度/なんとなく/考えさせられた」などの主観的な言葉、「聞いたことがある/言われている」などの出典元が明確でない言葉、そして「楽しかった~と知って驚いた」などの単なる感想を表す言葉が挙げられた。

反対に、「たとえば/しかし/それゆえ/つまり」はレポートで書かなければならない接続詞であるということも学んだ。文章を短く切って読みやすくするために、また主語と述語の関係が不適切になることを防ぐために、これらの接続詞を使う必要があるということである。レポートの構成を簡潔に「起承転結」で表したとき、「起」でテーマを書き、「承」で「たとえば、」とテーマに関する具体例を挙げ、「転」で「しかし、」と反対の事例を取り上げて検討し、「結」で「それゆえ、」と結論を書き、「つまり、」と最後のまとめをするのが、これら4つの接続詞の正しい使い方である。

次に、正しいウェブの利用法を学んだ。まず匿名ではないかどうかを確認し、制作者が分かった場合でもそこで終わらずに制作者の名前を検索し、公的な立場にある人であるかを判断する必要がある。そして、内容が信用できるものであるかは出典が書かれているかどうかで判定する。また、データを調べたり、論文を検索したりするなど、ウェブ情報はあくまできっかけとしての利用が好ましい。

講義の中で、『近年、少年の犯罪が増加している』と書いているウェブページがたくさんあるが、実際は減少している」とおっしゃっていた。私は、この違いはマスメディアによる**解釈**に影響しているために生じるものだと考えた。「戦後から1960年代頃までの少年事件では、ほぼ加害少年の置かれた『社会環境』の問題が事件の背後にある」(牧野智和「少年犯罪は『凶悪化』も『増加』もしていない!? マスメディアが決して報じないこと」2p <http://gendai.ismedia.jp/articles/-/47811?page=2> 4月22日)と解釈されて報道されており、高度経済成長期を終えると今度は『家庭』や『学校』での問題が少年事件の背後にあるとする報道(同上 2p 4月22日)が目立った。これらの解釈だと、犯罪が発生してはいるが社会環境あるいは家庭環境が問題なので、それらを改善することで犯罪件数を減少させることができるという余地がある。しかし、「1997年に発生した神戸・連続児童殺傷事件」(同上 3p 4月22日)を期に、少年犯罪は『心の闇』という、加害少年の異常な内面の問題として(同上 3p 4月22日)報道されるようになった。つまり、犯罪の原因として今までのように外的要因ではなく、少年自身の内的要因を挙げることで、周りの人が働きかけることで犯罪数を減少させることが困難であると印象づけている。加えて、貧困などの社会的要因ではなく精神的な異常だけを原因として持ちだすことで、情報の受け手に常人離れたものとしてより衝撃的な印象を与える。

**コメント [y65]:** が？

よって、マスメディアが少年犯罪の原因を精神的な問題と結びつけた報道を行うようになったことで、情報の受け手により強い印象を与え、その結果少年犯罪は増加していると捉えるのだと考えた。

コメント [y66]: どうして少年犯罪の「原因」についての解釈が、少年犯罪の「発生件数」についての誤解を生むのですか？

引用がコピペと違う点は自分の意見を根拠づける為に抜き取り、抜き取った箇所にはカギを付け()内に出典を記載する。ウェブサイトからの引用であれば、制作者、サイト名、URL、タイトル名、ページ、閲覧日時を書く。また、本であれば、著者、タイトル、出版社、出版年、ページを書き、論文はこれに加え掲載雑誌を書く。例として、授業プリントに出た「牛にモーツァルト」というワードに関する情報を引用する。

モーツァルトの曲を流すと、動物や植物に癒し効果を与えるという噂がある。下記は、論文の筆者が飼う三匹の犬にそれぞれ違う曲を聞かせる実験の結果である。

コメント [y67]: 実験をするときには、必ず「対照群」を設けなくてはなりません。この論文、読んでみましたが、…

✦「ゴールデンの警察犬訓練の成果や犬種の性格もあるが、モーツァルトを聴かせたゴールデンが素直で優しく容姿端麗に育った。シュトラウスを聴かせた柴犬は勝気で、よく脱出し、感情の表現として、うれしい時、腹の立つときはショパンの「小犬のワルツ」のように自分の尻尾を追っかけぐるぐる回りだす。バッハを聴かせた犬はオスということもあるが、感が鋭く、とてもエネルギーを感じる。こうしてみるとやはり、モーツァルトを聴いて育った犬が一番安定感のある犬に育っている。そして、犬は高音域の音には興味を示すが、低音は嫌うことが判明した。」(浅田まり子、モーツァルト効果と教育への提案：音楽療法に学ぶ、愛知淑徳大学教育学会、学び舎：教職課程研究、2008-03-31、35-36 ページ)。

これは全ての動物に言えることではないが、動物に効果があったことがわかる。

このように、引用した箇所にカギをつけ、出典を記載し、自分の意見のまとめを書く。

コメント [y68]: 【】でなく、「」を付けてください。

今日は前回と同様、SIH 道場の一環としてレポートの書き方について学習した。

前回は説得力のある文章の書き方、コピペと言われない引用の仕方であったが、今回は少し具体的に「書いてはならない魔法の言葉」と「ウェブ情報の使い方」についてであった。

コメント [y69]: どこに書いてありますか？

書いてはいけない魔法の言葉とは具体的に言えば「～と思う」である。どんな文章でも「思う」と書いてしまえば根拠や理由が気にならなくなるからだ。もちろん、「考える」「感じる」「印象を持った」も同じである。私は前回の授業コメントで「考える」を乱用してしまった。前回学んだ「調べ、知り、書き、読み直し、書き直す」の中の読み直すことを少しサボってしまい、自身の書いた文章を客観的に見ることができず、疑問を抱けなかったからだ。次に文章を書くときは、書き終わった文を一度寝てから見直すなどして客観的な目線を忘れないようにしたい。

また、「思う」などとは対照的に書かなければならない言葉もある。「たとえば」「しかし」「それゆえ」「つまり」などの起承転結に関わる接続語だ。起承転結がはっきりしていると読み手に主張が伝わりやすいからだ。ただし「ところで」などの話題を転換するような接続詞は論点がずれてしまうため、使わない方がよい。

ウェブ情報の使い方については端的に言ってしまうと「制作者がわからないサイト、出典場所がよくわからないサイトは利用しない」ということである。ウェブ上では誰でも意見を述べることができる反面、根拠のない作者の思いつきの発言も混ざっているからだ。そのためウェブの情報はきっかけとして利用し、引用はできるだけ学术论文を探すべきである。

以上が主な内容だったが、加えて英語の論文も読めた方が良くと授業で山口先生がおっしゃっておられたので、きっかけとして何か自分が興味を持つ分野の英語の論文を少しずつ読んでいきたい。

コメント [y70]: ぜひそうしてください。

インターネットには情報がたくさんあるがその中から優良な情報を選別することは至難なことであると思う。情報を選別するためには自分の中の予備知識のようなものが必要で予備知識がない場合は疑問を持つことや、おかしいと思うことがない。そして、情報を鵜呑みにしてしまうことが多い。また一つのサイトや記事だけで終わらせるのではなく何種類も読み比べることで正確な情報を得ることができると思うし、同じ内容でも人それぞれの考え方が違うことがわかり、より多面的に理解できるようになる。また新聞や本、論文などで調べることはより正確な知識を得るための重要なプロセスである。

コメント [y71]: 書いてはならない魔法の言葉。

本を買って自分で持っていると思う時にすぐ調べることができるという利点があると仰っていたがその他にも線やメモを本に直接書き込むことができるという利点もあると思う。そうするとあとで読む時に自分が着眼したポイントがわかりやすいと思う。しかし、本を買うにもお金がかかるため、「これは買うがこれは図書館で借りる」などと、「買うと借りる」のバランスを取ることも大切だと思う。

今回の授業では、「～と思う」とか「～と考える」などの注意すべき具体的な書き方を教わった。私は、大学入試が小論文で、高校の先生に「～と思う」は使わず、「～と考える」に変えたほうがいいと教えられたし、自分自身、考えや感想を書くときに今まであんまり調べて書いたことがなかった。それゆえ、自分の意見を述べるときも自信や確証が完璧に持つことができず、「～と思う」や「～と考える」を連発していた。しかし、大学で提出するレポートではそうはいかない。レポートを書くにあたって自分の意見を述べるとき、その意見にははっきりとした根拠を持って述べなければならない。今までもレポートを書くときに出典を示すことがあったが、制作者や出版年を示すなどもっと細かくして、しっかりした事実を述べなければいけないのだ。そんな経験は無きに等しいから毎回の授業コメントなどで経験を積んで綺麗なレポートをかけるようになりたい。また、統計データなど教科書に載っているような身近なデータを調べることもレポートを書くことにおいて重要なことだが、今までの学生生活の中で論文を読むことはなかった。だから、学術論文や学術雑誌などを読むことが、レポートを書くことにおいて必要であることを抜きにしても、とても楽しみだ。

コメント [y72]: ウェブを探すと見つかります。

今回の講義は前回の要点を押さえた。前はレポートの書き方について学んだが、今回は前回のレポートの反省をした。書いてはいけない言葉として自分が知らなかった言葉が多くあげられた。自分はこれまでに考えたという言葉を使っていた。言葉をいいかえるだけで使えるものだと思っていたが違った。自分には知らないことがまだまだあることを知った。レポートを書く上でも重要になってくる。そのため、これからもこの講義を大事にしていかなければならない。

コメント [y73]: 具体的にどんな言葉ですか？

コメント [y74]: 具体的にどのようにするのですか？

レポートには書いてはならない言葉があり、「思う」や「考える」、「印象がある」は理由や根拠がないので使わない方がよい。もし書いた場合は、これらの言葉を消して理由や根

拠を考えるべきである。また「さまざま」や「いろいろ」など曖昧な言葉も使わない方がいい。文章を書くのが苦手なのはこれらの言葉を使って具体的に書かないからである。「聞いたことがある」などは出典を調べて改善できるし、「楽しかった」は単なる感想であって評価はできない。そして、書かなければならない接続詞もある。基本は「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」の4つである。起承転結をふまえて書くことでこれらの接続詞をうまく使うことができる。前回の講義で学んだように、調べたときには出典を書かなければならない。ウェブサイトの場合は制作者、サイト名、URL、閲覧日の4つを書く必要がある。制作者に関しては、制作者を確認して、ウェブで名前を検索する必要がある。ウェブ情報はきっかけとして利用するだけで、出典が書かれていたらその出典の方を参照するのがいい。そして、ウェブ上で情報のありそうな場所でデータを調べたり、論文を検索したりすることで、最終的に学術論文で検索したり、学術雑誌に掲載された論文を検索したりする。

これから論文においてわからないことがあれば、図書館で論文を検索するべきである。

ウィキペディアには嘘が多い。しかし、ウィキペディアを使うことは良いことだ。私たち学生に最初から気になることを探し論文を読めと言ってもとっつきにくい。しかし、ウィキペディアならば情報をすぐに拾える。そしてその情報の信憑性を調べる。「例えば政府や調査機関が行なっているデータ」や「新聞記事のデータベース」を用いると良い。そして論文を読む。この手順で行うことによりレポートを書くことに対する抵抗心がへる。しかし、論文にも嘘の論文がある場合もある。例えば「STAP細胞」の件だ。論文だからと言って必ず正しいことを言っているわけではない。この事を常に念頭に置いておかなければならない。関連するいくつかの論文を読み情報の正確性を上げる事が大切だ。

この授業で書いてはならない言葉を学んだ。学んだことをまとめると「思う」は理由と根拠を書かなくても気にならなくなる。「いろいろ」「ある程度」を書くなら具体的な書く。「聞いたことがある」「言われている」は書かず、出典を書く。「楽しかった」「～と知って驚いた」は単なる感想で評価にならない。また、サイトに掲載されている出典を芋づる式に辿ったり、製作者の名前をwebで確認したりすると正しい情報にたどり着くということは聞いて「なるほど」と思ったし、これからその方法でレポート・論文を書いていきたい。

私は論文やレポートをうまく書けないので、ジャンル、言語を問わずたくさんの論文を読んでいきたい。

今回の講義ではまず前回の小テストの答えの確認をして、前回の要点を軽く復習した後にもう一回前回の復習テストを行いました。この意味は、ここでもう一回テストをすることで、前回やったことを頭に思い浮かべるため頭をフルに使うことで脳の活性化を図り、後で記憶に残りやすくなるからです。そして、書いてはならない魔法の言葉、すなわちこの言葉を使うことでどんなデメリットが生まれるかという、自分の頭で考えなくなる、自分の本当に述べたい意見が表面化できなくなる、などのメリットよりデメリットの方が大きくなるということです。書くものからしてみればこういったものを多用した方が楽だし、短時間に終わるし、いいことづくめで終わるような気がしますが、見るものからしてみれば自分の主観的要素がかなり入っており、評価をつけようにもつけられない、という現状です。つまり魔法の言葉は使ってもあまり効果がなく、自分のためにもならないとい

コメント [y75]: 自宅でも、インターネットにつながったパソコンがあれば検索できます。

コメント [y76]: 「きっかけとして」使うのはよい、と言いました。

コメント [y77]: そのとおりです。

コメント [y78]: まずは毎週、他の学生が書いたコメントとそれへの教員の応答を読みましょう。

コメント [y79]: そのようなことは言っていないが。



うことです。逆に書かなければならない言葉というものもあって、それは接続詞です。なぜかという、一文が長いとまず読みにくい、さらに長くなればなるほど主語と述語の不一致が起こってくるのが自然です。使うことによって、今まで何の変哲もなかった文章が途端に論理的な文章に切り替わるということがあります。つまり使える局面があれば、積極的に利用したほうが良いということです。そして前回もあったように口すっぱくコピーではなく引用をするということです。今までに述べた二点よりはるかに大事で、これは行くと不正行為とみなされ、レポート・論文を書く上で必ず忘れてはいけません。しかしたとえ引用を行っても、もしそれがネットから引っ張ってきたものだとしたら、そのサイト自体が正しいことを述べているか、ということも必ず書かなければなりません。なぜなら、誰が書いた情報かわからないとなると信用性に欠けるからです。ウィキペディアも代表的なもので、あのサイトも各々が作っていき不特定多数の人間が作っているサイトであって必ずしも正しい情報が載っているとは限らないからです。ポイントとしては、制作者の名前を確認して再度そこで検索をかけること、出典の書かれていない情報は信用せず、利用しないということです。ウェブ情報はあくまでも最初の入り口、きっかけとして利用することが大事だということです。そして、最初は書き方がわからないので、本物の学術論文をあさって、書き方の手法や構成などを自分なりに分析して見るのが大切です。

コメント [y80]: 必ず使うように、と言いました。

今回の授業では、興味のあるものをレポートにするのではなく、社会的学問的に重要なものの中から選ぶ、記憶はあいまいなので「出店」は必ず明記する、反対の立場や意見も検証するなどを前半で学びました。そして、本題では「思う」「感じる」「いろいろ」「ある程度」「聞いたことがある」など書いてはいけない言葉があることや、その逆で「たとえば」「しかし」など書くべき言葉があることを学んだ。また、ウェブでは製作者もきちんと確認し出所表示することやウェブ情報はきっかけとして利用することを学んだ。また、「政府や新聞や警察や論文の情報は比較的信用でき、図書館でも新聞記事は検索できることを学んだ。私が今回疑問であることは、ウェブページの製作者がどのくらいのレベルの人ならば信用できるのかです。疑問に思った理由は、調べたいことの公式な専門家や研究者の方ならば信用できるのは分かるのですが、職業ではないがそのことについて詳しい方のページは信じてよいのだろうか」と疑問だったからです。

コメント [y81]: もちろん、書き方の参考にするということもありますが、ウェブ情報をきっかけとして、関連する学術論文を探すように、と言いました。

あと、文章は適当なところで段落に切りましょう。

コメント [y82]: 出典

コメント [y83]: 政府や研究機関が行っている統計データを活用しよう、と言いました。

コメント [y84]: 「詳しい」かどうかをどうやって判定するのですか？判定できるためには、あなた自身にそれなりの学識が必要です。

今回の総合科学部入門講座では、書き方編として「思う」を消して理由を書き、「いろいろ・さまざま」を消して具体的に書き、「聞いたことがある」を消して出典を調べ、接続詞「たとえば・しかし・それゆえ・つまり」で文章を構成することや、ウェブの利用法編として「匿名のページを利用しない、出典の書かれていない情報は信用しない、ウェブ情報はきっかけとして利用する」ことを学んだ。具体的にいうと、書き方編は「思う」であると理由や根拠を書かなくてもよくなり、「いろいろ・さまざま」を使うと具体的でなくなり、話がブレないように起承転結を使える接続詞「たとえば・しかし・それゆえ・つまり」を使うということである。また、ウェブの利用法編は、匿名のウェブページを信用せず製作者の名前を調べることや、出典の方を参考にし、孫引きしないようにすること、ウェブ情報はきっかけとして利用し、統計データを探すことや論文を検索することである。私は普段から簡単にネット情報を信用せず疑うことから始めるので、出典情報がない情報は信じてことができず、孫引きでは確信が得られることはできない。その点からウェブの利用法編ではとても共感でき、賛成する。さらに、「いろいろ・さまざま」を使うことは主語や目的語が大きすぎであり、本人が「いろいろ・さまざま」の中にあると考えている要素も、

コメント [y85]: どういう意味？

実は「いろいろ・さまざま」とはまた別の要素で、誤解であったということも危惧されるため、使うべきではない。最後に質問です。ジャーナリストの方々が現地へ取材に行った際、記録を『twitter』などで発信しているケースがあります。そのような SNS で発信された情報は引用することは可能でしょうか。また、引用する際に行う出所表示は何を明記すればよろしいのでしょうか。

コメント [y86]: どういう意味？

コメント [y87]: 「体験談として引用する」などの場合には、引用してもよいです。その場合の出所表示は、ウェブページに準拠します。

普通感想文を書くときには「~だと思いました」、「~だと感じました」などの表現の仕方を書いていく事があるが、レポート、論文を書く際にはそのように主観的な表現をせず、客観的に、また根拠のある文章を書くことを心掛けなければならない。コピペによる根拠づけではなく、必ず引用することが必要である。引用する際には、出所表示などの手順を忘れないことも大切である。引用に頼りすぎて文章全体が引用文で埋め尽くされることもよくないので、自分の中で浮かんだ言葉を大事にし、文章に加えるべきである。ウェブの引用の際に著者名を書き加えてないページを使用することは許されず、著者名が書かれているページでも使用する場合は、その著者本人の名前でもう一度検索をかけて著者本人について調べることもしなければならない。著者の中にはただ目立ちたいだけで持論を書いている者もいるので、レポートを書くうえで著者を判断する能力も磨いていかなければならない。レポートを書く上で何より大切で、効果的な事は「反復練習」であるので、反復練習をする事によって根拠づけて書く力、引用する記事の判断力を身に着けるべきである。

コメント [y88]: そうではなく、自分で「レポートや論文のテーマ・問題意識」を設定し、引用はそのテーマについての自分の主張を根拠づけるために利用する、ということが重要です（主従関係）。

#### 4/21 学術的発想と書き方

論文を書く上で書いてはならない言葉がある。例えば、「・・・はよくないと思う」である。「思う」は書いてしまうと、理由や根拠を書かなくても気にならなくなる。他にも、「考える」・「感じる」・「印象を持った」なども使ってはいけない。理由や根拠を明確にして言い切らなくてはならない。明確に文章を書く上で、「いろいろ」・「様々」・「考えさせられた」などの曖昧にするような言葉は使ってはならない。そして、起承転結で文をまとめることが重要である。Wikipedia を引用する際は、Wikipedia をそのまま引用するのではなく、Wiki の参考文献のリンク先に飛んでそこを引用するのが良い。ウェブページを引用する際は、製作者を確認し、製作者の名前をウェブページで検索するのが良い。ウェブ情報の効果的な利用の仕方として、政府や調査機関が行なっている統計データや学術論文の利用である。やはり、ウェブの情報の多くは事実無根の信憑性の乏しいものがほとんどであり、その中で信用できる記述は確かな裏付けのある、公的な統計データや学術論文に至るのである。ウェブ情報はきっかけとして利用するのが最適である。

コメント [y89]: なぜですか？理由を書きましょう。

コメント [y90]: さらにその出典…と芋づる式に進んでいって、学術論文を参照する。

Wikipedia を使ってはならないとプリントには書いてあるが、Wikipedia にも参考文献の記載をされている。その参考文献のリンク先に飛んで使えば問題ないのではないか。Wikipedia をゴールへの中継地点として使えば便利である。Wikipedia は匿名更新で、嘘も多いが、いろいろな人が更新しているため、いろいろな情報はある。その中で、参考文献のリンク先に飛び自分で判断すれば良いだけである。

コメント [y91]: 「ウィキペディアを使ってはならない」と多くの教員が指導しますが、という文脈で書いた言葉です。

コメント [y92]: 何をどうやって判断するのですか？

レポートには、「思う」「考える」「印象がある」「感じる」を書いてはいけない。その代わりに、理由や根拠を考え、まとめて、断言する。それがレポートである。さらに、レポートには、書かねばならない接続詞「例えば」「しかし」「それゆえ」「つまり」があり、これらを使って起承転結を作らなければならない。

また、コピペと引用も似ているようだが、実際は全然違うことを表す。コピペとは出典元を明らかにしない、レポートではしてはならないことである。引用とは、出典元を明らかにし、ウェブサイトの場合、制作者やサイト名、URL、閲覧日が必要である。

私は、高校の情報の時間で、今ではネット社会となり、情報が溢れ、どの情報が正確で、どれが間違っているのかが見分けにくい、と習った。私はその時、どうすれば情報が正確かどうかを見分けることができるのか、疑問に思っていた。だが、制作者の名前をインターネットで調べる、政府や調査機関など信頼できるところの情報を使うなどの、解決方法があることを知れた。

そこで、疑問が出てきた。

どこまで調べるとその情報が正確だと断言してよいのか？

私は、高校生の時、課題研究でオリンピックのことを調べた。いろんな論文や本、ウェブサイトを読んだし、県庁の方や外国出身のALTの先生にもインタビューをした。課題研究発表日まで半年という期限があったので、そこでひと段落となったのだが、大学の論文ではどこを終了、研究完了とするのか疑問となった次第である。

今回の講義では、レポートで書いてはいけない言葉と書かなければいけない言葉やウェブについて学んだ。

まず、書いてはいけない言葉について学んだ。例えば、「思う」が挙げられる。なぜなら、理由や根拠を書かなくても気にならないからである。レポートでは、根拠や理由を書くことが必須条件なので「思う」で終わらせてはいけない。

次に、書かなければいけない言葉について学んだ。基本は「例えば、しかし、それゆえ、つまり」の4つが挙げられる。これはレポートに起承転結を作るために必要である。ここで注意が必要なのは、文を箇条書きにしないことである。4つの接続詞を使って文を短くすることは大事だが、箇条書きでは文でなくなるのでいけない。

最後に、ウェブについて学んだ。レポートでは、誰が書いたか分からない情報は信用できない。だから、「ウィキペディア」「Yahoo!知恵袋」は使ってはいけない。そのためにも製作者について詳しく調べる必要がある。そのほかにも、政府や調査機関が行なっている統計データを活用すること、論文を検索することについても学んだ。

私は今回の講義を受けての意見は、「レポートと小論文や調べ学習は書く内容は全く違けれど、根本的なことは同じ。」ということである。どれでも起承転結が必要なのは同じことである。だから、レポート初心者といっても、これまでに起承転結のつく文を書いている人は内容に注意するだけで意外と書きやすい。ということは、レポートの出来具合は前回でも学んだ通り「反復練習」が必要である。

今回のSIH道場では、レポートを書く際に使ってはならない言葉、また、ウェブサイトの情報の使い方を学びました。

今回の授業を受けて、私は、小論文の指導も、大学のレポートや論文のような書き方で書くべきだ、とすべきである、と考えました。なぜなら、小論文では良いとされた書き方はレポート・論文では、むしろしてはならない書き方だったり、小論文がレポート、論文とは異なる点が存在したりするため、小論文で学んだことをレポートを書くときに使うことができないからです。

今回の授業を受けた後、3つの質問が生じました。

まず1つ目は、小論文入試でみる学生の表現力とは何か、ということです。徳島大学総

コメント [y93]: 「以下で述べる」？

コメント [y94]: その情報が正確だと断言できるまで、です。

コメント [y95]: どちらも

コメント [y96]: 内容でなく、「形式」に注意してください。すなわち、引用を用いることです。

コメント [y97]: 「小論文」が、「試験会場に何も持たずに行って制限時間内に書く」という形式で行われている限り、残念ながら不可能です。

コメント [y98]: 一般的な回答になりますが、普段からどれぐらい社会問題に関心をもって調べているか（新聞や本をよく読んでいるか）という知識面、その手持ちの知識を使ってその場でどれぐらい説得的な文章が書けるかという文章力、ということでしょう。

合科学部の一般入試後期日程の選抜内容では、「社会的な課題に関する基礎的な能力(関心、理解力、表現力)を判定する。」(徳島大学 平成 29 年度 学生募集要項 一般入試 p3 2016 年 11 月)と書いてあります。ここでいう「表現力」とは大学でレポートや論文を書くために必要な能力のこととは、全く違うということでしょうか。

次の質問は、どのようにすれば自分の意見に独自性を持たせることができるか、ということです。文章を書く際に課題図書に書いている内容と似てきてしまったり、異なる立場の本を両方読んでどちらも正しいように思えてきてしまい、自分の意見が分からなくなってしまうことがあります。また、1つのテーマについて考えた後、そのテーマについての本を読むと、自分が考えていたことは、とっくの昔に専門家によって考えられ、論じられています。

確かに、1 大学生が考え付くようなことは専門家が思いつかないわけがありません。しかしレポートや論文は、課題文の単なる要約ではありません。そのため、根拠のある自分の意見を書いていかねばなりません。

最後の質問は、山口先生が本を薦める意図について、です。

総合科学の基礎 C の一言カードで私が書いたことに対して、山口先生は「私の『人をつなぐ対話の技術』という本を読んでみて下さい。」とお書きになって今いました。このことから私は、山口先生がご自身の本を薦めるのは、そこに書いてあることから学べ、という意図がおりだから、という認識を持ちましたが、この認識であっていますか。

初回の授業では特にであったが、自分は山口先生の粗探しをするかのように疑問点はないかを探していた。反論できるような所はあるだろうか。矛盾しているような所はあるだろう、と。しかし、教科書でもそうであったが、反論出来ない程の具体例があげられていたり、細かい説明があった。いい文書を書くに於いての必須の接続詞もそうだった。だからこそ、生徒は皆、どこか反論出来るかを探すんじゃなくて、引用の仕方やいいレポートの書き方などを自分のモノにするために、集中することが大切である。

今回はレポートを書くにあたっての書き方と Web の利用方法について学んだ。私はこれまで文章を書く中で「思う」という言葉を何回も使ってきた。しかしそれはその考えに至った理由や根拠がかけられており、説得力も無くなってしまったということを知った。また、「いろいろ」「さまざま」など、抽象的な表現も好ましくないことが分かった。これからは物事を多角的に捉え、具体的に表現できるように心掛けていきたい。さらに、起承転結を意識して接続詞を使うことで簡潔な文章を書いていきたい。

わたしは小論文の指導の度に「思う」を「考える」と書き直しなさいと言われてきた。これまではその意味もわからずただ書き換えていただけであったが、今回の講義を聴いて理由や根拠を書かずに済み、また断定を避けるという魔法の言葉であったことに気づいた。また、わたしは何かわからないこと、気になったことがあるとすぐネットで調べ、1 番上に出てきた情報を確認もせず鵜呑みにすることが多々ある。しかし、数多くの情報が日々飛び交う社会においてその方法をとることは誤った情報を鵜呑みにしてしまうこととなるため、ホームページの制作者名の記載の有無を確認するだけでなく、その人の名前を検索したり出典が書かれてあるものを信用し、出典の方を参考にしたりすることが大切である。また、最もらしい記述に惑わされず政府が行っている統計などのデータを調べるこ

コメント [y99]: そのときは、三冊目の本を読む。それでまだ自分の意見がはっきりしなければ、四冊目を読む。以下同様。

コメント [y100]: どんなことを書いたのですか？(申し訳ないですが、100 枚もあるので、一つ一つはよく覚えていません。)

コメント [y101]: もちろんあっています。買って読んでください。生協で売っています。

コメント [y102]: 学生

コメント [y103]: このコメントは、いささか簡潔すぎるようです。

とも情報を見分けるメディアリテラシーを育むことに繋がる。今回の講義でこれらのことを学び、身につけることができたが、今回も前回はウェブの話が多かったので書籍の話が聞きたいと思った。ネットには誤った情報があることもあるが、書籍から引用したのであれば全て正しいと言えるのであろうか。先生方に尋ねたい。

コメント [y104]: 「身につけた」と言えるためには反復練習が必要です。

コメント [y105]: もちろん言えません。教科書 46～48 ページを参照。

今回の講義では、レポートにおいて書いてはならない言葉、具体的に「思う」や「さまざま」、「考えさせられた」など理由や根拠を書くことを避けたり具体的な内容を省いたりするための言葉を使ってはいけないということを学んだ。そして、起承転結に則った「たとえば」「しかし」「それゆえ」「つまり」といった接続詞を使うということを教わった。さらには、根拠となる情報を用いる際に出典の書かれていない情報は信用しないことがポイントであるということだ。

私がとても有意義だと思ったのは、情報を探すにはインターネットで検索するより政府や調査機関が行う統計データや新聞記事のデータベースを活用するということである。なぜかという、インターネットで検索することは簡単であるが、その情報が本当に正しいか調べる方法があまり思いつかないしサイトによっては全然違うことが述べられていることがあるためだ。

コメント [y106]: これらもインターネット上にあります。

私は昔から自分で文章をつくる時接続詞を適切に使えなかったり無意識に省いてしまうことがあるので、今回の講義で教わった接続詞のことを特に意識してレポートを作成する練習をしていくことにする。

今回の授業では、レポート・論文の書き方とウェブの利用法を学んだ。例えば、レポート・論文の書き方としては、「思う」や「感じる」と書かずに理由や根拠を考えるとということ、具体的に書くということ、接続詞を使って文章の流れをわかりやすくまとめるということである。ウェブの利用法としては、匿名のウェブページや出典の書かれていない情報は引用しないということだ。

今まで調べ学習をする機会は何度もあったが、調べた情報が信用できるものかどうかは、いくつもページを閲覧してみて同じような事柄が書かれているかどうかという曖昧な、根拠のない判断の仕方であった。得た情報の出典をさらに調べたり、ウェブページの制作者を確認するという作業を行うことが、情報を正しく引用する上で大切であることを知った。これからレポートや論文を書くために反復練習を行っていく中で、ウェブ上の情報を正しく取り扱うことができるように努めていきたい。

小学生の頃から文章が続かないことに悩まされていました。しかし、今振り返ってみれば、その頃の私の文章は例の「書いてはならない魔法の言葉」だらけです。その結果、理由や根拠を書くことをしなくなっていたので文章が続かず、薄い内容になっていたのだとわかりました。

情報を収集する上でインターネットは非常に頼りになりますが、信頼できない出典のものや、古くなって情報としての価値を失ったものも無数にあります。その中から利用可能な情報を拾い集めるために見るべきポイントをしっかり押さえておきたいです。

今回の講義では、論文やレポートを書く際のポイントを学んだ。思うで言葉を締めてし

まうと理由や根拠が書きづらくなること、理由や根拠を書くこと、具体的に書くことなど、基本となることを学んだ。思うや考えるでごまかすのではなく自分の意見に客観性を持たせるために具体的に理由、根拠を書くことができるスキルを磨いていくことが必須だと感じた。文章の書き方も学んだ。自分の主張を相手にわかりやすくするために文章を短く切りつなぐこと。そのために接続詞を活用していくこと。起承転結を意識して書くことが、わかりやすい文章を書くために必要なことだと感じた。他に、引用する際の注意点を学んだ。情報を集める際に、その情報が正しいものかどうかをどう判別すればいいか、信用できる情報の見分け方など、正しい論文を書くために必要なことを学んだ。出典のない情報はきっかけとして利用し引用しないようにするなど、ただ調べればいいのかということではないことが分かった。統計や学術論文などの信頼度が高い情報を引用しながら、自分の主張を相手に具体的に伝えるための方法を学ぶことができた。今回の授業で学んだことを活かし、論理的な文章を書く練習を重ねていこうと考えた。

今回の講義では前回に引き続き論文・レポートの書き方についてに加え論文を書くときに使うウェブの利用法について学んだ。論文・レポートの書き方では書いてはならない言葉をいくつか紹介された。その代表として「~と思う」という言葉が挙げられる。この言葉は便利な言葉に見えるがこの言葉を使うことで文章の論理性が失われる。なぜなら理由や根拠を書かずに文章を書いてしまうからだ。説得力のある論理的な文章を書くためには「~と思う」という言葉の代わりに根拠や理由を書けばよい。次に論文を書く際に利用するウェブページの利用方法について学んだ。確かな情報を得るためには 1.ページの制作者が掲載されているか確認する 2.制作者がどんな人物かインターネットで調べる 3.情報の出典を確認し、正しい情報が確認する。この一連の作業をする必要があると学んだ。

講義の中でウェブ情報はきっかけとして利用するのがよいとあったがその通りだ。私たちはテレビのニュースや雑誌の記事などの情報を鵜呑みにしてはいけない。なぜならその情報を流した人が物事のある一面・一部だけを見て書いた情報かもしれないからだ。しかし、ニュースや雑誌の情報を調べたデータと違うから絶対に正しくないと決めつけるのも良くない。情報を配信した人なりの考えがあるはずなのでそういう見方や考え方もあるくらいに捉えるのがよい。正しい情報と知識を得るために本当にそうかと疑問を持って公共機関の配信しているデータなどを元に調べる必要がある。常に周りの情報に対し疑問を持ち正しい情報を得ていきたい。

4月21日の授業では前回の小テストの答え合わせとともに内容の復習と、書いてはならない言葉と逆に書かなくてはならない言葉、そしてウェブの情報の使い方について学んだ。

まず私が特に印象に残った、書いてはならない言葉は、「思う、考える、感じる、印象を持った」だ。なぜなら私は「思う“が駄目なら”考えた“だったらちゃんとして見えるのではないか」と勝手に勘違いしてレポートで多用していたからだ。しかし、言い方は変われども根本的には主観を単に述べているだけのため、前回習った「自分の意見を根拠づけ主張する」レポートには書いてはならない。だから、これらの感想を述べるだけのワードを書いてしまったらそれは消して、代わりになぜそう思うのか、こう考える根拠はあるのか、と考えて、自分の感想の理由や根拠を書くように意識していきたい。

次に、「製作者をウェブを用いて確認する」という行動がいかに大切なのかを学んだ。ウィキペディアやYahoo!知恵袋などの情報は間違っていることが多いため注意する、というのは中学高校でもずっと言われ続けたため、それらの情報を用いてレポートを書く、とい

コメント [y107]: 「公的機関」かどうかということより、統計学者がとった統計データや学術論文を参照すること。

うことはしなかった。しかし、今回の授業で学んだように、製作者の名前や出典を書いて一見正しそうなことを書いていても、ただの目立ちたがりであったり、“自称“の人がいたりして、でたらめな情報を書いているかもしれない。そのため、製作者について調べたり、出典元を実際に見たりすることで、自分の目で情報が正しいのか正しくないのかをきちんと把握したうえでレポートを書かなくてはならないのだと学習した。また、このような弱点があるためウェブ情報は情報を得るきっかけとして利用し、統計データや論文を主に参考にすることが大切である。

一つ質問があるのですが、「意識していきたい」「わかった」というのも書いてはならないワードですか。

コメント [y108]: これらは「感想」の言葉です。

4月21日の総合科学入門講座では前半はレポートの正しい書き方について、後半はウェブページの利用法について学んだ。前回の要点として、レポートは自分の意見を理由や根拠をつけて述べるものだとして学んだ。そこでレポートには書いてはならない言葉があり、その代表が「思う」だ。「思う」と書いてしまうとレポートに欠かせない理由と根拠を書かなくても気にならなくなってしまう。「思う」と書かず、その部分を理由と根拠に書き換えるように心掛けることが大切だ。他にも書いてはならない言葉がある。「いろいろ」「さまざま」「ある程度」「なんとなく」「考えさせられた」はその内容を具体的に書くべきである。「聞いたことがある」や「言われている」も使ってはならない。どこで言われているのか、出典を調べるべきである。「楽しかった」「～と知って驚いた」などの単なる感想も書いてはならない。

しかし書くべきこともある。レポートでは文章を短く切って接続詞で繋ぎ、起承転結を作ることが基本である。その中で「たとえば」「しかし」「それゆえ」「つまり」は使うべきである。テーマを書き(起)、「たとえば」でテーマに関連する具体例を挙げ(承)、「しかし」で反対の事例を検討し(転)、「それゆえ」と結論を導き「つまり」で最後のまとめをする(結)。短い文章を正しい接続詞で繋げることが大切である。

ウェブページは「制作者、サイト名、URL、閲覧日」を明記し引用することが基本である。しかしウェブページは信用できない情報で溢れている。それゆえ制作者不明のページや出典の書かれていない情報は使用してはならない。制作者が書いてあるページであっても、制作者名で検索し、信用できる情報かを調べる必要がある。ではウェブページはどのように使用すべきか。ウェブページはきっかけとして利用することが最適だ。ウェブページの内容についての出典を確認し、出典先の内容を引用する。信用できる出典先は最終的に学術論文に至る。ciNii(日本の論文検索ページ)や google scholar(欧文雑誌論文検索ページ)で論文を検索できる。政府や調査機関が行なっている統計データを使用するのも良い。事実確認として、図書館のホームページから新聞記事のデータベースを参考にするのも良い。

図書館の新聞記事データベースが全学で一人しか利用できないのは不便すぎるのではない。学部生・大学院生合わせて 7590 人(徳島大学、「学生数 国立大学法人徳島大学」、<http://www.tokushima-u.ac.jp/about/data/student.html>、平成 28 年 5 月 1 日現在)が在籍する徳島大学で、このデータベースを見ることはかなりの運が必要である。ページが見られず必要な情報が得られない可能性もある。

コメント [y109]: いままで何度も使っていますが、「他の人が使っていますからしばらくお待ちください」と言われたことは数回しかありません。みんな、使わないんでしょうね。

## 授業のまとめ

今回の講義では前回に続いてレポート・論文の書き方とウェブ情報を利用する際の注意

点を学んだ。

論文やレポートでは使用してはならない魔法の言葉(思う・いろいろ・聞いたことがある・~と知って驚いた 等)がある。それらの言葉を書きってしまったときは消して、根拠や具体性のあること、出典を調べて書くことが必要である。また、文章は短く切って「たとえば・しかし・だから。つまり」を基本とした接続詞でつなぐ。内容が起承転結の形をとるようにすることも重要である。

ウェブで情報を調べる際には必ずウェブページの制作者を確認し、製作者の名前を検索するようにする。Wikipedia などの制作者が匿名であるサイトは情報源として利用しない。データは政府や調査機関が行っている統計データや新聞記事のデータベースを使用する。そして現代社会で「信用できる記述」というものは最終的に学術雑誌に掲載された論文であるので、そこから情報を得るのが最も確実である。

#### 意見

自分は高校までの間に多くの「感想文」を書いてきた経験から、文章を書くときに「思う」や「感じた」を使いそうになってしまう。これからレポート・論文を書く際には注意してこれらの言葉を使ってしまうと確認したい。また普段からウェブページを閲覧するときには製作者を確認する癖をつけるように心がける。

コメント [y110]: 複数の学術論文を読んで比較検討する。

コメント [y111]: 「意見」というより、「決意表明」(感想の一種)ですね。

今回の授業では「思う」や「いろいろ」、「ある程度」、「聞いたことがある」、「~と知って驚いた」などの言葉を使ってはならないことを学んだ。このような曖昧で主観的な言葉を使ってしまった時は、それを消して、その代わりに理由や根拠、出典を調べて書く必要がある。

また、信用できる情報を抽出する方法も学んだ。制作者や、出典が書かれているかを調べることが大切である。政府や調査機関、学術雑誌に掲載された論文は信用性が高い。

ネットが普及されたことによって、情報を得ることも発信することも簡単になった。信用できる情報を選ばなければならない機会は大学生になる前からあるので、ネットを使う前にネットの使い方を学ぶべきだ。

コメント [y112]: 最近は小中校でもやっているようですが、これまでそういう講義を受けたことはありませんか？

今回の授業は、前回の内容に引き続いてレポートの書き方についてだった。「思う」を使ってはいけない、「いろいろ」や「さまざま」も抽象的な言葉であるからだめということがわかった。また、接続詞の大切さや信用できる情報の探し方についても知ることができた。特にこれまでのことを振りかえってみると、「いろいろ」や「さまざま」は自分がよく使っている言葉だった。意識していなければ使ってしまうようになるので、気をつけたい。また、コメントも一通り読ませていただいた。コメントを読んでも、自分が本当に4桁の字数の文章を書くことができるようになるのかという不安はある。なぜならまだこの程度の分量しか書くことができないからだ。しかしこれも練習として利用していくことで徐々にでも慣らしていきたい。次回の授業もぜひ今後の参考にしていきたい。

コメント [y113]: なぜ書けないか、自分で分析してみてください。

今回の授業は、使ってはならない言葉(理由や根拠がない「思う」、具体性に欠く「いろいろ」「ある程度」「考えさせられた」、出典を明記していない「聞いたことがある」「言われている」、単なる感想など)や、「たとえば」「しかし」「それゆえ」「つまり」の基本となる4つの接続詞、著者のわからない信用できない情報は引用しない、といった前回の授業を踏まえ、なおかつ発展した情報を得ることができた。



今回の質問は、万が一自分の知りたい情報で、著者や出典が明記されているウェブページ、本、論文が存在していなかった場合、その情報についてレポートを書くことを諦めなければならないのか、ということだ。「誰が書いたかわからない情報は信用できない」と講義で聞いて納得した以上、そのような情報を引用するつもりは毛頭ないのだが、そのような状況に陥った場合の対処方法を知りたい。どこかに必ず著者や出典が明記されている情報はある、というならば全く心配することはないのだが。

コメント [y114]: そのような事態はほとんどないと思いますが、もしそうなったら、あきらめた方がよいでしょうね。

今回の総合科学入門講座学術的発想と書き方 2 では前回の内容を詳しくした事と新しいことを習いました。最初は書いてはならない言葉を復習しました。それは単なる感想になってしまう「思う」や「いろいろ」「なんとなく」のような具体的に書かないことで使ってしまう言葉です。また、書かなければいけない接続詞として「例えば」「しかし」「だから」「つまり」があり、起承転結を作ります。そして、文章は短く切るようにしこれらの4つの接続詞を使うことを基本とします。

引用をする際には、必ず出典を書きウェブサイトの場合には「制作者」「サイト名」「URL」「閲覧日」の情報が必要です。しかしウェブサイトには信頼性が低い情報が多いため出典の書かれていない情報は信用しません。書かれている場合はその出典を調べます。

この講義の意見は現代社会において「信用できる記述」は最終的には「学術論文」とおっしゃっていましたがそれは違います。それはその論文を書いた人の主観が絶対に入ってしまうからです。だから、信用できる情報は主観が入らない統計データだけです。講義を受けていると信用できる情報はほとんどないとわかりました。

コメント [y115]: 残念ながら、統計データにも主観が入り込む可能性があります。また、解釈には主観が入り込む可能性は大きいにあります。ダレル・ハフ『統計でウソをつく法』（講談社）を読んでみましょう。

コメント [y116]: だからこそ、どのようにすればよいかを説明しました。

今日の授業では、前回の復習をした後レポートで書いてはならない魔法の言葉を習った。1つ目は理由や根拠を書かなくても気にならなくなってしまう「思う」「考える」「感じる」「印象を持った」である。私はこの言葉を使うことで理由や根拠がなくなっていることに気づいていなかった。2つめは「いろいろ」や「ある程度」などは使うことで具体的に書かかれていない。その他にも出典を書かずに「聞いたことがある」「言われている」と書いたり単なる感想である「楽しかった」「～と知って驚いた」は評価出来ないので使ってはいけない。その他にも「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」の接続詞は文章が短くなり読みやすくなるのでレポートを書く際には必要であることも学んだ。そして引用を上手く使いこなすには、まず本やweb上には嘘もあるので制作者を確認し信用出来るか判断する。ポイントは出典がないものは信用しない、政府や調査機関が行なっている統計データ、新聞記事、学術論文や学術雑誌は大体は信用できるので参考にする。前回と今回でレポートを書く上で注意する点やしてはいけないことがたくさんあると知ったのでひとつひとつ理解し改善していきたい。

ウィキペディアを使うことは、だれが書いたかわからない情報であるため使ってはいけないと聞き、今まで制作者名やサイト名、URL などについては気にもせずその情報を信用していたのでウェブサイトの情報に対しては自分自身が調べ、見極める力が必要である。実際にウィキペディアを使って色々調べてみたところ、脚注に様々な人の名前があり、さらに調べていくと大学の教授の教科書を参考に行っていることなどを知ることができた。つまり、ウィキペディア上の情報において嘘は多いけれども、全てのウィキペディア上の情報が嘘であるとは限らないため、ウィキペディアのすべてを否定せずに、信用性のあるも

コメント [y117]: 具体的にどのようにして調べるのか、学びましたか？

コメント [y118]: 教科書でなく、学術論文を参照の方が望ましい。

のは使用してもいいのではないだろうか。

まだレポートや論文の書き方はどのように書いていけばいいのかいまいち分からないが、課題などを利用し、反復練習しながら書けるように頑張っていきたい。

コメント [y119]: どうやって判定するのですか？

1 レポートを書く際に使ってはいけない言葉や書かなければいけない接続詞、ウェブ情報の使い方について

2 信用できるウェブ情報を見つけるにはどうしたらいいのか

3 出典が書かれているものであっても正しい情報が載っているとは限らないので、レポートに引用することのできる信用できる情報の見つけ方を知りたいと思ったから。

コメント [y120]: 授業で説明しました。授業のウェブページで復習してください。

匿名のウェブページを使用しない。出典の書かれていない情報も使わない。情報が信用できるかどうかしっかり確かめる。ということ今日は学んだ。統計データを調べるのも良いらしい。

曖昧な「思う」や「考える」などの表現は使うべきではない。箇条書きではなく接続詞を使った文章を書く。これらに気をつけたい。授業で聞いた内容を忘れず読書レポートに取り組みたい。

コメント [y121]: この授業コメントにも取り組んでください。

今日の講義で触れられた「～だと思ふ」という表現は自信のなさからくる断定を避ける表現である。「思う」「いろいろ」「聞いたことがある」などの書いてはならない魔法の言葉とされているものは、どれも便利でついつい使ってしまうのだが、レポートでは理由や根拠を示すこと、具体的に書くこと、出典を調べて明記すること意識しなければならない。はっきりした根拠があれば自信をもって主張することができる。いきなり論理的思考がスムーズにできるようにはならないので、普段から物事の根拠までしっかり考えて、論理的思考のくせをつけるべきである。

コメント [y122]: 根拠を書かずにごまかす表現。

また、目の前の情報が正しいかどうかを自分で判断できる能力を身につけることも大切である。講義で述べられていたように、今日のインターネット上の世界は嘘の情報で溢れている。私自身も今まで何の疑いもなく根拠のない情報を鵜呑みにしてしまっていたが、何の疑いもなく信じてしまう姿勢はとても危険である。匿名のウェブページの情報や、出典が書かれていない情報は信用しない、正確な統計データなどの数字で見ると気をつけて、自分で信用できる情報を選び取らなければならない。

(482 文字)

2 回目の講義も引き続き学術的発想と書き方についてだった。

まず、レポートや論文を書く際に書いてはならない魔法の言葉について学んだ。一つ目は「～だと思ふ」という言葉だ。この言葉を使ってしまうと、理由や根拠を書かなくても気にならなくなるからだ。「それは良くない!」と言い切ったとすると、「それはなぜ?」と理由や根拠を自然にもとめられるようになる。もし「思う」と書いてしまったら、それを消して代わりに理由や根拠を書くように心がける必要がある。また、「考える」「感じる」「印象を持った」も同様に使ってはいけない言葉だ。二つ目は「いろいろ」「さまざま」「ある程度」「なんとなく」「考えさせられた」などの曖昧な言葉だ。文章を書くときにできるだけ具体的に書くように意識すればこのような言葉は出てこないはずである。また、「楽しか

った」「～と知って驚いた」などの単なる感想もかいてはいけない。次に書かなければならない接続詞について学んだ。文章は短く切って接続詞で繋ぐ必要があり、「ところで」という言葉を使ってはならない。

起:テーマを書く。承:「たとえば」と、テーマに関連する具体例を挙げる。

転:「しかし」と、反対の事例を取り上げて検討する。

結:「それゆえ」と、結論を導き、「つまり」と、最後のまとめをする。

このように、「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」の四つが基本となる。次になぜウィキペディアや Yahoo!知恵袋をコピペするのはいけないのかについて学んだ。なぜダメなのかというと、誰が書いた情報が分からず、信用できないからだ。作者不明の情報は原則として使ってはならない。引用をする際は必ず製作者を確認しなければならない。そして、出典の書かれていない情報も信用してはならない。もし出典が書かれていたら、その出典の方を参照すれば良い。ウェブ情報はきっかけとして利用し、本当の正しい内容については統計データを探したり、論文を検索したりすれば正確な情報を使うことが可能になる。

以上のことを意識して「レポートや論文を」書けば良い。

コメント [y123]: この授業コメントもそうやって書いてください。

今回の授業では、前回の授業の要点の確認から始まった。前回の授業ではレポートの書き方、引用についてなどを学び、今回は詳しいレポートを書く上で気を付けるべきことと、どこから引用すべきかについて学んだ。まず、レポートで書いてはならない魔法の言葉については「思う」「考える」「印象を持った」「感じる」という具体性のない言葉である。特に「思う」については、この言葉を書くことで理由や根拠を書かなくても良いように感じてしまうようになるからだ。そのため、語尾は断言する形にするのが良いと学んだ。また、「いろいろ」や「さまざま」という言葉も具体性がなくなるためこういった言葉は避け、詳しく書く必要がある。逆に、書かなくてはいけないのが「接続詞」と学んだ。文章は長く続けすぎると読みづらく、主語と述語が合わなくなってしまうため文章は短く区切り接続詞でつないでいくことが重要である。「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」が4つの基本的な「使ったら良い」接続詞であり「ところで」などと言った、話を変えるような言葉はできるだけ使わない接続詞であると学んだ。

コメント [y124]: 使わなければならない

次に、引用についてももう一度前回の復習を軽く行ったあと、嘘の情報も溢れかえっている現代社会でどのようにして本当と嘘の情報を見分けるのかについて学んだ。まず大切なことは、制作者を確認することだ。匿名の情報は信用すべきでなく、また名前が書かれていても制作者の名前をもう一度ウェブ検索にかけ、本当に存在するのか、信用するに値する者なのかを確認する必要がある。内容の判定の仕方としては、原則として出典の書かれていない情報は信用しないということだ。そして、出典が書かれている場合にはそちらの方を参照する。そして、ウェブ情報はきっかけとして利用するということである。ウェブ上で正しい情報を求める場合、政府や調査機関が行っている統計データや新聞記事のデータベースを見るのが良いと学んだ。また、現代社会において最終的に信用できる記述については「学术论文」に至るということも学んだ。これらの学术论文、雑誌論文は日本語のみに限ると「CiNii」、欧米雑誌論文も含めるとすれば「Google Scholar」を活用すればよいと紹介された。論文を読むうえで、多くは英語で書かれているが案外読めたりもするものなので英語で読むようにしてみようということも良いと学んだため、論文から引用する際には「英語で読む」よう意識したい。

コメント [y125]: 実行してください。

今日の授業では、文章は短く切って接続詞でつなぐ事が大切であると言っていました。

また、文章を作るうえで、「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」の4つが基本であり、それらを使うことで、起・承・転・結で構成された分かりやすい文章が出来上がるということでした。

私は、この内容に賛成です。

なぜなら、1つの文章にあれこれ情報を詰め込みすぎて長くなってしまうと、文章を作る本人にとっては、途中で何を書いているのか分からなくなり、文の構成もおかしくなってしまうからです。また、それを読む人にとっては、その長さゆえに読む気が無くなり、せっかく中身のある事が書かれていても上手く作者の意図を感じ取る事が出来ません。

しかし、1つの文を短く切ると、相手に自分の意図することが分かりやすく的確に伝わります。例えば、新聞があります。新聞は万人が読むものなので、内容を分かりやすく伝えることが大原則です。実際、新聞を見てみると”「です・ます」調ではなく、”「だ・である」調”になっていて、文章をなるべく短くし、内容が的確に読者に伝わるように工夫されています。

それゆえ、私は、文章の作成には文章を短く切って接続詞でつなぐ事が大切であるという内容に賛成です。

今回も前回に引き続き、レポートの書き方についての講義を受けた。

「思う」や「感じる」などの言葉を書くとき自分の主観になってしまうため、使わずに書き、箇条書きではなく接続詞を使って文をまとめるように注意を受けた。また、信頼できない情報源の見分け方や、データや論文の調べ方も教わった。

授業の中で、先生は本は買うようにとおっしゃっていたが、中には買えそうにない高い値段の本や資料もある。気になる本やレポートの参考になりそうな本をすべて手元に置くことはできない。徳島大学の図書館は一般の本だけでなく普段目にする事の少ない古い文献や資料が充実しており、レポートにも十分活用できる。

ただ、人間の記憶は不確かなので、本を読み終えて内容は覚えられても、文章を一言一句覚えられない。たくさん読んだ中からレポートに使えるような本や、考えるのに役立つ本を選択して、用途に合わせて買うのか借りるのかを区別するのが良いのではないだろうか。

一つ質問がある。レポートで他の論文やレポートなどから引用をするときは、著者の方にこちらの名前や職業などの情報を伝え、使用すると「ことわる必要があるのだろうか」、ことわるときにはどのような連絡手段を取るべきなのだろうか。

コメント [y126]: 公正な形式で引用している限り、基本的には連絡する必要はありません。

初めに前回の小テストの答えの確認、要点の復習の小テストをした。前回は文章を引用する際には出所表示、明瞭区分性、主従関係の3点をおさえる必要があることを学んだ。

今回は使ってはいけない言葉、書かなければならない接続詞、引用する論文の検索の仕方の説明をうけた。何を書くにしても具体的に書くことが大切である。例えば、iPS細胞についての論文を書くのであれば、そのテーマについてもともと知識のない人でもその論文を読んで明確に内容を理解できる、かつ意見の根拠がはっきりしている必要がある。なぜなら、iPS細胞についてある程度の知識がある人ならば、多少の説明が省かれても内容を理解できるが、その分野について全くの素人であれば理解できない、あるいは誤って理解される恐れがあるからだ。そのようなことを避けるためにも筆者は正しい情報を正しい方法で引用し、抽象的な表現ではなく具体的な表現で論文・レポートを書かなければならない。

今回の講座を受けて疑問が一つ生じた。それは「日本人を相手に論文を書くとき、外国語

コメント [y127]: 基本的には日本語に翻訳しましょう。

の文を引用したいときは外国語のまま引用するのかということだ。外国語のまま引用した場合、読み手の外国語の能力により正しく伝わらないということが起こる可能性がある。例えばラテン語の原文を引用するとする。日本でラテン語に精通しているひとは専門職でもない限りなかなかいない。ラテン語のわからない人にラテン語で書いても伝わりにくく、自分の意見およびその根拠も明確にならない。このようなことを避けるためにも、日本文の注釈や訳をつけたほうがいいのだろうか。

今回の講義では前回の復習で要点をまとめ、小テストを行った。前回のことをもう一度確認し、すぐにテストをしたのでより理解が深まった。次に、「思う・感じる・考える・印象を持った」などの根拠を持たなくても文が成り立っているように感じてしまう、書いてはならない言葉についての講義があった。私もよく使っていた言葉だったため、思い返してみるきっかけとなった。いわれてみれば私の文もほとんどがあいまいな意味の文だった。また、書かなければならない接続語で文を適切に切り、あまり文を長くしてはいけないということも分かった。その後、ウェブには信憑性があるのか、という講義になった。ウェブのサイトから引用する時、まず大切なことは「制作者を確認し、名前を検索してみる」ということが分かった。また、サイトで出典が明記されているときは出典先の方を引用すべきであり、信憑性に欠ける、制作者がわからないようなものは引用すべきでないということも知れた。これからレポートや論文を書くときは、今回の講義を思い出しつつ、意味をあいまいにしている文ではなく、根拠のある文にしたい。

今回の授業では、レポートの書き方についてと、信頼できる情報の見分け方について学んだ。書き方については、レポートに書いてはいけない言葉を学んだ。「思う」「感じる」といった言葉の代わりに根拠、理由を考えること、「色々」「様々」「ある程度」等を使わず具体的に述べること、「聞いたことがある」で終わらせずに出典を調べることが必要である。また文章は短く切り、「例えば」「しかし」「それゆえ」「つまり」といった接続詞を用いる。情報の見分け方については、Web の場合は出典が明記されていないものは信用せず、明記されているものも出典元の方を参照すること、政府の統計、新聞のデータベース、学術雑誌に載った論文などが信頼できると学んだ。

これを聞いて、中高校生の時の調べ学習で、web 検索して上位に出てきたものをよく調べもせずに引用したことを思い出した。

正しい情報の見分け方を大学生ではじめて習うのではなく義務教育の一環として教えるべきだ。

最近では多くの人が何かを調べる際に web を使用しているが、web 上には間違った情報も多い。その中から正しい情報を得る能力は社会で生きていくうえで必須の能力である。加えて、現代は子供でも簡単にインターネットを利用し情報を得ることができる時代である。そんな時代に、大学生になるまで正しい情報を得る力が身に付いていないのはおかしい。それゆえ、**小学校や中学校の時から徹底して情報の見分け方を教えるべきである。**

今回の講義では、前回と同様にレポート・論文の書き方について学んだ。まず文章を書く際には「思う」という言葉は使わず、理由や根拠を述べる必要がある。同様に「いろいろ」「さまざま」「ある程度」という言葉は曖昧な表現であるため書かずに具体的に書く。「聞いたことがある」「言われている」という言葉も使わずに出典を調べる。

**コメント [y128]:** 他にも学ぶべきことがたくさんあります。義務教育の内容については精査、厳選することが必要です。「あれもやれ、これもやれ」では、小中学校の先生に教えられないことを教えさせることになりかねません。(ウェブ情報の使い方や論文の書き方など、たぶん小中学校の先生はそんなに知らないはずですが。教職免許の項目に入っていないから。)

次に、文章は短く切り接続詞でつなぐ。その接続詞の基本は「たとえば・しかし・それゆえ・つまり」の4つである。そしてこの接続詞に従って起(テーマを書く)承(テーマに関する具体例を挙げる)転(反対の事例を取り上げ検討する)結(結論を導き、最後のまとめをする)と文章を構成する。

ウェブページを引用する際には、制作者と出典が示されている情報を利用しなければならない。なぜなら、このことがわからない情報は信用できないからである。さらに制作者として実名を公表していても、本当に信用できるかどうかはわからないため一度Webで名前を検索する必要がある。そして出典として扱われている情報の方を参照する。しかし基本的にウェブページの情報は物事を調べるきっかけとして利用すべきである。

正確な情報を見極めるには出典を参照し、参照した出典の出典を参照するといった次へ次へとたどっていく必要がある。以上のように一つや二つの情報だけで物事を判断せず、より多くの正確な情報を駆使して多面的に考え文章を作成していきたい。

## 1. 授業のまとめ

論文において書いてはならない言葉がいくつかある。

一つは、「思う」である。なぜなら、「思う」と書くことで、理由や根拠を書かなくて気にならないからである。しかし、「思う」を消して、断定してしまうと、収まりが悪い。収まりをよくするためには、理由や根拠が必要なのである。

もう一つは、「いろいろ、ある程度、考えさせられた(一部省略)」である。これらの言葉も「思う」と同様、理由や根拠を書かなくても気にならない。しかし、理由や根拠がなく、具体性に欠ける。

以上のことから、「思う」や「いろいろ、ある程度、考えさせられた」などのような言葉を消して、具体的な理由や根拠を述べることで、論理的な文章を書くことができるのである。

## 2. 授業に対する学生のコメントと教員Yによる応答についての意見

総合科学部全員のコメントはPDFファイル82ページ分という膨大な量のものであった。その膨大なコメントの中で、『「調べ、知り、書き、読み直し、書き直す≠頭の中で考える」は不適切である』という意見が多いものであった。

この不適切であるという意見に対して、私は賛成である。がしかし、反対でもある。

まずは、賛成の意見から。「調べ、知り、書き、読み直し、書き直す」ことはレポートを書く上で重要なことである。その一番始めである「調べる」ためには頭の中で考えることが必要だからなのである。まず、「自分の論じるべき点を考えなければならない」。その論じるべき点が自分の興味関心ではなく、社会的、学問的、な点でなければならない。」「(SIH道場第15回 学術的発想と書き方 総合科学部入門講座 裏面,【なぜ大部分が引用になってしまうのか?】4月14日配布)と書いてある。調べるためには、何を論じるか考えなければならないのである。

次に、反対意見を。「調べ、知り...(省略)」をするために、単に頭の中で考えるだけでよいのだろうか。頭の中であれこれ考えていても何も始まらない。レポートを書くためには考えるだけでなく、考えたことを書き出すことが大切であると考えている。私はこの授業に対するコメントを読む際に考えたこと、自分と同じ意見、反対の意見などを見つけたらすぐに紙に書いた。そして、すべて読み終わった後その紙を読み返した。そうすることで、忘れることを防ぎ、かつ自分の意見、反対の意見を明確にすることができる。自分の意見、反対の意見を明確にすることが、論理的な文章へ近づいていくと私は考える。

したがって、「調べ、知り、書き、読み直し、書き直す」とは、頭の中で考え、それを紙

**コメント [y129]:** これは矛盾です。「基本的には賛成だが、一部、賛成できない点がある」。

**コメント [y130]:** プリントには(授業ファイルにも)「論じるべきことを発見する」となっています。

**コメント [y131]:** この場合の「考える」とは、具体的にどうすることですか? 授業ではくり返し、「この授業で「考える」という言葉は、「頭の中で考えること」ではなく、「調べ、知り、書き、読み直し、書き直す」という意味で使います」と述べましたよ。

に書き自分の意見、反対意見を明確にすることであると私は考える。

今回の SIH 道場では、前回の内容(引用の注意点、根拠づけて主張すること、反復練習)を踏まえて、更に詳しくレポートの書き方を知った。書いてはならない言葉(思う、感じる、気がする、いろいろ、考えさせられた、聞いたことがある)と、書かなくてはならない言葉(たとえば、しかし、それゆえ、つまり)を教わった。また、前回の引用の注意点より詳しい事も教わった。引用するには、制作者不明の web は情報の信用性が低いため利用を避ける。たとえ制作者が載っていてもその情報が信用できるかは不明だから、制作者を調べる。そして、信用性の高い情報は、政府や調査機関又は新聞のデータベースである。web 情報は、あくまできっかけとして利用する。

4月14日の山口先生のコメント(53)で、wikipedia の使い方の件について「自分の主張が正しいことの根拠にするのは不適切です。」と書かれていました。wikipedia は、自分の根拠の補足説明として、引用するのなら良いのですか。やはり引用する時の使い方が分からない場合は、wikipedia は使わない方がいいですか。なぜなら、自分の主張に根拠を付けるときに引用するが、根拠にならない物を引用すると、自分の主張はただの感想になってしまうからである。

また、コメント(94)では学生のレポートの姿勢についての件で「馬を水辺に連れて行くことはできるが、水を飲ませることはできないのです。」と述べられていました。レポートに取り組む姿勢は学生に任せるが、10分程でレポートを終わらせる学生には力は付かないから、そこは理解するように。という意味も含まれていますよね。なぜなら、学生のレポートを読んでいた時に、厳しいコメントを見たからです。

最後に、レポート(20行以上であり、意見の主旨は感想気味)にコメントがない場合は、コメントしなくてもいい位、自分でどこが悪いか分かりますよね。という意味ですか。それは、自分のレポートにコメントがなく、この人にはあり、この人にはない、と学生の方のレポートを読んでいる内に疑問に思ったからです。

コメント [y132]: 教科書 20 ページの「いわれていると書いてもよい場合」と基本的には同じです。つまり、「一般にはこんなことが言われている (が実は間違い)」という展開で、「一般の考え」の例として使うなどの場合には、使ってもよいでしょう。

コメント [y133]: 含まれています。

コメント [y134]: 内容が授業のまとめとして適切で、特に指摘すべき問題点がない場合には、コメントしていません。

## 1、まとめ

まず初めに前回の小テストの答え合せから始まった。前回の内容を改めて確認できる良い機会だった。

今回の授業では、書いてはいけない単語と、それを書いてはいけない理由について教わった。一つは「思う」。理由と根拠を書いていなくても気にならなくなるからである。書いてしまった時は、それを消して理由と根拠を考える。他にも「いろいろ」、「様々」、「ある程度」、「なんとなく」などの抽象的な言葉も使ってはいけない。具体的に書くことが大切だからである。また、「楽しかった」などの感想は主観的であるため、書いてはいけない。次は論文の構成と、その間に用いる接続詞について教わった。それは以下の通りだ。

起(テーマ)

たとえば

承(テーマの具体例)

しかし

転(テーマとは反対の事例の検討)

それゆえ

結(結論)

つまり

(まとめ)

また一文は短く簡潔である方がよい。

最後に、信憑性のあるデータの収集方法について教わった。前回教わった「出所表示」がしっかりとできるものであることが一番の条件である。また「哲学者」ではなく「哲學家」として実名を出したい、その道の専門家ではない方もいるので、製作者や著者の名前をウェブで検索すると良い。また参考にしようとする論文などに出典が示されていることも注目すべき点である。現代社会では、信頼できるものは出典をたどっていくと学術論文に至るので、そこまで辿り参照するとよい。

また、統計データが欲しい時は、政府や民間の調査機関を参考にするとよい。新聞記事のデータベースからも情報を得ることができる。

## 2、3 意見とその根拠

例として用いられた、少年の凶悪犯罪は実は増加していない、というグラフについて、少子化が進んで少年の分母が減っているなら割合で見ると増加しているのではないかと疑問を持った。そこで、先生と同じ警察庁の犯罪統計で調べたところ、増加していなかった。

次に、殺人で検挙された人のうち少年の占める割合が増加しているのではないかと疑問に思った。しかしそのような割合を示すデータを見つけることができなかった。データの収集技術の向上を今後の目標とする。

前回の課題への返答の一つに「具体例をたくさん入れると、時間が沢山必要です。90分間の限られた時間で、必要なことを説明するためには、ある程度の妥協が必要です。」(y151)とあり、今回は一例の紹介であるために割愛されたものであると理解できるが、実際にこの話題について論じる場合は、上記したような情報は必要か。私が行ったように疑問を持った人が調べれば、違う視点で見ても結論が変わらないとわかるので不要なのか。

今回の授業は、前回よりもレポート、小論文の詳しい書き方を学んだ。レポートを書く時に、まず製作者を確認して、出典の書いてある情報なら利用して良いと授業で習ったが、出典自体が間違っている可能性もある。出典を参照する場合、出典自体を自分で調べるべきですか？

今回の講座では前回に引き続き正しいレポートの書き方についてだった。初回の講座を終えた学生の授業コメントにあった意見や質問の結果を踏まえての説明があり、反対の立場を示す理由、正解がない問題について客観的な根拠に基づいて論じることの重要性、そして論じることにより正しい意見を作っていくことができ、意見が異なる他者と対話する能力というものが民主主義社会を支える基礎となる力であるらしい。

レポートで書いてはならない魔法の言葉やコピペではなく「引用」すること、その「引用」の正しい行い方などレポートの正しい書き方についての説明を聞いた。しかし私が思ったことは、それでは一体私たちは何を書けばいいのか、どのような言葉を使えばいいのか、むしろ何ならば書いてもいいのか分からなくなった。これはそもそも私たちが今までレポート、コピペと引用の違い、正しく説得力のある文章を書くということを特に意識せずに今まで過ごしてきたからであろう。そもそもコピペとはいうが一体コピペの何がいけないのか、私たちは何故コピペをしてしまうのか。私が疑問を抱いたこの原因には二つの理由が存在すると考える。

一つ目は前回の講座でも説明があったが私たちが今まで行ってきた「調べ学習」にある

コメント [y135]: それは面白いので、データを示してください。

コメント [y136]: 「殺人で検挙された人数」のデータは犯罪統計にありますから、単に割り算すればよいです。

コメント [y137]: 不可欠です！

コメント [y138]: どういう意味ですか？  
いずれにせよ、一つの文献を読んで満足するのではなく、出典に関係のある複数の論文を読みましょう。

コメント [y139]: まずたくさん文献を読み、それらを比較することで、自分なりの意見が出てきます。実際にやってみれば、書くべきことがたくさん出てきますよ。



と思う。そもそも「調べ学習」とは様々な資料から必要な資料を探し出すための技術やスキルを学ぶためだけでなく、その情報の中から主体的に目的に合った情報を選び取り、それを分析・評価して情報を再構成、検証し発表していくことが重要である。(文部科学省「第一章 4.2 調べ学習用教材・単元を充実させる」, [www.mext.go.jp](http://www.mext.go.jp), 2017年4月23日アクセス)。この定義から「調べ学習」とは、自分が調べた文献や資料を「引用」しながら正解のない問題について自分の正解を探す論文とは違い、すでに正解が存在している問題について調べ、多くの情報の中から必要な情報のみを取捨選択し、その情報をまとめ、そして発信することができる能力を育てていくために行われているものであり、小学校や中学校でも私たちは「調べ学習」と銘打った授業を受けてきた。だが、今レポートを書くに当たってこの「調べ学習」が自分の身に染みついてしまい、考え、自分の意見を持つということに難しさを感じてしまう。そう感じるのは今まで行ってきた「調べ学習」では、単に自分の調べてきたことをそのまま発表すれば終了であり、内容についてそこから自分の考えを作っていくというような発展的なことは行われなかったからだ。正解を探し自分の意見を作り論じていくというレポートに必要な力は全くもって重要視されなかった。そのため私たちはインターネットから取り出してきた「正しい」と思われる情報を書いておけば間違いはないだろうと「引用」と「コピペ」の違いを知らずに、そして「何故コピペがいけないことなのか」ということも気づいていなかったのだ。

そしてもう一つの理由は情報源を一つしか調べないということだ。現代の情報社会の中で、少し分からないことがあり携帯を使用し検索した際に大多数の人は一番上部、あるいは上位から表示されたページを開くのではないだろうか。そして一つのサイトに掲載されていた記事や文章だけを見て、それでもう気は済んで納得してしまう。課題が与えられた時も同じだ。上位にあるサイトの文章を読んでそれで「正解」を見つけたと思込みそれをレポートに単に要約したりコピペをしてしまう。だがインターネットの中にある情報はまさに玉石混交である。それに加え、一つの事象について人の考えは数学ではないのだから絶対とう「正解」は存在しない。それを念頭に置いておらず一つの情報源の中から正解を見つけてしまうことは何も考えられてなどおらず自分の意見も何も持っていない状況である。自分の中の正解というものを探し、考える過程において、複数の情報を比較し多角的に物事を捉え、違う立場から物事を見つめ直したときにその矛盾点に気づくことができる力は必須である。

今回の授業では、論文・レポートを書く時に書いてはならない言葉、情報の扱い方について学んだ。まず、書いてはならない言葉は「・・・と思う」である。「思う」と書いてしまうと理由や根拠を書かなくても成り立ってしまうからだ。「考える」「感じる」「印象を持った」も同様である。また、「いろいろ」「様々」「ある程度」「考えさせられた」も具体的にでなくなり、「聞いたことがある」「言われている」も書いてはならず、出典を調べなければならない。引用をする時には、その情報が正しいか否かを調べる必要がある。信用できる情報を見つけるのは難しいため、信用できない情報を見分けることが重要だ。製作者の確認、出典が書かれていないものは信用しない、出典が記入されている場合はその出典の確認を確かめる。統計データを扱う場合は政府や調査機関のデータを調べると良い。今回の授業で、普段なんとなく携帯やパソコンで見る情報が出典のないものが多く信用に足りないものが多かったので、引用する際に教わったことをもとに注意を払わなければならない。

**コメント [y140]:** これは文科省のトップページです。ページの URL を書いてくれないと、アクセスできません。

今回の総合科学入門講座では、前回に続きレポートや論文の書き方やウェブ情報の使い方について学んだ。レポートや論文では、「思う」や「考える」のような理由や根拠を書かなくても気にならなくなる言葉や、「いろいろ」などの具体的ではない言葉は書いてはならない。その代わりに、「たとえば・しかし・それゆえ・つまり」の接続詞を使い起承転結のある文章を書かなければならないということが分かった。また、ウェブページには膨大な量の信用できるかどうか分からない情報があるため、出典に気をつけ、自らその出典で確認する必要がある。

私はインターネットでの情報の出典は気にせず鵜呑みにしていたところがあるため、普段の生活から正しい情報を見つけるように気をつけ練習していかなければならない。そして、レポートや論文の書き方や根拠のある論理的思考を学ぶために論文を読んでいきたい。

今日学んだことは、いつも使いがちだけど論文やレポートには使ってはいけない言葉です。～と考える、思うという言葉は使いがちになってしまう。しかし、これによって、自分の主張を弱めることにもつながり根拠や理由を述べるのを避けがちになってしまうことを学んだ。

今日の授業を聞いているときに感想を書いてもそれは論文の一部にはならないといわれたが、感想なしで多くのことを書くことと思っただのようにすればいいのかということだ。今書いている授業レポートなどは、**感想以外にどんなことを書けばいいのか。**もし、授業内容をまとめたとしても、それは調べ学習の一環みたいなまとめ方にはならないだろうか。授業についてのレポートを書くときの例などを見たい。例を挙げれば、今までの先輩の中でよいレポートとされるものをそのまま見せるといったようなことをしてほしい。何事も最初は人をまねるところから始めて自分流というものを生み出していくので、レポートの書き方学習もそのような例を出してくれるのもっとうまくできるようになるはずだ。

今回の講義の目的は「レポートを書く際に書いてはならない言葉、書かなければならない接続詞」と「正しいウェブページの利用法」を学ぶことだった。

具体的に書くことで説得力のある文章に繋がる。「いろいろ」「ある程度」などの曖昧な表現を用いると説得力が欠けてしまう。そのため、そういった表現を避け、具体例を挙げて展開していくのが良い。逆に、書かなければならない接続詞「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」を用いることで起承転結のある文章を書くことができる。

ウェブページの使い方においては、出典の明記されていない情報の利用は避けることが求められる、出典の明記されているサイトから、最終的には最も信用できる記述である「学術論文」に至るのがベストである。

今回の授業の中で「～だと考える」という表現も避ける方が良くと仰られていた。確かに「～は良くない」などと言い切ってしまった方が理由、根拠に繋げやすい。しかし、それではたとえ反対の意見も盛り込まれていたとしても、**自分の意見のみが正しいという偏った表現**になってしまうのではないだろうか。「A と B、2つの意見があるが、こういった理由でAは不適で、Bの方が良いと考える」または「こういった理由でAは不適だと考えるのでBの方が良い」としてはダメなのか、質問させていただきたい。

前回に引き続き、今回もレポート・論文の書き方について講義を受けた。今回は主に、レポート・論文に書いてはならない言葉や表現、書かなければならない接続詞について。

**コメント [y141]:** 他の学生さんのコメントを読んでください。

**コメント [y142]:** 「正しい」と断定できるところまでしっかり調べたうえで、意見を書いてください。

また、データや過去の論文を引用したいときのウェブの利用法について学んだ。どれも重要なスキルであるのだが、特に自分が意識しなければならないのは「思う」という言葉を使ってはいけないということである。それは、まさに自分が「思う」を多用してきた人間であるからだ。

論文において「〇〇である」と断言すること。それは自分の立場を表明することであり、自分が誰かを批判する、あるいは誰かが自分を批判することになるという覚悟を持ったうえで、自分の立場が正しいと主張できる自信が必要となってくる。そして、その自信を持つためには客観的な証拠が必要となってくるため、信用できるデータを探さなければならない。

しかし、「思う」と書くことで理由や根拠を書かなくても気にならなくなる。つまり「思う」と書くことと楽なのである。しかしそこには覚悟や自信がないために、断言しているものと比べて説得力が激減してしまう。

自分はまだ「思う」と書いてしまう癖が抜けていないため、このような授業コメントなどの機会を通じて反復練習し、説得力のある論文が書けるようになるために努力するつもりだ。

今回の講義では、前回に引き続いて学術的発想と論文、レポートの書き方について学んだ。

一つ目は論文、レポートには書いてはならない言葉があるということだ。書いてはならない言葉とは、「思う(感じる、気がする)」である。それらの言葉を使うと、理由や根拠を書かなくても気にならなくなってしまうからだ。「思う」という言葉を使うととても楽にレポートが書けるがそれでは求められているようなレポートにならない。そこで、レポートを書いている際に「思う」という言葉を書いたらそれを消してその代わりに理由や根拠を考え、書くようにする。この際の「考える」とは、調べ、知り、書き、読み直すということだ。また、「思う」以外にも書いてはならない言葉はたくさんある。「いろいろ」「さまざま」「ある程度」「なんとなく」「考えさせられた。」これらの言葉は具体性に欠ける。文章が書くのが苦手なのは具体的に書かないからである。理由や根拠を考え、具体的に書くことが大切だ。「楽しかった」「~と知って驚いた」というような単なる感想は評価の対象にならないので書いてはならない。

二つ目は接続詞を使うということだ。文章は長く書くのではなく、短く切って接続詞でつなぐと読みやすくなる。文章には起承転結がある。「起」でテーマを書き、「承」でたとえば、と具体例をあげる。「転」でしかし、と反対の事例をあげて検討する。「結」でそれゆえ、と結論を導き、つまり、と最後のまとめをする。

三つ目は引用の方法をウェブ情報の使い方だ。ウェブで情報を調べて引用するときには出所表示をしなければならない。ウェブページの場合は制作者、ページのタイトル、URL、閲覧日時。本の場合は著者、タイトル、出版社、出版年、ページ。論文の場合は著者、タイトル、掲載誌名、出版年、ページを明記する。この時、制作者を確認する。実名を出している目立ちたがりの人の可能性もあるので制作者の名前をウェブで検索してみるとよい。また、ウェブ情報のすべてが真実であるとは限らない。本当か嘘かを見極めることが大切だ。そのポイントは、出典が書かれているかどうかだ。匿名のウェブページは信用してはならない。ウェブ情報はきっかけとして利用するのがよい。政府や調査機関が行っているデータや新聞記事のデータベースなども参考にする。ただ、現代社会において最終的に信用できる記述は学術論文に至る。だから学術雑誌に記載された論文を検索してみる。欧文雑誌論文も情報がたくさんあるので検索してみる。

コメント [y143]: そのとおりです！

文章を書く上で大切なのは、相手を読みやすい文章を書くことだ。自分が書いた文章を読んでもらうために読みやすく書くことは相手に対する礼儀でもあるからだ。そのため、接続詞をうまく活用することがとても大切である。今回学んだ接続詞「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」を使ってうまく文章を構成し、**より上手な**文章が書けるようにしていく必要がある。

コメント [y144]: 構成が明確な文章。

今回の授業では、引用するものとして適切なものである判断の方法や雑誌や新聞記事を検索する方法について学んだ。ホームページの場合にウィキペディアを使いがちだったが、誰が書いたのかわからない情報であるため信頼性がうすいので今後使用は控え、製作者がはっきりわかり、きちんと信用できる人であるか調べて、信用できる場合に使用することが大切である。しかし、こんなにも利用できる条件を厳しくすればするほど自分の欲しい情報が見つからない場合も増える。**その場合には、どうすれば良いのか。**憶測で書くわけにはいかないはずだ。という疑問がわいた。

コメント [y145]: 見つかるまで探す。

今回の授業は前回の復習から始まった。レポートを書く際の注意事項を教わった。レポートは自分の興味や関心で書くのではなく社会的に大事である事柄について自分の意見を根拠づけて述べる必要があると教わった。**教科書の最後に民主主義について書いている理由**について意見を異にする他者と対話する能力は民主主義社会を支える基礎であり、そうでなければ権力や暴力が強い力を持つ社会になると聞いた。

コメント [y146]: 授業で言ったのは、「この授業に民主主義についての回がある理由」でしたが。

今回の授業では使ってはならない語尾について学んだ。「思う」「感じる」は理由・根拠を書かなくてもよくなるので使ってはならない。また、「考える」「感じる」「印象をもった」も同様の理由で使ってはいけない。ほかにも「いろいろ」「さまざま」などがありこれらを使うと具体性に欠け文章になる。「聞いたことがある」「言われている」と書いたら、出典を調べる。また「楽しかった」のような感想は書いても構わないが評価にならないのであまり意味はないので書かなくても良いのである。

ここまでの文章でも実践して来たつもりだが文章を書く際は短く切って接続詞で繋ぐのがよいのだ。箇条書きは使ってはならず、使う接続詞は「例えば・しかし・それゆえ・つまり」で起承転結に当てはめて書くべきである。コピペではなく引用をするためにはウェブサイトなら制作者・サイト名・URL・閲覧日時を書く。本ならば著者・タイトル・ページ・出版年・出版社を書くことによりこれらは引用になるのである。ウェブサイトでは制作者を書いてない場合が多く、仮に書いてあったとしても制作者をウェブで検索するべきである。ウェブページの内容を判断する際はその出典を調べそちらを参考にするのが良い。不確かなウェブサイトは参考にしないようにし、ウェブ情報は調べるきっかけとして利用するのが良い。実際に情報を調べる際は政府や調査機関の統計データや新聞記事のデータベースを利用すれば良い。また論文を調べる際は「ciNii」「Google scholar」を使うと良い。

私は今回授業コメントを書いて禁止された語尾を使わずに書くことの難しさを実感した。教科書の中では「だ・である」を語尾に使うと良いとかいてあった。そこで上記の語尾以外にどのような語尾ならレポートで**使っても良い**のか教えて下さい。

コメント [y147]: 禁止されたもの以外は使ってもかまいません。みなさんのコメントを読んで、さらに「使ってはいけない語尾」を発見したら、お知らせします。

第二回の講義では、前回に引き続き「学術的発想と書き方」というテーマのもと、前回の講義の復習や論文・レポートにおいて書いてはならない魔法の言葉と書かなければならない接続詞、ウェブ情報の使い方について学びました。具体的には、前回の講義の要点と

して、レポートでは調べた根拠をもとに自分の意見を述べることに引用をする際に示すべき情報や、「思う」「感じる」「考える」「印象を持った」といった言葉を書く理由や根拠を書かなくても気にならなくなるため、そのような言葉を書いてしまったら、それを消して、その代わりに理由や根拠を考えること、文章は短く切って「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」の4つの基本接続詞でつなぐべきであること、また情報の内容が信用できるかどうかは制作者の名前をウェブで検索して確かめ、出典の書かれていない情報は信用しないということ、そして正確なデータとしては政府や調査機関が行っている統計データや新聞記事のデータベースが、信用できる記述としては「学术论文」が適していることを学習しました。

その中でも特に私が重要であると思ったことは2つあります。1つ目は「書いてはならない魔法の言葉」です。なぜなら、前回の授業コメントや大学入試の小論文などこれまで私が書いてきた文章のほとんどにおいてこの「書いてはならない魔法の言葉」を使用してきたからです。特に「思う」と「さまざま」という言葉を頻繁に使ってきました。しかし、今回の講義を通して、この2つの言葉は理由や根拠、具体的な言葉を避けているだけで、全く論理的な文章が書けていないことが分かりました。続いて2つ目は、データを調べる際には「孫引き」するのではなく、統計データを調べるということです。なぜなら、今回の授業の「近年、少年の凶悪犯罪が増加している」という例を信用してしまったからです。しかし、これは私たちが普段ニュースでこのような話題が多く取り上げられているのを見ていることや、誤ったウェブ情報に流されているだけであると分かりました。

このように論文・レポートを書く上で気を付けるべき点はまだまだたくさんあることが分かったので、今後のレポートや授業コメントで繰り返し練習し身につけていきたいです。

政府や情報機関が行っている統計データや新聞記事のデータベースを孫引きするのではなく、その元データを調べるということを言っておられましたが、**そもその元データが間違っているという可能性も否定はできないのではないのでしょうか。**確かにそんなことを言っていると、ネットの情報なんて一つも信用できないということになるかもしれないですが、世の中で百パーセント確かである情報を探す方が困難な気がします。例えば、「人は必ず死ぬ」というようなことは別として、今我々が学んでいることも10年後、100年後には実は間違っていましたということが公表されるということだってありえない話ではないはずです。情報は扱い方ひとつで世間を騒がすことだってできます。しかしながら、やはりネットに書かれている情報には頼らざるを得ないときがあるはずです。コピペも情報の扱い方の問題なのでしょうか。

コメント [y148]: コメント y52 を参照。

今回の授業では「書いてはならない魔法の言葉」と「ウェブの信用性」についてを学んだ。まず書いてはならない言葉は「思う」だ。なぜならば「思う」と書いてしまうと理由や根拠が示されずただの感想になってしまうからだ。大学での学びは高校までと違いしっかりとした根拠をもって具体的に組み込まなければならない。なので感想になってしまう「思う」という魔法の言葉は使ってはいけないということだ。その一方で書かなければならない接続詞もある。それは「たとえば、しかし、だから、つまり」の四つだ。これらの接続詞を使うと文章が起承転結でまとまりやすくそしてわかりやすく表現することができる。

次に「ウェブの信用性」についてだ。ウェブ上には誰が書いたかわからない信用性が低い情報があふれている。ではこれらの情報と信用できる情報をどのように見分けたらよい

のだろうか?まずすべきことは出典を確認するということだ。そして出典が書かれていたらその出典している人について確認する。そして調べていくと信用性が高い情報にたどりつくことができる。そして忘れてはならないことはウェブの情報は「きっかけ」として利用するということだ。その情報に頼りきらずに一つの材料としてその情報を使いそこから自分の意見を述べ、考えを深めていくということが重要だ。

今回のコメントは「いろいろ」、「さまざま」や「思う」、「感じる」を使わずに書くのは難しいが頑張って書いてみる。

前回のコメントに書いた興味・関心などを書いてもいいのではないかということについて今回の授業で興味・関心は調べる動機にはなるが自分の主張の根拠にはならないと**ならないと**おっしゃっていた。その理由が自分の興味・関心のあるものを書いてしまうと自分の中でだけ正しいと思っている知識が表立ってしまうから。興味・関心を書かないのは難しいが実践していきたい。

この授業で学ぶことを活かしてレポート・論文が書けるようになるためにひたすら書く練習を繰り返していきたい。

今回はレポートの書き方について前回より詳しく学んだ。

私の知りたかった書いてはならない魔法の言葉というもの、その反対に書かなければならない接続詞、また、ウェブの利用法を知ることができた。

最初に、「思う」「考える」「感じる」「印象を持った」などがマジックワードであると学んだ。私は、これらの言葉を今までとても頻繁に用いていた。だから、急に用いずに書こうとすると難しいものがある。しかし、学んだからには、これらの言葉を用いずに上手く文章が書けるようになりたい。

また、「いろいろ」「さまざま」などの言葉も書いてはならない魔法の言葉であると学んだ。面接練習のときにもよく言われたが、駄目だと分かっているにもかかわらず使ってしまうほど便利な言葉である。具体的に書くということがよく分からないので、どのようなことを意識して書けば、無意識に使わずに書くことができるのかが知りたい。

また、ウェブ情報というものは、なんでも信じてしまいがちであるので、しっかり疑いの目を持ち、調べるということを念頭に置き、ウェブ情報をうまく活用していきたい。

今回の授業の内容は、論文・レポートの書き方とウェブの利用法である。

まず、書き方についてである。論文・レポートには根拠のある意見が必要だ。だから、書いてはならない言葉がある。思う・感じる・考えるなどの根拠や理由がなくても気にならない言葉やいろいろ・さまざまなどの具体的ではない言葉、単なる感想になっている言葉だ。しかし、書かなくてはならない言葉もある。接続詞の「例えば・しかし・それゆえ・つまり」だ。これは、文章を短く区切り、箇条書きにさせないために必要になる。

次にウェブの利用法についてだ。前回の授業で学んだようにコピペではなく引用をする。しかし、ウェブには嘘が多い。だから、信用できる情報を見分ける必要がある。特に、匿名のウェブサイトや出典の書かれていない情報は信用しない。最終的には、政府の統計データや学術論文を利用し、ウェブ情報はきっかけとして利用するのが良い。論文は図書館のウェブページから検索できる。

接続詞で文章を構成すると書いてありますが、**使わない方が良い接続詞**は何があります

コメント [y149]: ところで。

か。

レポート及び論文を書く際には「思う」と言った単なる感想を示す表現は使用してはならず、理由や根拠を具体的に書くことが大切である。具体的に書く上では自分の使用する情報の出典を調べるのが重要だ。情報を得る手段としてウェブを使用する際には注意が必要だ。特にウィキペディアは情報発信者が不明瞭であるため信用することができない。ただし、情報に興味を持つきっかけとして利用するには良い。ウェブを利用する目的としては、1つに政府や調査機関が発表しているデータを収集すること、もう1つには論文を検索することがある。学術雑誌に掲載されている論文は信用できるとされている。また文章を書く際には起承転結を大切に、接続詞を使用することが大切である。

ここでは、論文として掲載されており、出典がはっきりとしているものは信用出来るとされているが、論文の中にも極端な内容のものも存在していたり、人によって賛否の分かれるものも存在している。そのような時に「本当に信用できる情報」というのはどのようなものなのだろうか。

コメント [y150]: コメント y52 を参照。

今日の総合科学部入門講座では、論文において使ってはいけない言葉、論文を書く際のウェブ情報の使い方についての説明があった。「思う」は根拠や理由を書かなくても気にならなくなるような言葉であるので論文において使ってはいけないことや、具体性を示すために使ってはならない接続詞、逆に使うべきな接続詞について学んだ。匿名のウェブページを信用してはならないと学んだが、インターネットの利点として自分の素性を隠して誰でも意見できるということがある。論文やレポートを作成する際に不特定多数の意見を集めにそれを使うことはできないのであろうか?たとえば、某巨大ネット掲示板や SNS。確かに、素性が分からないという欠点はあるが「多くの意見をすぐに集められる」という点で優れているのではないかと?

コメント [y151]: そうした利点はあるでしょうが、論文やレポートの作成に役立つ利点ではありません。

レポートで引用をする際、匿名のウェブサイトや出典の書かれていない情報は信用してはならない。現代では、誰もがどこでもネットに繋がるユビキタス社会であり、同じく誰もが気軽にネット上に情報を載せることができる。それゆえ、正しい情報のみならず、間違った情報もネット上に多くあがっている。だから、どこの誰が書いたかわからない情報は信用してはいけない。また、出典が書かれていたら、出典の方を参照することが重要である。ウェブサイトの情報はきっかけとして利用するのが良い。以上のことを今回の授業で学んだが、学術論文、雑誌を参照した文章はウェブ上のものであっても(参照したものが正しいものである)正しい情報であり、出典まで遡る必要はあるのかが疑問だ。ウェブサイトではその出典内容をわかりやすく掲載している場合が多く、内容理解が容易であるからだ。

今回は前回に引き続き論文・レポートの書き方と書く過程での注意すべき点を学んだ。文末には「思う」「感じる」「気がする」と使いがちであるがそれらは論文・レポートにおいて逃げの文末である。断言しないことによって根拠を問いただされないのである。言い換えれば、自分の意見に根拠がないことを示しているのと同じことなのである。

しかし先生の説明を聞いていると、「思う」などと書くことによって理由や根拠を述べないことが問題だとおっしゃっていた。そこで私は理由や根拠を明示すれば「思う」などの文末を用いてもよいのではないかと考えたが、その疑問には先生がその場で答えてくださった。先生は逃げの文末を使わないでまず書いてみるのが大事だとおっしゃった。加えて、実際にそうしてみると文章を書くのが苦しくなるはずだとおっしゃった。確かに逃げの文末を使わなければ文章を書くのは苦しくなるだろうし、そうすることで練習することが大事なのだろう。それを繰り返すことが反復練習であり、先生がおっしゃっていたように反復練習によって私たちの論文・レポートを書く技術が向上していくのだ。

そこで質問がある。ある程度書く技術が上達した人たちは理由や根拠を述べられるはずなので「思う」を用いてもよいのではないかと考えたのだが、理由や根拠をきちんと述べられる人たちが「思う」を用いないのはなぜなのだろうか。回答よろしくお願いします。

コメント [y152]: なぜそうなるのですか？理由や根拠を述べたら、「思う」と書く必要がなくなります。

今回の授業では、論文やレポートを書く際に使ってしまいがちだが、実は使ってはいけない言葉を学んだ。例えば、「思う」や「考える」である。「考える」という言葉は私も使ってしまいがちなので、今回の授業で、改めて理由や根拠を調べることの重要性を感じた。他にも、web を利用する際、その情報が信用できるものであるかどうかの見極め方を学んだ。前回の授業の復習として、web から引用する際には閲覧日時を、本や論文から引用する場合は出版年を明記することを確認したが、情報はどんどん新しくなっていくものなので、同じ内容でも現在に近い情報のものを使った方が良いのか疑問に思いました。

コメント [y153]: 信頼度が同じなら、新しい方がよいでしょう。

今回の授業では、「思う」、「考える」、「感じる」、「印象を持った」などの言葉は根拠や理由を書かなくても気にならなくなるため、「いろいろ」や「何となく」などの言葉は具体的ではない、「楽しかった」、「驚いた」は単なる感想であるという理由から論文・レポートでは書いてはいけないということも学んだ。私は今まで文章を書くときこれらの言葉をよく使っていたのでこれから気をつけていきたい。それから、ウェブ情報の引用の仕方についても学んだ。私が普段から良く利用しているウィキペディアや Yahoo!知恵袋は匿名であるため、情報の信憑性が薄く、引用で使うには適していない、出典や制作者の名前が書かれていない情報は信用しないという内容だった。また、情報の信用性を判定するために、製作者の名前をウェブで検索することが大切だということ、政府や調査機関が行う統計データや学術論文は信用性が高いということも学んだ。

ウェブページは匿名性が高く、嘘の情報が多いので、引用するときはウェブページの情報より本の情報を使ったほうがいいのだろうか。本の中でも間違っことを述べているものもあるだろうが、ウェブページと違い、制作者不明ということがないため信用性はウェブページより高い。だから本の情報の方が引用に適しているのではないのか。このことについて先生の考えが知りたい。

コメント [y154]: コメント y104 を参照。

レポートにおいて用いてはいけない言葉がある。「思う」など簡単に収まりをよくしてくれる言葉を語尾にもってきてはいけない。これによって、理由や根拠を書かなくても気にならなくなり、レポートではなくなってしまう。また、「いろいろ」「何となく」「考えさせられた」などの具体性のかけた言葉や、単なる感想を思わせる言葉を用いてはいけない。それに対して書かなければならない接続詞がある。基本として「たとえば・しかし・それゆえ・つまり」の4つがある。これらを起承転結に合わせて用いることが重要である。



また、引用を行ううえで使用してはいけない情報がある。主に、製作者がわからないウェブページと出典の書かれていない情報には注意が必要である。それらの情報には信憑性があまりなく、ほかのところからコピペしている可能性が高い。だから、出典が書かれている情報があれば、その出典の方を参照にすること。また、ウェブ情報はきっかけとして利用するのがよい。

利用できる情報として、政府や調査機関が行っている統計データや新聞のデータベースがよい。そのときに図書館のウェブページを利用するとよい。また、信用できる論文として「学術雑誌」に掲載された論文や「学術論文」がよい。そして、いつでも読み返すことができるように参考文献はなるべく買うべきである。

質問です。情報を引用する際、あまり古すぎないものをえらんでいます、**どれくらい古い情報なら許されますか。**

コメント [y155]: テーマによるでしょう。

今回の授業では、前回の授業の復習と書いてはならない言葉と書かなければならない接続詞、そして、ウェブの利用法について学んだ。思うや考えるという言葉は、理由や根拠を書かなくても気にならないように感じるが、それらを書かないと論文やレポートとして成り立たないので、思うという言葉を使うのではなく、その代わりとして理由や根拠を書く必要がある。また、たとえば、しかし、それゆえ、つまりの四つの接続詞を用いることで文章の起承転結が見えてくるので、書かなくてはならない。そして、ところでのように話題にズレが生じるものはあまり使うべきではない。ウェブの利用におけるポイントは、出典の書かれていない情報は信用しないということだ。そして、データを調べる際には、政府や調査機関が行っている統計データや新聞記事のデータベースを用いる必要がある。また、論文を検索する際に、最も信用できるものは、学術論文である。学術論文とは学術雑誌に掲載された論文のことである。そして、欧文論文を探すときは、**Google Scholar** を用いるのが良い。

今日の授業を聞いていて疑問を持ったのだが、出典が書かれていない情報や匿名のものは信用しないと言っていたが、もし自分が論文に書こうとしている分野のことについてあまり役に立つ情報がないときにも、それらの情報を少しでも利用することは**だめなのか。**気になったので教えていただきたい。

コメント [y156]: だめです。まずは、先行研究がちゃんとある分野について研究しましょう。

今回の授業では、まず初めに前回の授業の復習をして、小テストをしました。その後2回目の授業に入りました。今回は、書くべき言葉と書いてはいけない言葉について教わりました。例えば、「思う」という言葉など単なる感想は書かずに具体的な文章を書くことを心がけ、起承転結につながる接続詞を使って、文章を構成するというのを学びました。次にウェブ情報の利用法を学びました。データなどはサイトの情報をそのまま引用するのではなく、確実にここが発信源だと分かる情報の情報を使うということを教わりました。今回は私がコメントやレポートなどを書いていて疑問に思ったことを質問します。質問は、**何回も同じ言葉や似たような言葉を同じレポート内や、コメントで使用しても大丈夫なのか**ということです。例えば今回の私のコメントでは、「教わった」や「学んだ」などの言葉が多数出てきています。そのような場合、似た意味でも言葉が変われば使っても大丈夫なのでしょうか。

コメント [y157]: 読んでいて見苦しくない程度なら大丈夫です。

今回の講義の内容は前回と同様に引用の一つとしての出所表示に示すべき情報の確認と、

レポートを書くにあたっての言い回しや、ウェブの利用法についてであった。

前回の講義を終えて私はレポートに書くにあたって必要なのは、根拠のある主張であって自分の主観的感情ではない。そう結論づけたが、今回「思う」や「考えた」などを用いてはいけないと知り、前回の自分の結論が正しいものであった事を認識できた。違っているなら指摘して頂きたい。

さらに今回接続詞の必要性を知り、それらは私が今まで書いた文章ではあまり使った事のない、「それゆえ」などを用いるという事に慣れるためにはこうして「授業の感想やコメントを書くより、読書レポートのように実際に書いてみるほうがよいのでは」と疑問を持った。

私はよく「～と思う、～と思った」と言う言葉を使う。大学受験の時の小論文対策や、夏休みの読書感想文、弁論文でもよく使ってきた。もう癖付いてしまっている。それを大学のレポートで使うなどというのはとても厳しいことであり、使ってしまいそうになる。別に使ってもいいんじゃないか。「～と思う」を使用した後、理由や根拠を書かなくても気にならない人もいるかもしれないが私たちは大学生だ。理由もかかないで話を終わらせようとする人の方が珍しいのではないか。消す必要はなく、しっかり理由や根拠を書くのであれば使用してもいいだろう。

レポートで最も書いてはいけないことは「思う」という言葉。

「思う」を使うと意見、考えが曖昧ではっきりしない。

理由や根拠を書かなくてもごまかせてしまう。

前回の授業で習った通り、レポートとは客観的な根拠のある論理的な主張を述べるものであるため、「思う」と書いてしまうと、それは単なる個人の感想となってしまう。主張が弱まる。

引用について、匿名のウェブページや出典の書かれていない情報は信用してはいけない、と学んだ。

私は日常よく、分からないことや疑問を感じることもあるとインターネットを用い調べる。これまで、ウェブページの制作者や出典など意識したことがなかったが、この授業を機に見てみると、思いの外、匿名のウェブページが多かった。

インターネットはとても便利であるが、正しい情報を得るためには気をつけて利用しなくてはならない。

今日の講義のポイントは、書いてはいけない言葉の種類と正しい引用の仕方だ。一番よく分かったことは、「思う」「いろいろ・さまざま」「聞いたことがある」がなぜよく使われるのかということだ。普段の文章でも、思うなどの言葉を使っている。小論文の練習をしていたときは、思うの代わりに「考えた」を使っていた。これらの言葉は、根拠や理由を書かなくていいからという答えにとっても納得した。確かに便利で、いちいち調べないで済む。これから大学で出されるレポート課題や論文作成時には、これらのことばを無意識で使ってしまうないように意識していきたい。「例えば・しかし・それゆえ・つまり」の起承転結をしっかり使えるように心がける必要があることも学ぶことができ有意義な時間を過ごした。引用では、製作者・サイト名・URL、さらには閲覧日まで書き記さなければならぬことを知った。今までURLしか書いていなかったような気がする。著作権法違反にならないよう、またコピーと言われないようなレポートや論文を書いていきたい。

**コメント [y158]:** 授業の「感想」ではなく、授業に対する意見を書くようにしてください。読書レポートを書くことはもちろんためになります。毎週の授業コメントも練習として活用してください。

**コメント [y159]:** 授業でも言ったとおり、「思う」を使わない練習をしてください。

**コメント [y160]:** 具体的にどのようなことに気を付けるのですか？どのように利用すればよいのですか？

今回の授業では、レポートの書き方を学んだ。

まず、レポートでは自分の意見を根拠付けて述べなければならない。ここで重要なことは、興味や関心は「動機」であって「根拠」ではないので、興味や関心だけで書いてはならないということだ。次に、書いてはならない言葉があるということだ。「いろいろ」「さまざま」「ある程度」「何となく」等は具体的でないから良くない、「聞いたことがある」「言われている」は出典を明らかにしていない為良くない、「楽しかった」等の感想は個人の感情なので論理的でなく根拠がない為**良くない**、ということ学んだ。

さらに書いてはならない言葉だけでなく、書かなければならない言葉として、「例えば」「しかし」「それゆえ」「つまり」のような接続詞があり、文章を短く区切りながら起承転結のある構成にしていかなければならないということも学んだ。

最後に、引用する時は、誰が書いたのか分かる情報を使用し、出典を示すことが必要であるということも学んだ。

このように、レポートを書く時には多くの注意事項がある。これらについて、十分に気を付けてレポートを書かなければならない。そして、私は、この講義で、相手側にこちら側の考えを論理的に説明することによって自分の考えを示す必要があると考えた。

質問です。講義の中には「今日の講義を受けて何を考えたか?」ということについて、意見を書かなければならないものがあります。本日の総合科学入門講座では「思う」は書いてはならず、「考える」と書いてもだめだと教わりましたが、「何を考えたか?」と聞かれている時にも「~だと考えた」と答えてはならないのでしょうか?

コメント [y161]: 評価できない

コメント [y162]: 他の講義については、その抗議の担当教員に確認してください。

第二回、SIH 道場では、前回の反省・復習と、書いてはならない魔法の言葉、接続詞を使うこと、そして出典源の信憑性を学んだ。「思う・考える・感じる・・・」等の具体性を欠かせる表現を避け、「いろいろ・様々」という文を書くのが苦手だという原因となる言葉に留意し、自分の書いた言葉に自らツッコミをかましていけば、論文は具体性を伴う。さらにツッコミに対する説明補足として出典源を明確に示した情報を加え、ここに、箇条書きにならないように文の役割を決めて他の文とつなぎ合わせる接続詞を挿入すれば、もう誰にもコピペだとは言われまい。

しかしながら、いざやってみると、なかなかうまくできるものでもない。だらだらと書き綴ってみたり、しまいには面倒になって投げやりになったりと、うまく前に進まない。そりゃあそうだ、初めからうまく立ち回れる人なんていない。だから、大学生の間(特に1・2年生)になんども書いて、反復の中で磨きをかけるのだ。y教授からありとあらゆるところにベケをつけられても、諦めずには書いてみるのが重要だ。

インターネット、新聞やテレビなど、信頼できると思いがちなものにも、嘘は含まれている。引用の際には、注意が必要である。例えば、インターネットであれば、ウェブサイトの製作者を検索して調べたり、それでも頼りない場合、出典の方を検索にかけてみることで、信用できるかを判断できる。出典のない情報など、信用するに値しない。政府の公式ホームページや、学術誌に掲載された論文は頼れるものになるだろう。他者の情報はあくまでも自分の論を進めるきっかけとして機能しなくてはならない。

ここまですを踏まえて、前に提出した授業コメントを振り返ってみる。いかに私が雑に取り組んでいるかがわかる文章だった。勝手な自論を建てた挙句、具体的に何も書いていない。こうならないよう。**日々精進!**

コメント [y163]: 読み直し、書き直す!

何かを書く時、『思う、感じる』は多用しがちだ。また、接続詞を用いて順序立てて文章化していくという行為になれない所が往々にしてある。こればかりは練習あるのみなのだろう。

今回の講義で興味や関心は調べる動機にはなるが主張の根拠にはならないという言葉が出たが、その通りだ。

例えば私は歴史に関心がある。私は歴史を調べるのが楽しくて楽しくて仕方がなくなるだろう。けれど、元々興味があつて、関心があつて、「好きなこと」ほど私達は反対意見を出しにくい。または、自分の信念を曲げづらい傾向がある。「信念を持つことは大切」なものであるが、それゆえ広い視点が持てなくなるのではないか。多面的なものの見方を身につけ、論理的思考力を養う練習としてレポートを用いるのであれば、興味や関心ではなく、問題解決意識を持つべきである。

今回の講義の『書いてはならない魔法の言葉』の例として出てきた言葉の中に、私が今まで文章の中で使用していたワードが多く出てきました。「～と知って驚いた」はよく使っていて、まさかダメワードであるなど思いもしませんでした。やはり、これも感想に入るため書いてはならないのだと思いました。レポートには具体的な根拠が必要であることを第1回、第2回の講義で学びました。また「それはよくないと思う」という文章の「～と思う」はダメだ、理由や根拠を書かなくてもいいような気がするからだ、とおっしゃいましたが「～と思う、なぜなら～」という形で続けても「～と思う」は使ってもいけないのでしょうか。

今回の講義で学んだことは、「思う」のかわりに理由や根拠をかくこと、また色々や様々という言葉を使ってしまうのは具体的に書かないから。逆に書かなければいけない接続詞等を学んだ。私は今まで小論文などで今回使つてはいけないといわれていた言葉を使つていたのですがその理由が理解できました。

質問なのですが、最近 Twitter など政治的なことを呟く事例などがありますが、Twitter の発言から引用は可能なのでしょうか。現在政治家のみならず、評論家も Twitter を初めとする SNS を用いることが多くなっているのでは疑問です。

今回の授業は前回の授業内容の復習と書いてはいけない言葉、書いて良い言葉、ウェブ情報の使い方を学びました。

レポートを書く際、某予備校の先生がテレビで言っていたことを信用し、もしレポートで使える内容ならその先生の名前、言っていた番組名、視聴した日付を明記しレポートで引用してもよろしいのでしょうか？

今回の授業はレポートの書き方とウェブの利用法についてだった。まず書き方編では、「思う」と書くのではなく理由を書く・「いろいろ」「ある程度」などの曖昧な言葉を用いるのではなく、具体的に書く・情報の出所を調べる・接続詞を駆使するの4つを学んだ。次にウェブの利用法編では、匿名のウェブページは信用しない・出店の書かれていない情報は信用しない・ウェブ情報はきっかけとして利用するの3つを学んだ。

コメント [y164]: なぜですか？信念を「持つこと」よりも、信念の中身の方が大切でしょう。そして、もし信念が客観的に間違っていたら、受け入れることが必要です。

コメント [y165]: 使つてはいけません。授業でも言いましたが、使わない練習をしてください。

コメント [y166]: 何の目的で引用するかによります。「トランプ大統領はツイッターでこのように言っている」などの場合なら、OKでしょう。

コメント [y167]: 具体的にどのような内容を、どのような目的で引用するかによります。それらを書いてくれないと判断できません。

コメント [y168]: 出典

ウェブの利用法のなかでもデータを調べるといった項目について述べたい。情報のありそうな場所の例として政府や調査機関が行っている統計データが挙げられている。そこで注意したいのは、そのデータは政府が調べているし、教授が信用できると言っていたからといって全てを鵜呑みにしようとするのは間違いということである。少年の凶悪犯罪の件数を例に挙げると、確かに厳密に調査されているかもしれないが果たして政府は全てを認知できた上で、データを公表しているだろうか。答えは否である。なぜなら日本で起こった全ての少年の凶悪犯罪を認知するのは不可能だからだ。だから鵜呑みにしてはいけない。私は教授が言っていたように政府が調べた統計データであっても参考程度にするべきだと考える。

コメント [y169]: 「殺人」については、日本の警察はほぼ 100% 認知しています。

コメント [y170]: 具体的にどのように扱うのですか？

#### ～書き方編～

レポートには、書いてはならない魔法の言葉がある・・・「思う」だ。

普段私たちが何気なく用いるこの言葉をレポートで用いると、理由や根拠を書かなくても気にならなくなり、感想文になりがちになる。そこで、もし「思う」を書いてしまったら、それを言い切りの形に直し、理由や根拠を補えば良い。さらに、なるべく抽象的な表現は避け、具体的に述べることが重要である。

また中学のときに習った起承転結を意識し、「たとえば・しかし・それゆえ・つまり」で文章を構成する。特に反対意見を踏まえた「しかし」はレポートに必要不可欠である。こうすることで、文章に論理性が生まれる。

#### ～ウェブ利用法編～

前回引用について触れたが、出典に注意しなければならないことは理解した。ただネットには誤った情報も氾濫していることは自明である。そこで制作者が確認しづらい Wikipedia や Yahoo 知恵袋は使ってはならない。あくまできっかけ程度に用いる。そこで引用に適した文献として挙げられるのは、政府や調査機関が行っている統計データや新聞記事、学術論文である。匿名のウェブページや出典の書かれていない情報は基本的に信用しないと肝に命じた。

レポートを書く際に、書いてはならない魔法の言葉がある。例えば、「～だと思ふ」、「考える」、「感じる」などである。これらの言葉は、理由や根拠を書かなくても気にならなくなるからである。もしこれらの言葉を書いてしまったら、その言葉を消して理由や根拠を考えることが重要だ。その他にも、「いろいろ」や「ある程度」などを書いてしまうのは、内容を具体的に書けないために書いてしまう言葉なので、レポートが苦手になってしまう。また、「楽しかった」などの感想はレポートとして評価できないため、書いてはならない。

書かなければならない接続詞もある。代表的な接続詞は「例えば」、「しかし」、「それゆえ」、「つまり」の 4 つである。文章を短くまとめながらこれらの接続詞を使って、起承転結をしっかりさせることが重要である。

次に、レポートを書く際には情報が必要だが、それらの情報をコピーではなく引用として使用しなければならない。そのためには、出典を書かなければならない。例えば、ウェブサイトの情報を引用したい場合、製作者、サイト名、URL、閲覧日の 4 つの情報が必要である。

しかし、ウェブの情報には多くの嘘が紛れ込んでいる。情報の正確さを確かめる指標として、製作者を確認することが重要である。匿名の情報や出典の書かれていない情報は信憑性がないため、信用してはならない。また、ウェブの情報はあくまできっかけとして利

用するのが良い。ウェブの情報の使い方として、統計データを調べることと論文の検索をすることがあげられる。政府などが調査した統計データや学術論文は現代社会で最も信用できるからである。

疑問としては、自分の主張を書くものがレポートや論文であるが、その主張の根拠は調べたことだと思うので、結局はほとんどが引用になってしまう気がする。どうすれば引用と自分の主張を分けることができるのか。

今回の講義は前回に増してわかりやすい授業だった。書いてはならない魔法の言葉や書かなければならない接続詞など具体的に提示してくれたからだ。今まで自分が何気なく使っていた「○○だと思う」や「△△だと感じる」といった言葉は曖昧な表現だと教えていただいた。理由や根拠を書かなくても気にならなくなるからだ。つまり、曖昧な表現に甘えるのではなく理由や根拠をきちんと考えて自分の意見を用いてレポートを書く必要がある。ということを変えて理解した。

今回の授業では、大きく二つ、レポートの書き方・ウェブの利用法について学習した。レポートの書き方では、「思う」は理由や根拠を書かなくても気にならない言葉であり、「思う」を消して理由を書くことが重要であること、「いろいろ」、「様々」を消して具体的に書くことを学んだ。また、ウェブの情報は論文・レポートを書くためのきっかけとして利用する、ということも学んだ。それから、「たとえば・しかし・それより・つまり」の接続詞を使って文章を起承転結させる、という点もレポートを書くときに重要なポイントである。このポイントが重要なのは、起承転結の順番を考えることによって、自分の理論を論理的に整理したり述べたりできるほか、読み手にも読みやすい文章を書くことができるからだ。

授業の中で、「本は自分で買おう」という話があった。私もその話に賛成だ。なぜなら、家の本棚にある本のほうが、図書館などで借りてきた本に比べて、じっくり読みこむことができるからだ。図書館の本は、返却期限など利用できる時間に限りがあり、それに追われて何度もゆっくり読むことはできない。しかし家にある本は返却期限に追われることなくじっくり読むことができ、ふとした瞬間や調べたいことがある時に何度も読み返すことができる。そして自分のものなだから書き込みなどは自由にできる、などの利点がある。本はできる限り自分で買い、本に書かれている知識ごと自分のものにしてしまうことが大事である。

思う、感じる、考える、などの言葉は根拠がないため使ってはいけないと教わったが、「～だと感じた。その根拠は…」という書き方もいけないのか。この書き方なら根拠が明記されているため、使っても良いのではないか。

今回の授業の内容は、レポートの書き方の中でも使わなければいけない言葉と使ってはいけない言葉についてと、文献資料引用の方法についての説明だった。

例として挙げられた「使ってはいけない言葉」は、今まで自分が当然のように使っていたがその根拠を聞いて納得すると同時に賛成だった。

「思う」を使うことで根拠を確認する手間をさぼっていた事に気づき、「いろいろ」、「考えさせられた」を使うことで具体例の提示をすることをごまかしているということに自分

コメント [y171]: 「主張」と「根拠」は違います。たくさん文献を読んでいるうちに、自分なりの意見も芽生え、育ってきます。実際にやってみよう！

コメント [y172]: 実行してください。

コメント [y173]: だめです。

の中に今までそういう意識が確かにあったことを自覚したからである。

文献引用についても、引用する情報源の信憑性や、引用方法も知らないことが多く、自分は今まで web 検索での情報は、控えていたほうが良いと思っていたが情報や、引用できる正確な出典に行き着くきっかけとするなら効率的に働くと知り賛同した。

自分の欲しい文章を探すのなら、論文などから探すよりも効率がいいからである。

コメント [y174]: どんな文章が欲しいのですか？

今日の授業はレポートの詳しい書き方と web の利用法を学んだ。

まず、文章は起承転結を基にし具体的に書く。「たとえば・しかし・それゆえ・つまり」などの接続詞を活用するとよい。

具体的に書くうえで「思う」「いろいろ」「さまざま」「考えさせられた」などは禁句である。読み返してそれらの言葉を見つけたら、消してその代わりに理由や根拠を考える。また、「楽しかった。」「～と知って驚いた。」など単なる感想になってはいけない。

ウェブの利用についても要注意である。ウェブには嘘の情報がたくさんある。政府や調査機関が行っている統計データ、新聞記事のデータベース・論文を検索する場合はよいが、だれが書いた分からない情報や出典の書かれていない情報は信用しないで「きっかけ」として利用するのがよい。もちろん引用したら出所表示・明瞭区分・主従関係を確かしておくことが大事である。

今回の講義のポイントは3つある。

1つ目は、論文を書く時に「思う」「考える」などの理由や根拠を書かなくても気にならないような言葉を入れてはいけないということである。また、「いろいろ」「ある程度」などの言葉や「～と知って驚いた」などの単なる感想も同様に入れてはいけない。

2つ目は、文章は「たとえば・しかし・それゆえ・つまり」の4つの接続詞を使って短く区切って繋げるということである。しかし、「ところで」のような話題転換の接続詞は使ってはならない。

3つ目は、ウェブで情報を探す際は、ウェブの制作者名や出典名が書かれているものを選択するということである。制作者が分かっても、その情報が確実であるか確認するためにその人が学者であるか検索する必要がある。また、出典名が書いてあるウェブを引用するときは、出典の方を参照するべきである。

しかし、今回の講義で疑問を持ったことがある。それは、書いてはいけない言葉にあった「考えさせられた」という言葉についてである。講義で言っていたようにその言葉は具体的な内容を書かなくても通じるということは理解している。しかし、もし、具体的な内容を書いた上で話を繋げるために使うのであれば使ってもいいのか、教えていただきたい。

コメント [y175]: 「●●●ということから、○○○ということを考えさせられた」というふうに、具体的に内容があり、考えた理由も明示されていればかまいません。

1 前回の授業の続きで、書いてはならない言葉、書かなければならない接続詞、ウェブ情報の使い方やポイント等レポートを書く際の注意点が主な内容だった。文章は長々と書くのではなく、「例えば、しかし、それゆえ、つまり」の接続詞を用いて短くするのが基本である。そうすると、他者にとっても自分にとっても読みやすくなる。初めは起承転結を意識して書くと良い。また、ウェブサイト上の情報を用いる際には、制作者不明のサイトは使わないことと、出典の書かれていない情報は信用しないようにすることがポイントである。出典が書かれていたとしても、その出典の方を参照し、正しいかどうかを見極める必要がある。嘘の情報を流しているサイトも多くあるので、ウェブ情報はきっかけ程度に利

用するのが良い。学術論文や学術雑誌を参照する際にも、教授の名前を検索したり、その雑誌がどれだけ信用出来るのかを調べる必要はある。何でも鵜呑みにしないことが大切。知らないことに対して興味・関心は湧かないので情報はどんどん集める。

2「英語の論文は読めた方が良い。」という意見に賛成。

3日本と海外では考え方が違う。別の視点から見ている人の見解を知ることによって、新たな思考が芽生える上、手持ちの情報も増える。また、英語の論文を読むことによって英語に触れる機会が増えることになるので、英語の勉強にもなる。高校時代に受験の為に必死で覚えた単語や文法を、試験以外で活用する良い機会なので、積極的に読んでいきたい。受験勉強以外では英語から逃げがちだったので、「全文読んで引用するぞ。」という前向きな思いでいく。

まとめ:今回の授業では、論文に「思う」という言葉を書いてはならないと勉強した。以前、私は自分の主張したら、「思う」を使ったほうが良いと勘違った。論文には客観的なことが大切なので、理由や根拠の代わりに「思う」を書けば主観的な文章になってしまう事を理解した。

それに、文章の段落と段落をつなげるために、接続詞が非常に大事なやくだつものだ。特に、論文を書く場合、「例えば、しかし、それゆえ、つまり」の4つ接続詞をかかなければならない。

質問:有名なブログの内容を引用することが出来ますか。そして、もし可能ならば、ブロガーのニックネームを製作者としてかいてもいいですか。例えば、chikirin ブロガーのブログ「chikirin 日記」です。

#### "4月21日総合科学入門講座

今回の授業では前回の小テストの復習後に前回の講義の要点を復習した。そして、新たにより詳しく論文・レポートの書き方を学んだ。

論文・レポートに書いてはならない言葉は「～と思う」である。この言葉をかくと理由や根拠を書かなくても気にならない。もし書いてしまったとしても理由や根拠を考えかきかえる。「～と思う」と同様に「考える」「感じる」「印象をもった」も書いてはならない。「いろいろ」「何となく」と具体的に書かなくてもよい言葉も使ってはならない。

使うべき接続詞は、「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」の4つが基本である。それを起承転結にそって使う。

ウィキペディアや yahoo 知恵袋をコピペしてはならない。製作者がわからない情報は信用できないため製作者の確認もする。製作者の名前も検索して確認する。芋づる式に検索して正しい情報が見分けなければならない。ポイントとして出典が書かれているかどうかとも判断基準とする。出典がある場合は出典先のほうを参照する。

ウェブ情報の使い方の1つとして、政府や調査機関が行っている統計データや新聞のデータベースがある。さらに論文の検索にも役立つ。信用できるのは学術論文である。

以上のことを今回の授業から学んだ。

製作者を検索してその人がどのような人なのか調べるべきだ。ただの目立ちたがりもいる。と学んだが、その人が正しい情報をもって正しいことを書いている場合もあるのではないか。そのときの見分けとしてやはり肩書きや学歴を判断基準とする以外に方法はないのか。このような意見をもった。"

コメント [y176]: 使わないともったいないですね。

コメント [y177]: 何の目的でどのような内容を引用するのかによります。それを具体的に示してくれないと答えられません。



今回の授業では前回に続いて論述的な書き方を学んだ。前回で学んだように、レポートでは客観的で根拠のあうな文章で書かなければならず、「~と思う」や「いろいろ」などといった言葉をつかえないということを学んだ。web のページは信用しにくいので主にきっかけとして利用し本や論文を活用することを学んだ。起承転結の文章をきちんと構成できる多くの本を読んで参考にする。

第 2 回目の授業では「書いてはならない言葉」、「書かなければならない接続詞」についての話があった。先週の授業で小論文とレポートや論文の違いを学んだので、「思う」という言葉を書いてはならないということには納得出来るが、「さまざま」や「いろいろ」という言葉を使ってはならないということには納得できない。「さまざま」や「いろいろ」を文中に使うと具体的でなくなるということは理解できるが、だからといってなぜ使用してはいけないのか。話の軸と焦点が明確になって文の簡略化を目的とする時は使用しても問題ないのではないだろうか。

また、接続詞に関しては文の展開が変わらない時につなぎの言葉として使う接続詞を何にするか、接続詞を使うか使わないかで迷うことがしばしばあります。文の展開が変わらない時はどのように接続詞を用いれば適切なのでしょう。

## SIH 道場 学術的発想と書き方 2

論文やレポートには、書いてはならない言葉がある。まず 1 つめは「思う」である。「思う」という言葉は、理由や根拠を書かなくても気にならなくしてしまう。「考える」や「感じる」といった言葉に書き換えるのではなく、理由や根拠を考えることが良い。2 つめは「いろいろ」や「ある程度」などの表現である。この言葉は曖昧な表現である。論文やレポートを書く際には、具体的に書く必要がある。

書いてはならない言葉とは反対にしなければならないこともある。たとえば、引用する際には出所表示を必ずしなければならない。少しでも文をサイトや他人の論文から引用した場合は、出所表示を書かなければコピペになってしまう。また、そのサイトや論文に書かれている情報が正しいかどうか見分ける必要がある。そのために、制作者を調べたり、出典元を参照しなければならない。

現代社会では学術論文が信用できる記述だと言っていた。同じ事柄について書かれた論文で全く異なる主張のものが複数あった場合に、その時点で最も信用できる論文を見分けるためにはどうすればよいのでしょうか。

書いてはならない魔法の言葉の一つ、それは「思う」だ。この言葉を使うことによって収まり良く感じてしまうため、それを消して理由や根拠を書くようにすることがレポートを書く上での第一歩だ。また、「いろいろ」「ある程度」という言葉により具体性から遠ざかり、「楽しかった」「驚いた」は単なる感想へと導いてしまう魔法のフレーズだ。一方、書かなければいけない接続詞も存在する。起:テーマを書く、承:たとえば、転:しかし、結:それゆえ、の流れである。一つのテーマについて書くので話題転換の際に用いられる「ところで」という接続詞は使わないようにする。また、web の利用法編としては匿名のページと出典の書かれていない情報は信用せず、web 情報はきっかけとして利用する。

教科書 51~53 ページを読んだ。反対意見、反対の事例を常に探すことは大切だ。仮に、自分の意見があり反対意見を調べていくうちにそれに納得してしまうとする。つまり、中

コメント [y178]: 具体的でなくなるからです。

コメント [y179]: 具体的にどういう場合なのか書いてくれないと判断できません。

コメント [y180]: そんなときこそ、「論じるべきこと」がはっきりわかります。つまり、どの論文が正しいかを検討することで、あなたの論文が書けます。

コメント [y181]: なぜだか、理由が分かりましたか？

立の立場になる。そのような場合は、どのようにすればいいのだろうか。

コメント [y182]: どういう意味ですか? 賛成かつ反対、などということは論理的にありません。

今日の授業を聞き、ウェブの情報をきっかけとして利用し、制作者の名前で検索し考えを深めていく方法について納得がいき理解することができました。しかしウェブ上には多くの情報があるため、あるテーマについての情報でも制作者にも関心や興味があり、制作者独自の意見があってそれぞれの意見が違う場合もあります。その場合、**どれを選択しどれを捨てればよいのでしょうか?**

コメント [y183]: 一般的な基準はありません。

今回の授業では、引用とコピペの違いの再確認をしたうえで、書いてはならない魔法の言葉や書かなければならない接続詞を教わった。起承転結として「たとえば・しかし・それゆえ・つまり」を使うということであったが、高校の小論文の授業では「だろうか・確かに・なので・よって」を使うように教わった。論文・レポートと小論文の違いは、事前に調べて書くか書かないかであると同前の授業で教わったが、**まとめ方も変えるべきなのだろうか。** また変えることで、よりまとまりがよくなるものなのだろうか。

コメント [y184]: 具体的にどのように変えるのですか?

今回の講義ではウェブ上の情報の利用について学んだ。たとえば、匿名のウェブページや出典の書かれていない情報は信用しないこと、ウェブの情報はきっかけとして利用することなどを学んだ。しかし、そのようなことに注意していてもウェブ上で本当に信用できる情報かどうかを判断することは困難なことである。そのように情報の信用性を判断する力をつけるにはやはり物事を知り、学び、少しでも多くの知識を身につけることが必要不可欠である。ウェブや SNS など情報があふれている現代を生きる私たちは、何でも見た情報をうのみにすることなく、この情報が正しいとは限らないという意識を常に持ち、取捨選択したうえで正しい情報だけを自分の知識として蓄積していかなければならない。

※「思う」や※「感じた」※を使うと、理由や根拠を書かないでいい気になるというのは確かにそうだ。主観的になると、理由や根拠より感情が、大切になってくるからである。先生が、思うを使わないように、印象を持ったなどを使って逃げるひとがいると話しているのは自分の事かなどごまぎした。とこれも、感想である。

コピペについてだが、中学、高校と読書感想文でよく**インターネットから引っ張ってきて写した。**引用の用法を正しく使えば許されますか。

コメント [y185]: もし、丸写しにしたのであれば、コピペというより、「盗作」です。

レポートには、書いてはいけない魔法の言葉がある。まずその一つに、「思う」というマジックワードがある。それを書くと、理由や根拠を書かなくても気にならなくなる。だからといって考える、感じる、印象を持ったもだめだし、言い切るのもだめである。「思う」と書いてしまったら、それを消して、その代わりに理由や根拠を考えよう。その他にも、いろいろ、さまざま、ある程度、なんとなく、考えさせられたなどの代わりに具体的にかくようにしたり、聞いたことがある、言われているなどではなく、出典を調べて正確な情報を書いたり、楽しかった、~と知って驚いたなど単なる感想では評価できない。

また、文章は短く切って接続詞でつなぐ。「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」の4つが基本である。「起」でテーマを書き、「承」でたとえば、とテーマに関連する具体例を

挙げ、「転」でしかし、と反対の事例を取り上げて検討し、「結」でそれゆえ、と結論を導き、つまり、と最後のまとめをする。ところで、はレポートでは一つのことについて論じるので、なるべく使わないようにするとよい。

いろいろ調べてかいてくれる人たちもたくさんいる。調べた時には、出典を書くようにし、ウェブサイトの場合、制作者、サイト名、URL、閲覧日の4つの情報が必要である。しかし、ウェブには嘘がいっぱいである。そこで、ウィキペディアは匿名なので使ってはならない。制作者不明のサイトは誰が書いたか分からない情報なので使ってはならず、そのようなサイトを見つけたときはまた信用できる情報源を探すようにする。信用できる情報はどのように見分けるのかというと、制作者を確認するのである。ただし、「実名を出している目立ちたがりの人」もいるので、制作者の名前をウェブで検索してみる。しかし、内容が信用できるかどうかはどのように判断するのかというと、出典の書かれていない情報は信用しないということがポイントである。出典が書かれていたら、その出典の方を参照し、ウェブ情報はきっかけとして利用するのがよい。

次にウェブ情報の使い方についてである。政府や調査機関が行っている統計データや、新聞記事のデータベースなどで調べるのが良い。政府の統計データは著作権フリーだが、出典は書かなければならない。また、現代社会において「信用できる記述」は最終的には「学术论文」に至る。Google Scholar や、CiNii などを利用して論文を検索するとよい。

私は今回の講義を聞いて、「最終的に学术论文が信用できる」というところに疑問を抱いた。学術雑誌に掲載されたからと言って、100%あっているとも限らない。実際、ある歴史について長年絶対にあっていると思われていた事がよく調べてみるとそのような出来事はなかったということがある。だから、学术论文だからと言って100%あっているとは限らないし、信用できるとも限らない。現代社会において完璧に信用できる情報など、どこにもないのかもしれない。しかし、私たち大学生は研究者に比べると全然知識はないし、レポートの度にある事柄について本当かどうか研究することは不可能なので、完璧には信用できなくても、一番信用できる学术论文を参考にするしかないのである。

コメント [y186]: コメント y57 を参照。

今回の授業で学んだことを述べる。

一つ目は、論文やレポートを書く際に、書くべき言葉と書いてはいけない言葉についてである。「思う」という言葉は、これを書くことによって、理由や根拠を書かなくてもよくなってしまふのだ。また、「いろいろ」や「聞いたことがある」などは、述べることを曖昧にしており、具体的に何を知ったのか、どんなことを聞いたのかが分からない。反対に、文章を論理的なものにするために、書かなければいけない接続詞は、「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」の4つである。

二つ目は、ウェブの利用法についてである。ウェブ情報を利用する際に大事なことは、ウィキペディアなどの出典の書かれていない情報は信用しないべきであり、出典が書かれていたら、出典の方を参照するということだ。ウェブページには、ある問題について全く正反対の事実が書かれていることもあるので、政府や調査機関が行っている統計データを調べたり、図書館のウェブページの新聞記事を参考にしたりすることが大切である。

前回と今回の授業を通じて私が学んだことは、論文やレポートは単なる感想ではなく、理由や根拠を明確に示したものであり、引用をする際は、出典を正確に明記する必要があるということだ。私は今まで、文章を書く際に、「思う」や「いろいろ」といった言葉をたくさん使ってきた。しかし、これからは、自分の書く文章を論理的で根拠のあるものにするために、授業のレポート課題などに取り組む際は、この授業で学んだことを心掛けていきたい。

今まで「思う」という魔法の言葉を数多く使ってきたが、授業で聞いたように理由や根拠を書かないことはとても楽である。今までその言葉に頼ってきたが、その言葉を使うことであいまいな部分をはっきりさせなくて済むという部分を利用してきた。

「いろいろ」「さまざま」「ある程度」「なんとなく」という言葉を使い、文章が苦手だと思うのは具体的に書かないからと言われ、論文・レポートは根拠を調べて書くとき聞いた時難しいと感じたのは今までその言葉を使い逃げてきたからだ気づいた。

そして、書かなければならない接続詞で文章は短く切って接続詞でつなぐ「起・承・転・結」の4つが基本であることを学ぶ。「起」テーマを書き、「承」たとえばとテーマに関連する具体例を挙げる、「転」しかしと反対の事例を取り上げて検討する、「結」それゆえと結論を導き、つまりとまとめる。今まででも言われてきた方法ではあるが、実際に使えてはいない。

それから、製作者を確認することも大切であると学ぶ。ただ、「実名を出して目立ちたがりの人」もいる。だから製作者の名前をウェブで検索するのがいい。

質問:一冊の本を仕上げるのに、**参考の本**を何冊くらい読んだりしますか?

意見:「思う」という言葉が魔法の言葉というのはしっくりきたが、使えなくなるとなったらとても難しい。具体的に書けなかったせいで、論文・レポートを書くのが難しく感じる。理由や根拠を書くのに**どれだけ調べればいいのか**わからない。

**コメント [y187]:** 直接的に参考にするのは2~300冊ぐらいでしょうか。

**コメント [y188]:** 自分が納得できるまでです。

今回の授業では、前回に引き続き、レポート、論文の書き方について学んだ。レポート、論文を書くにあたって、我々は適当な接続詞を用いた起承転結のある文章を書かなくてはならない。形式に則った文章を書くことで、自分の主張に説得力が増し、**他者とのコミュニケーション**がより円滑になるからだ。

たとえば、ある事例に対して自分の感想を述べるとする。そのとき、「私は~だと思ふ。」だけでは、相手に自分の主張を深く伝えられない。**形式に則った**文章を用いることで、自分の主張に対する、相手の理解度を深めることができ、共感を得られやすい。

しかし私を含め、すぐに「形式に則った文章」を書ける、ディスカッションの場で使える、という人は少ないだろう。スキルを習得するためには、この授業レポートなどを通して反復練習を重ねなければならない。他者と対話する能力は社会の基礎であるからだ。

つまり、我々はこの「総合科学入門」の授業を通して文章を書く能力を向上させていく必要がある。

**コメント [y189]:** 円滑かどうかはともかく、意見を異にする他者と対話して合意を形成する能力を身につけることができる。

**コメント [y190]:** どんな形式ですか?

論文やレポートには、「思う」「考える」「感じる」などは使わずに、それらの言葉の代わりに理由や根拠を述べるということを学んだ。これは、論文やレポートがいかに客観的、かつ論理的にならなければならないか、ということの意味している。

私たちの日常生活での会話には、「~だと思ふよ」「それは~だと私は感じるけど...」など、前述の「思う」「考える」「感じる」といった、「書いてはならない魔法の言葉」がしばしば登場する。それは、「みんなの和を大切にしよう」「その場の空気や雰囲気を壊さないようにしよう」という精神が、会話にも反映されているからだ。人と違う意見を述べるときや、人に反対するときに「思う」などを使わずに「そうではなく、これは~だ」と、ずばり言い切る発言をすると、その発言者は、「あの人はずけずけ物を言う」などという印象を周りの人に抱かれることがある。だから、私たちが論文やレポートを書くときも、文の最後で(言

い切ってしまうと収まりが悪い)と感じ、魔法の言葉を文末で唱えて、文の持つ力をぼやかし、主張ではあるが控え目な印象にすることで安心するのである。

これは私たちの習慣や、今まで受けてきた教育から発生している問題である。過去は変えられないが、これからの私たちは、「自分の意見をより客観視し、論理的に相手に伝えて、議論を交わし、お互いにとってより良い方向へ向かえる結論や手段を導き出す技術」を養う努力をするべきである。その努力のひとつが、論文やレポートを客観的・論理的に書くことだ。「あえて和を乱せ」と言っているのではない。むしろその逆で、自分の意見や主張を曖昧にすることなく、理由や根拠を用いて整然と組み立てて発言して議論すれば、ひとつの和(人や集団)と別の和(人や集団)が合わさって、元々の個別の和よりもさらに大きな「和」になれる可能性が生まれるのである。なぜなら、そこには「疑問」ではなく、理由や根拠による「理解」が生まれているからだ。論文・レポートを書く練習をするというのは、建設的な未来を創るために必須の技術を培うことではないだろうか。

コメント [y191]: まったくそのとおりです。それこそが民主主義の理念です。

今回の講義では、レポートを書く時の注意点について学んだ。まず大切なことは、「思う」を書かないことである。理由や根拠を書かなくては説得力のある文章を作ることができない。また、具体的に書くべきだ。そのためには、反対の立場や事例を検討しないといけない。「一番大事なことは自分にしか書けないことを、誰にでもわかる文章で書くということ。」(井上ひさしと 141 人の仲間たちの作文教室「新潮文庫」2002 年 273p)自分の心の中だけで解決するのではなく、信用できる情報を使って理解してもらえよう文章を作りたい。信用できる情報とは、出典が書かれているかどうかである。ウィキペディアなどは、きっかけとして利用すべきであり、誰が書いているかわからない情報は根拠がないものが多く論文やレポート書く上で使うべきではない。また、制作者の名前があっても目立ちたがりかもしれないので、名前を調べないといけない。その上で、信用できるのは政府や調査機関が行なっている統計データである。しかし、それも全て信用しないで反対の意見や事例を探し、検討した中で利用すべきだ。情報を調べるためには非常に多くの時間を費やすことになる。今私が書いている 500 字ほどの文章でも、半日以上かかるのに私に論文はうまく書けるのか不安である。これからの講義も積極的に学びたい。

コメント [y192]: 教科書 37 ページを参照。

コメント [y193]: 大丈夫、卒業論文は、一年かけて仕上げます。

第 2 日目の総合科学入門講座では、レポートの書き方として書いてはならない言葉と書くべき接続詞に加え、引用の方法と正しい情報の集め方を学んだ。論文やレポートでは理由や根拠、具体例を書き、決して単なる感想を書かないことが重要だ。また、情報を収集するときは情報源が信頼できるものを選ぶべきだと学んだ。

現在では、インターネットが広まり誰もが自身の知識や見解を発信できるようになってきている。ネット上には誤った情報も含んだ大量の情報が存在している。これらは論文やレポートを作成するにあたって煩わしく感じられるかもしれない。しかし、学術論文と比べ読みやすい web 情報をあくまで気かけとしてだが利用することで、より多くの情報にアクセスできるのではないだろうか。そして、それらをうまく利用するために正しい情報かどうかを判断する能力がより必要になってきている。

コメント [y194]: 具体的にどのようなものですか。

今回は、レポート作成の上でのコツと私が前回このコメント欄で質問した正しい情報の見分け方について教えていただいた。先生は「思う」「考える」「感じる」「印象を持った」はすべて魔法の言葉であるとおっしゃっていた。自分もその考えには納得した。今までこ

これらの言葉を書くことで、安心感のようなものを感じ、逆に言い切ると不安感を覚えていた。「レポートは感想文ではない。単なる感想は評価対象外である」今までの常識に捕らわれないように、物事を考えないといけない。「常識を疑え!」と以前の講義でもおっしゃっていた。実行するのは大変だが、大学生になった以上頑張るしかない。

信頼性のある情報を見つけるにはどうするか? 大事なことは、「出典を確認すること」である。ここでひとつ、先生に質問したい。レポートを書く際誰かにインタビューして、その中で使いたい情報があったとき、この場合は出典としてレポート内で使えるのでしょうか? 出典として使えないとすれば、レポートでは使ってはいけないのですか? 教えていただきたい。

**コメント [y195]:** 「誰に」インタビューしたかによりますね。また、何人ぐらいにインタビューしたかによって、その内容の信頼度も変わってきます。「社会調査法」などの授業で学んでください。

今回習ったことは大きく分けると2つある。

一つは「思う」の代わりに理由を書く、「いろいろ・さまざま」の代わりに具体的な例を書く、「聞いたことがある」の代わりに出典を調べる、といった具合に「文章を深く掘り下げる」こと。もうひとつは、ウェブページの製作者を調べる、出典の書かれた情報を探す、ウェブ情報をきっかけにして統計や論文を探す、といった具合に「信用出来る情報を見つけ出し利用する」ことだ。

その中でも特に新しく学んだのは、出典などのないウェブ情報もきっかけとしてなら利用してよいというものである。いわゆる調べ学習をした際「Wikipedia を利用してはならない」と学んでいたために、匿名の情報は必ず避けなければならないものだと思込んでいたからだ。信用ある情報を探さべく、古い様式の文字化けサイトを転々としていた過去の自分に教えてやりたい。情報が信用出来るかどうかを見極めることはもちろん、信用の低いものでも興味関心を持つきっかけとして受け止めれば、情報は味方になってくれるのである。

**コメント [y196]:** もちろん、引用するのは避けた方がよいです。

今回の総合科学部入門講座では、前回と引き続きレポートの書き方について指導を受けた。書いてはいけない言葉や使うべき接続詞、またウェブとの関わり方についてなど、前回よりもさらに詳しい説明とポイント解説がなされた。

**コメント [y197]:** 講座

前回の授業コメントで、私はネットとの関わり方について「タップ一つで情報を得られるせいで、私たちは情報を深く知る作業をしなくなってしまった」と書いたが、今回の授業では「ネットの情報はきっかけとして利用すればいい」と学んだ。ネット上の情報は確かな情報ではないかもしれないが、情報を知るための壁が低いおかげで「きっかけ」が多く得られる。そこから自分で情報への認識を深める作業に繋がればいいのだと、だと逆に考えることが出来た。情報を得る際、ネット、本、論文など様々な媒体を超えて調べ、理解を深めたい。

今回の講義では、書いてはいけない言葉や書くべき接続詞といった1回目よりも詳しいレポートの書き方と、ウェブ情報の使い方について学んだ。「思う」「考えさせられた」など、今まで書いてきた文章の中でよく使ってきた言葉が、理由や根拠を書かなくても気にならなくなるため使ってはいけないと知り、レポートを書くのは決して簡単でないと思知らされた。前回の授業コメントを見ると、「書いてはならない魔法の言葉」で紹介された以外の言葉でも理由や根拠がないと指摘を受けているコメントもあり、これから書くレポートの言葉や表現を推敲しつつ書かなければならないと知った。今回の講義では、最も信

頼できる記述は学術論文であると学んだが、理化学研究所で問題となった職員の虚偽の内容の学術論文の発表といった、**真実でない学術論文も存在する**。それを見極めるのは、非常に困難であると学んだが、逆に前回の講義では**引用のない論文**は**信ぴょう性が低くてよくないと学んだ**。だから完全に嘘の内容のない論文は存在しないのではないかという疑問がうまれた。また、**間違っただけ論文と間違っただけ論文とを協議して**、**何の意味があるのだろうか**。

コメント [y198]: コメント y57 を参照。

コメント [y199]: 引用のないウェブページは信用しない、と言いました。「引用がない論文」は論文ではありません。

コメント [y200]: どういう意味ですか？

私は今まで論文やレポートと小論文や作文の違いはなんとなく頭ではわかっていたつもりだったが、いざレポートを書いてみるとどうしても感想になりがちであった。しかし、今回の授業で、自分がまずしてみるべきことが具体的にわかった。まず 1 つ目は、「思う」を使わない。また、「考える」に言い換ええないことだ。今まで「思う」を使ってはいけなかったと考えていたので使わなかったが、代わりに「考える」を使ってしまっていた。今後は、「考える」も使ってはいけなくないワードと認識し、言い切りその理由としてあげられる事実を記すことを試みることにする。2 つ目は、具体的に書くことだ。先生は、「文章が苦手なひとは、具体的に書けないひとだ」とおっしゃった。そして、抽象的な言葉の例として、「様々な」などの言葉をあげた。私もその意見には、賛成だ。そして、実践したい。しかしながら、私は具体例をあげた後に、～などの様々なとこのワードをよく使う。**例えば、「カタードミニカ共和国やオーストラリアなど様々な国々の人と……」**という**使い方だ**。このような使い方でも様々なを入れることはあまりしない方がいいことなのだろうか、教えてほしい。

コメント [y201]: どういう文脈なのか分からないとはっきりしたことは言えませんが、具体的に国名が書いてあるなら、「など様々」でもかまいません。

今回の講義では、書いてはならない言葉についての説明があった。**『それは良くないと思う』**の『思う』は理由や根拠を書かなくても気にならなくなり、**『それは良くない』**と言い切ってしまうと収まりが悪くなるため、**『思う』**の代わりに理由や根拠を考える。また、『いろいろ』『何となく』と書くのは具体的に書かないからである。『聞いたことがある』『言われている』と書く前に出典を調べる。単なる感想は評価できない。

コメント [y202]: 通常の引用の場合には「」を使ってください。『』は、「」内の引用、もしくは書名の表示の時に使います。

文章は『例えば・しかし・それゆえ・つまり』の四つの接続詞でつなぐのが基本。起承転結の構成で、起ではテーマを書き、承ではテーマに関する具体例を挙げ、転では反対の事例を挙げて検討し、結では結論を導き、まとめをする。

インターネットから引用する際、必ずしもウェブが正しいとは限らない。ウィキペディアは誰が書いたか分からずその情報は信用できない。信用できる情報を見分けるには、まず制作者の名前をウェブで検索して確認する。続いて内容が信用できるかどうかは、出典の確認をする。ウェブ情報はきっかけとして利用するのが良い。

正しい統計データを調べる際は、政府や調査機関が行なっている統計データや新聞記事のデータベースを調べるとよい。また現代社会において信用できる記述は『学術論文』か『学術雑誌』に掲載された論文である。

日本史や世界史の証拠がはっきりしていないことについて調べる際、**本、ネット、新聞、政府機関など**の**情報**を信用すればいいですか。

コメント [y203]: 学術論文です。

今回の授業では前回よりも詳しいレポートの書き方を学ぶことができた。例えば、出典の書かれていない情報は信用しないという点だ。最近ではウェブ情報の方が誰でもすぐに調べることができ、手軽に使用することができる。しかし、その点が弱点であり、誰でもサ

イトを作ることができ嘘の情報を書き込むことができる。その見極めをするのは正直難しい。

正しい情報を手に入れるためには、ウェブの情報だけでなく学術論文を調べたり図書館に赴き紙媒体の情報にも目を向け正しい知識を身に着けることが大切である。

ウェブ情報全てが正しいものではないので、論文などと対照しながら正確な情報を調べる必要がある。

レポートとは自分の意見を根拠づけて述べることとされ引用する時は出典を確認する必要があったが、自分の意見を根拠づけて述べるためにまず、「思う」を使う代わりに理由や根拠を考える。次に「様々」「考えさせられた」のような抽象的な意見は避け具体的に述べる。「言われている」と述べる時は出典を確認し、単なる感想にならないようにする必要がある。文章は短く切って「例えば、しかし、それゆえ、つまり」の接続詞でつなぐのが基本である。ウェブサイトから引用する場合、制作者、サイト名、URL、閲覧日の情報が必要だが信用できる情報を使用するため制作者を検索し出典が書かれている情報を選ぶこと、出典が書かれている時は出典を確認すること。信用できるデータとして政府や調査機関が行う統計データ、学術雑誌に掲載された論文がある。論文は英語で書かれたものまで範囲を広げると幅が広がる。正解がないということは社会的に確立されていないということであり、その場合正解を求めるのではなく自分の意見をはっきりさせ、根拠のある理由を用いて説得力のある意見にすることが大切である。

辞書の作成には多くの人に関わることで多く何度も更新されるため改訂が何度もされている辞書は信憑性があるが、引用する参考文献として辞書を用いるとき、**著者**はどのように記載したら良いか。

接続詞の基本として4つ挙げられているが、「ところで」が話題転換のために使う接続詞であり、論文のような一貫した意見を述べるために用いるべきではないことは納得できたが、追加で情報を加えるための接続詞である「また」を使うことが好ましくないとされるのはなぜか。

金曜の課題である他学生のレポートを確認しようとしたところ、**見つけることができなかつた**。

コメント [y204]: 著者がたくさんいる場合には、編者を書くとういでしょう。

コメント [y205]: どこを探しましたか？

今回の授業では論文・レポートで使う言葉や引用に適した情報源の見極め方を学んだ。使ってはならない言葉は「いろいろ」「さまざま」というものだ。ほとんどの言葉が私がついつい使ってしまうものばかりだった。「思う」は消して理由を書いたり「いろいろ」はやめて具体的に書いたりすることが大切である。

また、基本のことではあるが、書かなければならない接続詞について学べたのは役に立った。起承転結で構成する上で「起」ではテーマを書き、承は「たとえば」とテーマに関連する具体例を挙げる。「転」は「しかし」を用いて反対の事例を取り上げて検討する。「結」は「それゆえ」から始め、結論を導き、「つまり」と最後のまとめをする。この起承転結を徹底すれば文章は作れる。私が一番驚いたのは、「むしろ」を使わないということだ。一見論理的なようだが、「ところで」に置き換えることが必要なようだ。

そして、具体的なデータの調べ方を学んだ。今まではインターネットで検索ワードをただ入れていただけだったが、どこのデータが欲しいのか設定することが重要だ。新聞記事のデータベースを使って調べるのは今までしたことが無かったので、今後使っていきたい。実用的なことばかりが学べたので、論文を書く上で参考になった。



今回の講義では、レポートの書き方について具体的な方法を学んだ。「いろいろ」や「ある程度」など具体的な内容を書かずに済む言葉を使ってはいけないことや、起承転結で構成された文章を作るために必要な接続詞を使うべきであることを知った。また、信用できるウェブ情報を利用するため、制作者や出典が書かれているかどうか確認することや、ウェブページの制作者の名前を検索すること、出典があればその出典を参考にすることが有効であることを知った。

レポートの作成において、学術論文を参考として用いるのは賛成である。なぜなら、論文の制作者が他にどんな論文を書いているか、またそれらがどんな立場から書かれているものなのかを調べることが可能だからである。信用できるかどうかという問題を解決することもでき、さらに制作者の肩書などを調べることによって、異なる立場の人が同じ議題でどのような意見を持っているのか調べるきっかけにもなる。一つの議題でも意見を異にする人たちのそれぞれの意見を知り、自分の意見を生み出す糧にしたい。

今回の講座では、前回に引き続き、レポートの書き方について学んだ。主に、今回は、3つのことについて学んだ。

一つ目は、論文やレポートで使ってはいけない言葉についてだ。その中で、「思う」という言葉は書いたら断言するよりかは収まりが良くなり、理由や根拠を書かなくても気にならなくなる。だから、「思う」とか書いてしまったら、それを消して、その代わりに理由や根拠を考えて書くことが大切である。その他に、「いろいろ」「さまざま」「考えさせられた」等の言葉も挙げられる。こういった言葉を使う前に具体的に書くことを心がけることが重要である。

二つ目は、その言葉にたいして、書かなければいけない言葉もある。今回は接続詞についてだ。文章は短く切って接続詞で繋ぐことが大切である。「たとえば、しかし、つまり、それゆえ」の4つを基本にして、起承転結を意識して、文章を書くことが大事だ。

3つ目は web 情報の取り扱い方だ。web は情報量が多い分誤った情報もたくさんある。ウィキペディアやヤフー!知恵袋は誰が書いたかわからないので、信用して使用するのは避けるべきだ。それゆえ、web はデータを調べたり、論文を検索したりするなどといったきっかけとして使用するのが最適である。

レポートを書く際に、匿名の情報はさわらない方が良いのだろうか。多くの情報を比較した方が理解してもらいやすい。だから、匿名の情報も一つの意見として出した方がいいと私は思うのだが、良くないのだろうか。教えていただきたい。

**コメント [y206]:** きっかけとして利用し、その情報のネタ元（最終的には学術論文など）を探してください。

今回の授業では、前回に引き続きレポートや論文についての書き方を復習かつより深い内容を学習した。今回新しく学習したことで最も心に残ったのは、「書いてはならない魔法の言葉」についてである。というのも、「思う」や「考える」、「感じる」、「印象を持った」などレポートを作成するうえで使用してはならない言葉を私自身頻繁に使っているのが今後気を付けるべき点だからだ。これらの言葉を使ってしまうと、理由や根拠を書かなくても気にならなくなるため、レポートの説得力が薄れてしまう。また、単なる感想として評価することができなくなってしまうからだ。

そして逆に書かなければならない接続語は、「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」である。これらの接続語を使用して起承転結な構成にすればよい。また、「ところで」という

接続語は、避けるほうがいい。レポートは一つ的话题に対して述べるものなので、話題が変わってしまうのはよくないからだ。これらはわたしが普段から意識して行っていることなので安心した。

また、ウェブには信憑性の薄い情報が多く存在することに気を付けなければならないということを学習した。正しい情報かを判断するためには制作者を確認して制作者の名前を検索することをすればよい。また、出典の書かれていない情報は信用してはならないことや、出典が書かれていたら、出典のほうを参照すべきだと学んだ。この点では、私は実行できておらず、ネット上での情報への正確性を確認するという作業が不足していたとわかったので、これから意識を強めていくべき点だ。また、信用できる記述として「学術論文」や「学術雑誌」に記載された論文ということから、図書館をもっと活用して、根拠をしっかりと持った論文を書いていかなければならない。ウェブ情報はきかっけとする姿勢を意識していくことにする。

私は今まで、感想文ばかり書いていたので、「思う・考える・感じる」という言葉を使ってレポートを書いてはいけないということに最初は困惑した。初めてレポートを書いたときは、何を書いていいかわからず、手が進まなかった。しかし、具体的に書くことによって、文の量も増えるし、何より内容に説得力が出てくるようになった。

また、昨今の玉石混合の情報が飛び交う中、引用をするだけでもかなりの手間がかかる。しかし、そのような苦労があることによって内容に厚みが出てくる。

また、一回は英語の学術雑誌を読むことに挑戦してみたい。

コメント [y207]: 一回でなく、毎回読んでください。

今週の授業はレポートの書き方とウェブの資料の使う方の内容だった。

まずはレポートの書き時、曖昧な自分の「思う」や「いろいろ」なことをはっきり説明するために、ただ自分の感じだけではなく、自弁の考えの理由、聞いたことの出典と具体的な例を書かなければならない。その上で、理解しやすいのために、接続詞も使えなければならぬ。また、ウェブで載せる情報を使う時、制作者の名前と情報の出典などを確認しなければならない。

レポートを書く時、ウェブで制作者や出典もない主張は反対意見の一つとして使えるか。

コメント [y208]: 授業の内容からわかるはずですが、あなたが理解したことを書いてください。

レポートや論文のような文章には客観的な根拠が必要であり、引用を上手く使うことで、自分の意見に説得力を持たせることが出来る。前回は引用を用いる際のルールについて考えたが、今回はなぜ引用を用いることが必要なのか、引用する前にどのように情報を調べればよいのかについて考える。

まず、人は自分の頭の中に世界中のすべての知識が詰まっているわけではない。また、人間の記憶は非常に曖昧なので、以前聞いたことがある情報についても本当に正しいかわからない。そのような一面的で、不確かな自分の情報だけで書いた文章は、説得力のある文章になるだろうか。やはり、そのような文章にするためには、しっかりとした情報を得て、多面的に物事をとらえ、その情報を基に自分の意見を作りあげていかなければならない。引用とは、ただ調べた答えを書き出したものではなく、説得力のある意見を述べるための土台になるものなのだ。

しかし、調べた情報が不確かなものでは、信用できる文章にはならない。現代では Web 上で膨大な量の情報を得ることが出来るが、出典を明記せずに匿名で気軽に書き込むこと

が出来るといふその特性上、多くの間違つた情報や偏つた意見が載せられている。Web 上で確かな情報を得るには、まず制作者や制作機関を確認し、匿名性を排除する必要がある。そして、内容ではしっかりと出典が書かれているか確認しなければならない。出典のないページは客観的根拠のないことが書かれている可能性もあるので信用せず、出典があればきちんとした情報か確認することで、信用できるページか見分けることが出来る。レポートでウィキペディアや知恵袋を使えないのは、多くのページが匿名であり、出典も明記されていないからである。また、政府や調査機関が公表している調査データや、過去の新聞記事を上手く活用することで、本当にそのような傾向や過去の事例があるのか調べることができ、具体的な根拠にすることが出来る。

このような情報を活用して新しく出来た考えを文章に起こし、自分で読んで書き直すことを繰り返していくことが論理的な根拠のあるレポートを書く為の過程だ。

最初は前回の小テストの答え合わせと質問に対してのコメントをした。復習と小テストをして学術的発想と書き方 2 の授業をした。

まずは、書いてはいけない言葉についてをした。

1 「思う」は、理由や根拠を書かなくても気にならなくなってしまう。「思う」は消して、代わりに理由や根拠を考える。「考える」「感じる」「印象をもった」もダメ!

2 「いろいろ」「さまざま」「ある程度」「なんとなく」「考えさせられた」も書いてはいけない言葉になる。←文章を書くのが苦手な人は具体的に書かないからである。

「聞いたことがある」「言われている」ではなく、出典を調べる。

「楽しかった」「~と知って驚いた」は単なる感想になる。そのため、評価はできない。

書かなければいけない接続詞では、「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」の4つが基本になる。

起:テーマを書く。

承:たとえば、とテーマに関連する具体例を挙げる。

転:しかし、と反対の事例取り上げて検討する。

結:それゆえ、と結論を導き、つまり、と最後のまとめをする。

文章は短く切り接続詞でつなぐことが大切。長すぎると読みにくくなるため。その時、箇条書きでは書かない。

コピーでなく引用をする。いろいろ調べて書いてくるのではなく、調べたときには出典を書く。web サイトの場合は、「制作者、サイト名、URL、閲覧日」の4つの情報が必要になる。しかし、web には嘘があるので制作者が不明の時は使わない。誰が書いたかわからない情報は信用してはいけない。

信用するには制作者を確認する。また、内容が信用できるか判断するには出典の書かれていない情報は信用しない。出典が書かれていたら、その出典の方を参照する。

web 情報の使い方 1 データを調べる 2 論文を検索する。

最後は今日のまとめと小テストをして授業は終わった。

**質問です。** web サイトを使うときは制作者、サイト名、URL、閲覧日の4つが必要だけでもしその中のどれかの情報がなければ信用したらダメなんですか。

**コメント [y209]:** 質問するときには、質問する理由、あなたの回答、そう回答する理由を書いてください。

今回の授業では、「思う」「考える」という言葉は理由や根拠を書かなくても気にならない言葉であるので書いてはいけないということを学んだ。また、文章を構成する際には「たとえば・しかし・それゆえ・つまり」の4つが基本となる。

さらに、今までは、調べものをするときには、ウィキペディアを使っていたが、匿名で書かれたものは信用できないことを学んだので、これからレポートを書いているときに引用が必要となれば制作者までのっている信用のできる Web ページ用いていきたい。

コメント [y210]: それでは、今回の授業内容の理解として、不十分です。

今度の講義では特に出典を明示する際における留意点を教わった。

その情報が本当に正しいものかどうか判断するときに確認しなければならないのは、ウェブページの場合だと製作者、ページのタイトル、URL、閲覧日時。本の場合だと著者、タイトル、出版社、出版年、ページ。論文の場合は著者、タイトル、掲載誌名、出版年、ページである。

信頼できる情報として挙げるためにこれだけの条件が求められると、どんな人が提供しているのかわからないウェブの多大な情報から引用することができるのはほんの一握りになってしまう。

手軽さや量はウェブの方が勝るものの、やはり質や信頼性においては文献や論文に劣ってしまうので、レポートを書くときに引用する情報源に相応しいのは本や論文であろう。

ただ、本や論文に書いてあるからといってその内容を鵜呑みにしてしまってはならない。なぜならその本や論文の内容が正しいもので、良い中身であるという保証がないからだ。その保証を確かめるには、例えば、掲載されている雑誌が名が知れていて査読がきちんとされているか。または研究所や学会の発表でもその団体の規模はどんなものか、という所に目をつけるべきである。

文字で正体を述べるだけなら、肩書きで誤魔化して信じこまされてしまう。

これらの点に注意して情報の信頼性を見極め、より良いレポートを書いていきたい。

今回のテーマは、前回に引き続きレポートの書き方についてだった。

ウェブ情報の使い方や、書いてはいけない言葉などこれからレポートや論文を書いていく中で参考になるお話ばかりだった。

たとえば、普段意識せずに使っている 4 つの接続詞を組み合わせる文章を書く事で、まとまった文章になり、起承転結の文になるというのは、レポートを書く上で非常に重要になってくるだろう。

これからの授業でもしっかりこのような知識を身につけたい。"

コメント [y211]: 知識だけでレポートは書けません。大切なことは反復練習です。

#### 総合科学入門講座 2 回目 授業コメント

今回の授業は前回の小テストの答え合わせと授業コメントで多かった質問への応答から始まった。多かった質問として「なぜレポート・論文のテーマは自分の興味・関心から選んではいけないのか」というものや「正解がまだ見つからない問題に対して論じることが本当に解決策につながるのか」というものが挙げられていた。そして一つ目の質問に対する答えは「興味・関心は調べる動機にはつながるが、主張の正しさの根拠にはならない」というものであり、二つ目の質問に対する答えは「もし論じること以外で正解を出そうとするならば、その方法は権力や暴力に依るものになってしまう」というものだった。

その後、レポートや論文を書く上で最低限必要なポイントの具体的で詳しい説明が行われた。最初の説明はレポート内で使ってはならない言葉と使うべき言葉についてである。例えばレポートで書いてはならない言葉として「思う」や「考える」などの根拠を示さなくても気にならなくなる言葉や「いろいろ」や「何となく」などの具体的な説明が必要で

は無いように見えてしまう言葉、また書かなくてはならない言葉として、説明内で起承転結をなすために必要な「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」の四つの接続詞が挙げられた。後日学生コメントを見てみると「思う」や「考える」などの言葉の使用により感想になってしまっているものや箇条書きをしているものがいくつかあった。自分も意識をしていないと感想文になってしまいそうなきが多々あったので気をつけたい。

次の説明は web の利用についてである。自分の意見の後ろ盾のためには根拠を示す情報が必要だが、その情報は何でもいいわけではない。信用できない情報を根拠にしてもそんなあやふやな後ろ盾では自らの意見も信用されなくなってしまうからだ。web 上で信用できる情報を探するためには web ページの製作者を確認することや、もし web ページ上に出典が明記されている場合には出典を参照することを教わった。また web の情報は物事を調べるきっかけにとどめ、仮に使用する場合には政府や調査機関による統計データや新聞記事からのデータ調査や論文の検索に使用することが良いと教わった。

授業の後に web 上の学生コメントとそれに対する先生からのコメントを読んだが、自分たちの文章には具体的な説明が足りておらず、論理的な文章を書くためには反復練習と読書が良いということを知った。また今回の授業コメントには「考える」の定義に関する意見が多く、その意見や質問に対する先生からのコメントも必然的に多くなっていた。私はそれらを読んでいくうちに、なぜ自分が論理的な文章を書くための練習であるこの授業コメントを書くことに対して苦手意識を持っているのかが分かった。それは今までに自分の頭できちんと物事について考えたことが無かったからである。私は国語を高校までの勉強で一番得意としていたが、それは必ず文章の中に答えが用意されていたからだったのだと気が付いた。未だ正解の出されていない問題に向かうためには、前回の授業で言われていたように「調べ、知り、書き、読み直し、書き直す」ことにより具体的で実現可能な解決策を提示することが必要なのだ。このような気づきから私は他の人の書いた意見を読むことで授業の内容を深く理解し、自分の足りない部分についても気づくことができるという他の人が書いた文章を読む長所を知った。

コメント [y212]: これからも読んでください。

#### ・授業まとめ

今回の講義ではまず、レポートを書く上での書いてはいけない言葉を習った。レポート上では曖昧な言葉や単なる感想を避け、理由や根拠を書かなければいけない。次にレポートの構成で大事となる接続詞を習った。起承転結をつける接続詞には「たとえば・しかし・それゆえ・つまり」が大事となる。最後は、web 上で引用する際それが本当に正しい情報であるのか情報を芋づる式に調べることだ。

#### ・意見

自分が正しいと思っていたサイトが完璧にはただしくなかったこと

#### ・理由

ウィキペディアは全国的にもよく使われ様々な情報もあり便利でもあるが実際のところ匿名であるためその情報が正しいのかは曖昧である、そのためウィキペディアは情報を探するための単なるきっかけである。

コメント [y213]: 具体的にどこのサイトでですか？

本日の授業は、まず前回の授業の要点のまとめから入った。

そして本日の講義の要点を大きく言うと、「論文とレポートの書き方」と「ウェブの使い方」であった。具体的な内容として、まず「論文とレポートの書き方」において「書いてはならない魔法の言葉」というものを教えていただいた。第一に「それはよくないと思う。」

のような「思う」というワードであった。それを使ってしまうと、理由や根拠を書かなくても気にならなくなるため書いてはならないのだ。そして、「思う」の他に、「考える」「感じる」「印象を持った」などの言葉も書くべきではないのだとおっしゃっていた。

また、引き続き「書いてはならない魔法の言葉 2」として、「いろいろ」「さまざま」「ある程度」「何となく」や「考えさせられた」などは書いてはならないということだった。なぜならこれらの言葉を使うことで、内容を具体的に書かなくなってしまうためだ。また、「聞いたことがある」や「言われている」などの言葉は書かずに、どこの何に書かれていたのかという出典を調べ書くということをおっしゃっていた。さらには、「楽しかった」や「~と知って驚いた」などの単なる感想は評価できないため書くべきではないということであった。

次に「書かなければならない接続詞」というテーマで文章を短く切ってつなぐための基本接続詞四つを学んだ。具体的には「たとえば・しかし・それゆえ・つまり」である。また、「ところで」という言葉は転換を意味するため論文を書く際に用いるのは適切ではないというのであった。さらには、文章の中でのこの基礎 4 つの使い方も教わった。具体的には、「起」;テーマを書く。「承」;「たとえば」とテーマに関連する具体例を挙げる。「転」;「しかし」と反対の事例を取り上げて検討する。「結」;「それゆえ」と結論を導き、「つまり」と最後のまとめを書く、ということであった。

ここで書き方編は終了し続いてウェブの使い方の話となった。

まず前回と同じく調べたときに出典を書くということだった。ウェブの場合は、「制作者・サイト名・URL・閲覧日時」の四つが必要という復習を行った。そして、ウェブには嘘の情報が蔓延しているということだった。そのため、誰が書いたかわからない情報は信用が低いため論文には用いてはならないとのことであった。そのため、ウェブ上の情報は制作者が誰なのかということを確認することは重要なのである。しかし、「実名を出している目立ちがりの人」もいるため、制作者自身の名前をウェブで検索して、学者としてきちんと研究の上で載せているのかということを確認するべきだという。しかし、情報の信用性を判定するためには、出典の書かれていない情報は信用しない、そして出典が書かれていたならば、出典の方を参照すべきだと教えていただいた。そして、ウェブの情報はきっかけとして利用するのが良いのだそうだ。

続いて、ウェブの情報を用いる場合どのようなものを使うかということだった。具体的に「政府、調査機関が行っている統計データ」、「新聞記事のデータベース」などを参考にすると良いということだった。そして、最後に現代社会において信用できる文献とは最終的には学術文献なのだとおっしゃっていた。そして、論文などを検索するときには図書館や Google Scholar を用いるのが良いのだとおっしゃっていた。

今回の講義を受けたことにあたって、私はレポート・論文作成にあたっては、情報源は学術論文や文献に絞って情報収集を行う。

なぜなら、私はインターネットの情報、主に Wikipedia などによく参考にしていた。しかし、山口教授の話聞く中で、ウェブ情報を調べ、さらにその制作者を調べるということは効率的ではない。さらには、論文を書く際に根拠を示さねばならないのならば、学者が研究を行い確実性の高い学術論文を用いるのが必然だと分かったためである。

コメント [y214]: きっかけとして使うとよいです。

今回の講義は、前回生徒が提出した授業コメントへの応答から始まった。興味・関心は動機になったとしても自分の意見に対する根拠にはならない。これは感想ではなく、客観的にまた論理的に説得力のある文章を構成するにあたって重要な点だ。加えて「考える」「感じる」「印象を持った」という言葉は一見気にならないが、理由や根拠が無く主観的である

ため、使用できない。その他にも箇条書きや長文で書かず、短く切って接続詞でつないだり起承転結に沿って文章を構成する。また「いろいろ」「さまざま」等の言葉を使う前に、引用などを用いて具体的な内容を書く必要がある。

そこで前回の講義でもあったように、引用する際には気をつけなければならないことが3つある。その中の1つが出所表示を明確に示すことだ。制作者や著者、タイトル、URLや出版社、ページ、閲覧日時または出版年等、正確に明記する。また信用出来る情報の見分け方として、制作者や出典、元のデータを検索し確認することが有効である。そしてウェブ情報はあくまでもきっかけとして利用し、信用出来る記述の1つとして学術雑誌に掲載された論文を活用しても良いだろう。

前回と今回の講義を受けて、説得力のある文章を書くためには理由や根拠がいかにか客観的で信用出来るものを使う必要があるか学んだ。これから反復練習を繰り返し、調べて、知り、書き直す「考える」癖を身につけ、論理的思考力を高めていきたい。

コメント [y215]: がんばってください。

今回の講義は、大きく分けて 1.レポートや論文を作成する際に書いてはならない言葉、2.書かなければならない接続詞、3.Web 情報の使い方、の3つのことを学んだ。

1.書いてはならない言葉の例として「思う」「考える」「印象を持った」「いろいろ」「言われている」が挙げられた。大学入試の小論文対策をしたときに高校の先生に「思う」「いろいろ」は使わないように、と教わったが、「考える」という単語は小論文やレポートを書くときに多用していた。そのため私は、なぜ「考える」が使ってはならないのか分からなかった。山口教授によると、それは「思う」と同様に具体性がなく、理由や根拠を書かなくても違和感を感じなくなる言葉であるからである。抽象的な言い回しはレポートを書くときの「逃げの手段」なのだ。レポート、論文をうまく書けるようになるためには逃げるのではなくあきらめずにコツコツ反復練習をこなすことが大事なのである。

2.使うべき接続詞は、「たとえば」「しかし」「それゆえ」などである。小論文を書く時も接続詞には気を付けていたので、使うべきであることに何の疑問も抱かなかった。また、箇条書きは文章ではないので実際にレポートを書く際は使ってはならないが、下書きをする場合は使用するといいい。これも小論文を書くときに私が気を付けて気を付けていたことである。私が小論文の書き方を後輩に教えるとなると、間違いなく箇条書きの使い方は必ず教えるはずである。よって、今回の講義のこの部分はとても共感しながら受けた。

3.Web 情報の使い方、つまり引用するデータの情報源の探し方、利用法。普段生活していて困ることや疑問があるとき、「Yahoo 知恵袋」や「まとめサイト」を多用している人が大勢いるだろう。私もたまに利用して利用している。私生活での疑問でそれらを利用することは何の問題もない。しかし、論文、レポートの作成をするときはそれらは信用しがたいので利用しない**癖**が良いのである。普段それらを利用する私からすると、なぜ情報が信用できないのか頭では何となく分かっていたが理由がはっきりと分かっていた。この講義で学んだが、その理由は「情報を書き込んだ者は匿名の人物であり、誰が書いたか分からない情報は思い込みで書かれたものである場合が多い。論文やレポートは正確な情報を用いなければならないため。」である。この説明を講義で聞いて、何となくでしか分かっていたその理由がはっきりと分かった。Web ページの情報を使用するときはそのサイトの製作者の名前をウェブで認ると良い。歴史家、哲學家など OO 家と名乗る者は、独自研究をもとに情報を公開しているのであてにしないほうが良いらしい。私にとっては、**独自研究**というものがどのようなものなのか把握していないので、この考えは賛成しかねた。

コメント [y216]: 授業でも言いましたが、要するに「根拠のない勝手な思い込み・思いつき」ということです。

今回の授業では、前回の復習と授業コメントの返答から始まった。自分の考えと反対の立場をとるものを調べることで、自分の主張をより論理的にするということだ。

例えば私の場合、ネットで調べて一番上にある情報をすぐ信じ込んでしまうので、その情報と反対のことも調べて対比することが必要だ。しかし、情報を選ぶときにも鉄則があって、匿名ではなく著者が分かるサイトを選ぶことだ。(その著者をウェブサイトで調べて信頼できる人か確かめるとなおよし。)

つまり、私達は一つの情報を鵜呑みにせずに、正しい情報を自分で調べて判断しなければならない。

コメント [y217]: 「なおよし」ではなく、「必ず行く」

今回の講義で、レポートを書くときに使ってはいけない言葉があるということを学んだ。まず「思う」「考える」「感じる」などである。この言葉を使うと収まりが良く感じ、理由や根拠を書かずに終わってしまう。次に「いろいろ」「なんとなく」といった言葉は、あいまいで具体性に欠けるため使うべきでない。「聞いたことがある」「言われている」という表現も、出典がはっきりしないため使うべきでない。反対に、使うべき言葉もある。それは「たとえば・しかし・それゆえ・つまり」の4つの接続詞である。これらを使うことで文章がすっきりとし、わかりやすく意見をまとめることができる。

レポートを書くときに注意すべきなのは言葉の使い方だけではない。情報を引用するためにウェブを利用する際にも注意が必要である。ウェブ上には非常に多くの情報があり、その中には嘘の情報も混ざっている。信用できる情報を見分けるためにはまず制作者を調べる必要がある。また、出典が書かれていない情報は信用してはいけない。書かれていたらその出典のほうを参照する。そうすると最終的に、「信用できる記述」というのは「学術論文」に至る。ウェブページというのは他に情報源があるものであり、あくまで情報を調べるときのきっかけとして利用するものである。

現代では多くの人がスマホやパソコンを所持しており、すぐになんでもインターネットで調べることができる。私自身、分からないことがあればまずインターネットで検索することが習慣になっている。これまでに辞典を気にしたことはあまりなかった。しかしこれからレポートを書いていく中でウェブを使って情報を集めるとき、辞典を確認する作業は欠かせない。また引用した資料の辞典を明らかにすることで、自分が書いたレポートの説得力を強めることもできるのだと今回の講義を受けて思った。

今回の授業では、主に論文の書き方とウェブの使い方について話が進められた。まず、論文の書き方についてである。論文では、自分の意見を根拠づけて述べなければならないという前提がある。そこで常に注意したいのが、論文で書いてはならないワードについてだ。そのワードとして真っ先に挙げられるのが、「思う」である。文末に「思う」と書くだけで、そこで述べた自分の意見が不安定なものになり、理由や根拠を書かなくても気にならなくなるのである。だから、「思う」と書いてしまった時には、それを消して、その代わりに理由や根拠を考えることが重要だ。また、「思う」と同じような使い方によく使用される「考える」「感じる」「印象をもつ」「聞いたことがある」といった言葉にも注意したい。その他にも書いてはならないワードがいくつかある。例えば、「いろいろ」や「さまざま」、「ある程度」や「何となく」である。具体的に書かずこのような言葉を使うから、文章が上手く書けず、自分は文章を書くのが苦手だ、と思うのである。また、「楽しかった」や「〜と知って驚いた」という言葉は単なる感想であり、評価の対象とすることができないので、



これらも、書いてはならないワードの一つである。

ここで、逆に書かなければならないワードもある。「例えば」「しかし」「それゆえ」「つまり」の四つだ。短く切って接続詞でつなぐことが重要である文章では、この四つの言葉をいかに駆使するかがその文章を左右する。それぞれの言葉を起承転結の順に使い、文章をまとめると良い。

次に、ウェブの利用法である。ウェブを利用する際に最重要なのが、その調べた内容が信用できるものであるかということである。では、どうそれを判断するのか。最初に、情報の製作者を確認しなければならない。ただし、ただ単に「実名をだしている目立ちたがりの人」もいるので、その製作者の名前をウェブで検索することが必要となる。つまり、出典の書かれていない情報は信用すべきではない、ということだ。出典が書かれていたらその出典のほうを参照し、最初のウェブ情報はきっかけとして利用するのがよいのである。

ウェブ情報をより確かなものにする方法として、効果的なことが二つある。一つ目は、政府や調査機関が行っている統計データを使うことだ。ある情報を「孫引き」するのではなく、元データを自分で探すことが大切なのである。二つ目は、論文を検索することだ。現代社会において「信用できる記述」は最終的には「学術論文」に至る。だから、日本そして欧米の論文を検索して信用できる情報を探し求めることが大切だ。

我々は普段からあらゆる場面でウェブを使い、その情報をもとに生活を営んでいる。さらに、ある個人が得た情報はSNSなどを通して瞬間的に拡散する。だからこそ我々は普段から、出典の書かれていない情報は信用しないことを頭において出来るだけ信用できる情報を探し求め、ウェブ情報を活用していかなければならない。

今回の授業では、論文を書く際に使ってはいけない言葉とウェブ情報をどのように用いればよいのかということ学んだ。使ってはいけない言葉は、『「思う」「考える」「印象を持った』や『「いろいろ」「さまざま」「ある程度」「何となく」「考えさせられた」「聞いたことがある」「言われている」「楽しかった」「～と知って驚いた』である。「思う」を使うと、「理由や根拠を書かなくても気にならなくなる」ため、使ってはいけないということを理解した。『「思う」を書いてしまった場合には、それを消し、代わりに理由や根拠』を入れなければならない。また、「いろいろ」や「さまざま」「ある程度」「何となく」「考えさせられた」を使ってしまうと、「具体的に書くことをしないため、文章を書くことが苦手になる」ということも理解した。また、「聞いたことがある」「言われている」を使うのではなく、「出典をきちんと調べる」ということも理解した。そして、「楽しかった」「～と知って驚いた」では、「単なる感想になってしまう」ため、使ってはいけないということも理解した。

ウェブ情報に関しては、「きっかけとして利用するのがよい」ということを理解した。また、真実かどうかを確かめるために、「政府や調査機関が行っている統計データを確認すること」も必要であるということも理解した。「出典が書かれている場合には、その出典を参照すること」が大事である、ということも理解した。(山口裕之 『コピペと言われないレポートの書き方教室』 新曜社,2013,p.29-p.31、p.61-p.63)

論文を書くには、前回の授業でも出てきたが、繰り返しが大事である。使ってはいけない言葉の中には、よく使っている言葉もある。そこで、繰り返し練習することで、具体的なことを書くことができるようになり、使ってはいけない言葉を使う回数が減っていくのである。

コメント [y218]: 『』と「」の使い方が逆です。

今回の講義では、レポートで書いてはいけない言葉と書かなければならない接続詞を学んだ。

まず、「思う」という言葉を書いてしまうと理由や根拠を書かなくても気にならないので、「思う」と書いてしまったら、理由や根拠を考えて書き直す必要がある。また、「感じる」、「考える」、「印象を持った」、といった言葉も書いてはいけない。さらに、「いろいろ」、「さまざま」といった言葉も書いてはいけず、具体的に考えたことを書くことが求められる。

次に、文章は短く切って接続詞でつなぐことが重要である。また、文章を書くときには、「例えば、しかし、それゆえ、つまり」の4つの接続詞を使って書くことが必要である。その際、ところでは使わないほうが良い。前回と今回の授業で特に重要なのは、抽象的ではなくて具体的に考えたことを書くということである。

今回の授業での意見については、いろいろ、さまざまという言葉は、本当に便利な言葉である。なぜなら、これらの言葉を使うと、具体例をあげなくても説明ができてしまうからだ。しかし、レポートにおいては、具体例や反対の意見を考えて書くことが必要なので、使ってはいけない。小論文を書くときは、これらの言葉を使っても何も注意はされなかった。小論文で合格した私にとって、これらの言葉を書いてしまう癖がついているので気をつけたい。

最後に、小論文では「確かに」を書くよう指導されたが、レポートや論文を書くときにこの言葉を書いて大丈夫なのか知りたい。

今回の授業では、「～と感じた」「～と思った」「～と考えた」等の表現はレポートには相応しくないということを学びました。しかし、読書レポートは普通のレポートとは違って、読書感想文と大体似たようなもの、「思い」を述べるものです。ですから、理由を明らかにするのであれば、読書レポートでは「～と感じた」「～と思った」「～と考えた」等の表現をしてもいいのではないのでしょうか。読書レポートではそのような表現をしてもいいのでしょうか？

先生は講義中「色々ある」「考えさせられた」は禁止だ!と言ってらっしゃいました。理由としては、「それで理由や内容をぼかすからだ」と。しかし、個人的に、そういった文を「なぜなら～」と繋げる文章でよく使い、それが癖になっています。なぜなら、そのようにして文章をまとめた方が、読み手も読みやすいのではないかと感じるからです。このような使い方もダメなののでしょうか？

あと、質問ではないのですか、教室入って一番右側の机の1番後の女子3人組うるさすぎます。左側だけではなくて、右側も先生に巡回して欲しいです。

今回の授業では、論文・レポートにおいて、書いてはならない言葉、書かなければならない接続詞、ウェブ情報の使い方について学んだ。例えば、書いてはならない言葉として、「思う」や「考える」が挙げられた。私は、文章を書く時に「思う」と「考える」をよく使っていた。今回、それらの言葉は書いてはならない言葉だと聞いて、質問したいことがある。それは、「～だから、私は～だと思おう」という文章でも、「思う」を使ってもいいと言えるのかということだ。この文章では、「～だから」の部分で理由や根拠を述べている、そして前回の授業で聞いた、根拠を調べて、自分の考える正解や主張を書くのが論文・

**コメント [y219]:** 「確かに～だ。しかし、～だ」というふうに、必ず「しかし」と一緒に使います。

**コメント [y220]:** 読書レポートも「レポート」ですから、「感想」ではなく、それを読んで考えたこと(その本をきっかけに調べ、知り、比較検討したこと)を書くようにしましょう。

**コメント [y221]:** 「色々」や「考えさせられた」(具体的な内容を書かずにごまかす言葉)のあとに、どうして「なぜなら」(理由を示す言葉)が来るのですか？

**コメント [y222]:** H先生に言っておきますが、大教室なので、隅々まで目が届かないことがあります。ご自分で、「すこし静かにしてもらえませんか」と注意してもらえるとありがたい。

**コメント [y223]:** 授業でも言いましたが、毎年、このように書く学生さんがたくさんいます。ここまで読んでもらったら分かるように、今年もです。いままでのやり方にこだわらずに「思う」を使わずに書く練習をしてください。いつまでもこれまでのやり方に固執しているとレベルアップしません。

レポートであるという条件を満たしている。それでも、自分の考えを述べる時に使う「思う」や「考える」を使ってはいけないのか気になったので質問したい。また、これらの言葉を使わない場合は、文末が断定になるが、論文・レポートで、「考える」などの言葉が使えないと、**自分の仮説も書けないのではないかと**いうことも疑問な点である。文末表現以外にも、書いてはならない言葉として、「いろいろ」や「さまざま」が挙げられた。これらの言葉を使ってしまうのは、具体的に書かないからだと授業で聞いたが、**具体例はどれだけの分量を書けばいいのか**を知りたい。具体例は挙げるときりがなく、全部書いていくと、とても長い文章になってしまい、1番言いたいことがわからなくなってしまう。しかし、「いろいろ」や「さまざま」でまとめてしまうのも良くない。だから、こんな時に具体的なことをどう書いていくのが良いのかを知りたい。最後に、ウェブ情報の使い方についても質問がある。ウェブには嘘が多いため、論文・レポートに、ウィキペディアなどの誰が書いたか分からない情報を使ってはならないということは理解できた。しかし、嘘が多いならば、**何のために、誰のために**ウィキペディアのページが作られるのか。これが質問したいことである。信用できない情報ならウィキペディアは必要ないが、何かを検索した時に1番上に出てくるのはウィキペディアである、という点で矛盾していることが質問の理由である。

**コメント [y224]:** 仮説も、根拠があって立てるものです。勝手に思いついてはいけません。

**コメント [y225]:** 一般的な基準はありません。実際に書いたものを自分で読み直し、教員にもコメントしてもらって学んでください。

**コメント [y226]:** 人は常にレポートや論文を書いているわけではありません。ちょっと調べて確認したい時などには役に立つこともあるのでしょうか。

4月21日の授業は、前回の小テストの答えからはじまりました。その後に、レポートでは書いてはいけない言葉を教わりました。「~と思う。」や「いろいろ」、「さまざま」のような言葉です。レポートには、理由や根拠が必要です。また、具体的に書かなければなりません。

そのためには、文章を短く切って「たとえば、しかし、それゆえ、つまり」の4つの接続詞でつなぐことが基本です。このように起承転結でまとめます。箇条書きはしてはいけません。

ウェブの利用法についても学びました。ウェブ情報はきっかけとして利用し、出典の書かれていない情報は信用してはいけません。製作者を確認し、製作者の名前をウェブで検索する必要があります。そういうふうにして、正しい情報を選びます。

質問です。ウェブの情報は、手軽に探すことができ、便利ですが、**やっぱりちょっとも使ってはいけないですか?**

**コメント [y227]:** そんなことは言っていないです。

今回の授業では、最初に前回の小テストの答えと前回の要点を確認した。前回の要点である、根拠は調べなくてはならないということ、調べて発表するだけではコピペになってしまうこと、そしてコピペではなく引用するべきであるということを再度確認できた。また、前回の自分の学生コメントとそのコメントに対する教員方のコメントを読むことで自分の至らなかった点と疑問点の解消ができた。私の疑問点は「電子辞書の出所表示はどのように示すのが正しいのか」というものだったが、電子辞書であっても同じように出所表示をすればよいとわかった。授業の中では、みんなの疑問点として大きく「興味や関心」、「記憶は正確」、「反対の立場を考慮する理由」、「正解がない問題」、「民主主義」の五つが紹介されていた。興味や関心は自分の主張が正しいことの根拠にはならないため論文やレポートでは表に出してはいけないこと、記憶はいい加減なため必ず出典を明記すること、論理的に正しい主張をするために反対の立場を考慮すること、ということが再度説明され前回よりも深く理解できた。また、正解がない問題を論理的に説明し決めていくことが大切であること、論文やレポートを通して意見を異にする他者と対話する能力は民主主義や

民主主義社会を支える基礎であることも理解できた。特に反対の立場を考慮するとはどういうことかということが、教科書を読むことでより納得できた。

次に、書いてはならない魔法の言葉について説明を受けた。たとえば「思う」、「考える」、「感じる」などと、「いろいろ」や「ある程度」、「考えさせられた」、「言われている」、「驚いた」などの言葉である。「思う」などの言葉は理由や根拠を書かないための逃げ道であるため理由や根拠を書かなくてはいけない、「いろいろ」などの言葉は使わず具体的に書く、「言われている」と曖昧に書くのではなくきちんと出典を調べる、単なる感想を書かない、というような説明をそれぞれに受けた。

反対に書かなければならない接続詞についても説明を受けた。具体的に言うと「たとえば」、「しかし」、「それゆえ」、「つまり」の4つである。これらの接続詞を使うことで、文章一つ一つを短く切りつつ「起承転結」の構成にすることができると説明を受けた。また、「ところで」と箇条書きは良くないとも説明をされた。

次に、再度コピペではなく引用をするということの確認をした。特に出所表示する出典の一つであるウェブサイトについての説明を受けた。特にウィキペディアは誰が書いたかわからない情報のため信用できない、嘘が紛れている可能性があるため使ってはいけないとおっしゃっていた。また、信用できる情報を見分けるための手段について教えて頂いた。それは、出所表示に示すべき情報の一つである「制作者」を確認することである。具体的な確認方法として制作者の名前をウェブで検索してみるというものがある。検索してみるとそのひとの肩書などがわかるからである。また調べた内容が信用できるかどうかの判定のポイントも教えて頂いた。そのポイントは、出典の書かれていない情報は信用しないこと、出典が明記されている場合その出典を参照すること、ウェブサイトの情報はきつかけとして利用することの三つである。

最後にウェブ情報の使い方を二つ教えて頂いた。一つ目はデータを調べるのに使う使い方である。これは政府などの調査機関が行っている統計データや新聞記事のデータなどである。ウェブで気になる情報を見つけた時に、孫引きせずきちんと元のデータを調べることでより正確な情報を集められる。二つ目は論文を検索するという使い方である。授業の中で、現代社会において信頼できる記述は最終的に「学術雑誌」に掲載された論文である「学術論文」に至ると説明を受けた。また日本語論文よりも英語論文のほうが情報を多く得られると知った。

今回の授業を受け、ウェブサイトの情報の取捨選択の大切さを特に理解できた。今回教えて頂いたポイントを使い正確性のある情報を調べるためにウェブサイトを使う練習を繰り返すことが、きちんとした論文やレポートを書くために私には必要である。また英語論文をしっかりと理解するために、積極的に英語論文に挑戦することと英語力の向上も必要である。

今回の授業では前回と同じくレポートの書き方を学んだ。より詳しい話だったが、特に引用する際の注意点は今まで知らなかったもので、実際にレポートを書く際に役に立つだろう。インターネットからあらゆる情報を入手できるので、わからないことを調べたり、自分の考察を確かめたりしてレポートを書くことになるが、引用するには出典を明記しなければならない。出典には URL やページ名などのほかに制作者も明記しなければならないと聞いて驚いた。また制作者の名前がないサイトは引用してはいけないと言われた。私を知る限り、普段見ているような情報サイトには制作者の名前を載せていないサイトが多々あり、ほとんど引用できないように思われたが、そうしたときはその情報元をたどっていったら確かな情報だと確認できるものを引用すればよいと聞いて納得した。今までサイトの情

コメント [y228]: どういうふうに理解したのか、書いてください。

コメント [y229]: これまでの英語力でたぶん結構使えます。あとは「やる気」だけです。

報の出典などは気にしたことがなかったので気づかなかったけれど、出典のない情報はデマであるかもしれないと疑うようにしていきたい。

今回の総合科学入門講座では、第一回目である前回は引き続きレポートの書き方講座が行われた。授業の内容は大きく二つに分かれた。一つ目は、レポートを書く上で使ってはいけない言葉と接続詞についてなど、前回の復習となるものだ。二つ目に、レポートを書く上で必ず必要となるデータや情報についてが説明された。きっかけとしてのウェブ情報の利用や、そのウェブ情報から信頼できる元の情報を探す方法、データや論文の探し方の説明が行われた。

ウェブ情報の信頼性を確かめるために、制作者の名前をウェブで検索するという説明があったが、同姓同名の別人が多くいる可能性があるし、検索した制作者についての情報が正しいかどうかは疑わなくてもいいのだろうか。どこまでのウェブ情報を疑い、どこから信頼できる情報とみなすのかが気になった。

**コメント [y230]:** 「間違いない」と自分が納得するまで調べましょう。